

Kyoto International Performing Arts Festival 2012



# KYOTO EXPERIMENT



京都国際舞台芸術祭

**KYOTO EXPERIMENT 2012**

## 目次

ごあいさつ .....	4
地図を捨てる、世界と出会う 橋本裕介 .....	6
地点 .....	12
砂連尾理 / 劇団ティクバ+循環プロジェクト .....	16
レイジーブラッド featuring Reykjavík! .....	20
杉原邦生 / KUNIO .....	24
リア・ロドリゲス .....	28
チョイ・カファイ .....	32
高嶺格 .....	36
池田亮司 .....	40
ポツドール .....	44
ASA-CHANG&巡礼 .....	48
ビリー・カウィー .....	52
KYOTO EXPERIMENT フリンジ “PLAYdom ㇿ” (プレイダム) .....	58
KYOTO EXPERIMENT 関連イベント .....	62
KYOTO EXPERIMENT 提携プログラム .....	66
クレジット .....	72
チケット .....	74
会場アクセス .....	76
カレンダー .....	78

## Contents

Greeting .....	4
<i>Throw out the map. Encounter the world.</i> Yusuke Hashimoto .....	6
Chiten .....	12
Osamu Jareo / Thikwa + Junkan Project .....	16
Lazyblood featuring Reykjavík! .....	20
Kunio Sugihara / KUNIO .....	24
Lia Rodrigues .....	28
Ka Fai Choy .....	32
Tadasu Takamine .....	36
Ryoji Ikeda .....	40
Potudo-ru .....	44
ASA-CHANG & Junray .....	48
Billy Cowie .....	52
KYOTO EXPERIMENT Fringe “PLAYdom ㇿ” .....	58
KYOTO EXPERIMENT Related Events .....	62
KYOTO EXPERIMENT Affiliated Program .....	66
Credit .....	72
Tickets .....	74
Access .....	76
Calendar .....	78

## ごあいさつ

旧約聖書『創世記』に記されるノアの方舟の物語。その中では、洪水から数十日の後、漂流する舟から空に放たれた一羽の鳩が、オリーブの葉をくわえて戻り、ノアたちに水が引いたことを教える重要な役割を果たしました。

私は、文化芸術にはこの鳩のような役割があるのではないかと思います。時代が混迷を深め、既存の“地図”を頼ることが難しくなる時、文化芸術こそが私たちに希望をもたらし、新たな“世界”を指し示してくれると確信しています。

2012年秋、3回目を迎える「京都国際舞台芸術祭」がいよいよ始まります。京都をはじめ、国内外から集まったアーティストは、私たちにどのような新しい“世界”を見せてくれるでしょうか。多彩なプログラムにより繰り広げられる「京都の実験(KYOTO EXPERIMENT)」に大いに期待しています。

結びに、太田耕人委員長をはじめ京都国際舞台芸術祭実行委員会の皆様、並びに関係者の皆様に深く感謝するとともに、本芸術祭が全ての皆様にとって実り多いものとなりますよう祈念いたします。

京都市長 門川大作

EXPERIMENTという語は、「試す」というラテン語に由来します。

京都国際舞台芸術祭 KYOTO EXPERIMENT は、1年目に先端的な舞台芸術のショーケースをお目につけ、2年目に美術の領野への越境を試みました。

3年目の今年は、音楽への接近を試みます。伴奏ではなく、振付をリードし、踊りを導く音楽のありかた。電子音楽から生まれるサウンドアートの世界。ライヴハウスにひそむ演劇的な仕掛け。

ダンスであれ、演劇であれ、そこには音楽と同じく「リズム」が遍在します。ルートヴィヒ・クラークスを気どれば、意識的に同一のものを反復する「拍子」とちがひ、リズムは岸辺に寄せる波のように、少しずつ異なったものがつねに新しく、立ちあらわれます。私たちのあり方を反映した、そうした内的リズムを見出すことが、あらゆる芸術家の関心事なのです。

むしろ現代舞台芸術は音楽だけでなく、さまざまなものと混交します。映像と舞台との拮抗、現代演劇と児童演劇との接合、障がい者との協同から生起する作品など。昨年に引き続きブラジルから招聘する作品や、美術作家・高嶺格がブラジルのフェスティバルと共同製作する作品にも、異種混濁的な性質がみられることでしょう。ルネサンス期、錬金術は異種の材料を混合して新物質を作ろうとし、そうした離れ技をEXPERIMENTと呼びました。舞台上でくりひろげられる錬金術的な創造の数々、どうぞお楽しみください。

京都国際舞台芸術祭実行委員長 太田耕人

## Greeting

Let us remember the account of Noah's ark in the Old Testament's Book of Genesis. It is said that many days after the flood, a dove released by Noah from the ark returned to it holding a fresh olive branch in its beak, playing the significant role of informing him that the waters had receded.

It is my belief that the arts and culture play a role similar to that of Noah's dove. In times when confusion and despair deepen, when it becomes difficult to rely on the existent "map", it is precisely the arts that give us hope, and show us the way to a "new world". Autumn 2012 marks the beginning of the third edition of Kyoto International Performing Arts Festival. We are all expectant to see what kind of "new world" the artists, gathering in Kyoto from all over Japan and the world, will show us. We are looking forward to the unfolding of the multicolored program of this year's "experiment".

Let me finish by expressing my deepest gratitude to the members of the KYOTO EXPERIMENT Executive Committee, beginning with its Chairman, Mr. Kojin Ota, as well as to all of those involved in the realization of this festival. I hope it will be fruitful and constructive for everyone.

Mayor of Kyoto Daisaku Kadokawa

The word EXPERIMENT comes from the Latin word "trial".

KYOTO EXPERIMENT presented a show case of cutting edge performances in 2010 and, in 2011, crossed a border into the realm of visual arts.

In 2012, its third year, KYOTO EXPERIMENT turns to music. We explore music not as accompaniment but as something to lead choreography. You are about to witness a world of electronic sound art and a theatrical scheme hidden in a live house.

Whether dance or play, there is rhythm. As Ludwig Klages may say, unlike a "beat" which is a conscious act of repeating same interval, "rhythm" segues into a slightly different life form every time, just like waves against the shore. It is in all artists' interest to portray the internal rhythms of our own that reflect our beings.

Performing arts include many different aspects within them, music being one of them.

For instance, a fusion of non-fiction and fiction, the perfect harmony of film and performance, a conjugation of contemporary theater and a play for children, and collaborating with the disabled are descriptions of the works to be presented. Following last year, the work from Brazil and the new art work by Tadasu Takamine, co-produced by a dance festival in Brazil, will also add to this heterogeneous mixture.

During the Renaissance, alchemy was an endeavor to create a new substances by mixing various different materials. And they called such feats "experiments". I hope you enjoy the alchemic creations you'll see on the stage at KYOTO EXPERIMENT.

Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Chairman Kojin Ota

## 地図を捨てる、世界と出会う

KYOTO EXPERIMENTは3回目を迎える。確かな海図を持たずに船出をし、その時々  
の出会いを手がかりにネットワークを構築しながら、国際舞台芸術フェスティバルとして  
徐々に形を成してきた。継続する上では、内容もさることながら、運営上のさまざまな組み  
組みを行うことで、京都というこの地域の中で舞台芸術をどのように位置づけていくか、徐々  
にヴィジョンを持つことが出来るようになってきた。フェスティバルに限らず、舞台芸術の  
活動そのものも継続することが困難な現在、多大なご支援とご協力を得て開催出来ること  
にまずは感謝したい。

今年の公式プログラムについてご紹介する。

京都の劇団地点とは、フェスティバルにとっても劇団にとっても初めての試みとなる「子ども  
劇」を創る。創造する場としての劇場のない京都において、未来の観客・舞台人を育成す  
ること、そしてレパトリーを生み出すこの重要な仕事に共に取り組みたいと考えている。も  
うひとりの京都のアーティスト杉原邦生は、彼の大学の恩師でもある故太田省吾の代表  
作のひとつ『更地』に挑む。この戯曲の風景が震災後の現状とどのように響きあうのか、現  
実へと応答する杉原の視点が試されることになるだろう。そして、神戸のダンスボックスが  
5年来取り組んできた「循環プロジェクト」と「劇団テイクバ」のコラボレーションを紹介する。  
「障害」と「健常」など、私たちの日常に無意識に入り込み、認識や行動を規定する境界  
線を問いなおす機会にしたい。リアルとは何なのか？ ポッドールの作品を観て単に現在の  
東京のポートレートを感じ取ったつもりになってはならない。むしろそこで描かれるのは、根源  
的な人間存在、それも空虚さであり、極めてフィクショナルな次元の情景であるはずだ。

海外から紹介するのは、アイスランド発のパフォーマンス・ユニット、レイジーブラッド。  
会場はさまざまなジャンルのカルチャーが交錯し、クリエイティブの萌芽を育ててきた京都  
の老舗クラブ「METRO」。観客とパフォーマーが渾然一体となる場がどのような圧倒的な  
体験を生み出すか期待してもらいたい。そしてシンガポールのアーティスト、チョイ・カファイ  
は2作品の連続上演を通じて、現在のダンスの状況を思考する。もはや世界的にも拡散  
し、捉えどころがなくなった感のあるコンテンポラリーダンス、これを大文字の歴史と個人  
史の両者からアプローチすることで、未来のヴィジョンを提示するはずだ。

昨年に引き続き、ブラジルから招聘するアーティストとして、今年にはリア・ロドリゲスの作  
品を上演する。個人と集団の関係を問うこの作品は、現在のブラジルの社会に織り込まれ  
た政治的・歴史的背景を浮かび上がらせることになる。同時に、芸術が社会とコミットする  
とはどういうことか、彼女の活動そのものも通じて考えてみたい。一方日本からは、昨年に続  
いて高嶺格がブラジルからインスパイアされた作品を制作する。今年にはパフォーマンスと  
いう形式をとり、日本とブラジルの往還は〈身体〉を媒介にして新たな像を浮かび上が  
らせるだろう。今年のプログラムのひとつの軸になっているのは「音」に関わる演目だが、  
コンポーザー、ヴィジュアル・アーティストとして知られる池田亮司が、「劇場」で作品を発表  
する。音と映像によって包み込まれる劇場体験は、日常とは完全に異なる知覚体験を呼び  
覚まし、ライブの定義を更新することになる。ダンスと音楽の相思相愛な関係などない、ダンスの  
側からの片思いだった状況に、ミュージシャンASA-CHANGが応答する。音楽が生  
み出す多層な構造を、ダンスがまさに立体化する場に立ち会ってもらいたい。最後に紹  
介するのは、フェスティバル期間を通じて展示されるビデオ・インスタレーション。スコットラン

ドのアーティスト、ピリー・カウィーによる3Dビデオ・ダンスに現れる不在の身体は、私た  
ちの身体にまつわる意識が今どこにあるのか、それを知る手がかりを与えてくれるだろう。

さてこれらのプログラム、ひとつひとつを見ていけば、その必然性を感じ取ってもらえるはず  
だ。一方でそれらを押し並べて見たとき、ある種の「あいまいさ」を感じる人々も多いのでは  
ないかと想像する。複数の芸術ジャンルにまたがる表現だったり、異なる背景を持った者が  
共存する表現であったり、カテゴライズすることが困難な作品が多いことは確かだと思う。

しかしそれは敢えてだと言いたい。今私たちが区別するために使っている言葉は、事後  
的に誰かが名付けたに過ぎず、特に芸術に関わることはもともと極めて曖昧だったと思う。  
しかも今よりずっと、あやしく魅力のあるものとして始まったはずだ。それが徐々に輪郭が  
明快になり、分かりやすい言葉で区別され、人口に膾炙していったのだ。しかしその明快さ  
は疑ってかかるべきだろう。

いま、現実の世界はあらゆる空間が明快な境界で区切られていき、曖昧な場が徐々に  
失われている。つまり「あいまいさ」が現実の上でも、私たちの精神の上でも限られて来て  
いるのだ。新たなものが入り込む余地などない状況で、どうやって現実の困難に対処してい  
く想像力を持つことが出来るだろう？

今年のプログラムを貫くメッセージが何なのか、最初に浮かんで来たフレーズは以下の  
ようなものだった。

「新しい地図を作る試み」

「京都から地図を更新する」

こういったフレーズは力強いし、分かりやすいし、どこかで聞いたことすらある。しかしこれ  
は正確ではない気がする。「地図」とはそもそも何らかの主体が作ったもので、その視点か  
ら見た世界というものが描かれているに過ぎないからだ。だからこそ、文化や芸術における  
「地図」といったとき、さらに繊細さが必要だろうと考えた。日本や京都が世界の中で  
境界に位置している現状を嘆いて、ここ京都があたかも芸術の〈中心〉であるかのような振  
舞いのもとに新たな「地図」を作ろうとすることは避けなければならない。なぜなら、そこ  
には傲慢さとともに、かえって世界から孤立する危うさを孕んでいるからだ。

私たちのフェスティバルは、そんな昔ながらの冒険心や、同心円的に版図を拡大するよ  
うな野心で世界と出会うするために構想されたのではない。この時代において〈中心〉  
など存在せず、出会うべき世界＝他者とは、ネットワークの構築によって具体的な点と点  
で確かにつながっていけるはずなのだ。たとえコミュニティの中で多数を占められなくとも、  
そのことを恥じて虚勢を張るのではなく、世界の中に点在する人々と真摯にダイレクトな  
対話を行うことに力を注いだほうが、どれだけ意味のあることだろう。その対話を生む場  
として、芸術は決して低くない可能性を秘めていると信じている。

そんなわけで「もう地図なんて要らないのではないか」と言わなければならないと考えた。  
結果、生まれたフレーズが「地図を捨てる、世界と出会う」である。もうそのことは、多くの  
人が薄々気付いていると思う。

KYOTO EXPERIMENT プログラム・ディレクター橋本裕介とスタッフ一同

## Throw out the map. Encounter the world.

KYOTO EXPERIMENT welcomes its third year. Setting off without a concrete chart, it has gradually assumed its form as an international performing arts festival, finding its way forward and building a network of artists and companies encountered along the way. In the effort of annual hosting, we have developed a vision, not only for the programs, but also for how the organization should run in order for performing arts to take root in Kyoto. First, I would like to show my tremendous gratitude to those who have supported our attempt amid such a difficult time in history for performing arts programs, let alone dance festivals, to sustain themselves.

This year, Kyoto based company Chiten introduces a play for children for the first time since the company was founded. It will be the festival's first children's program as well. It is our desire to produce a larger repertoire and to foster the audience and performers of the future in Kyoto, where there is no theater supporting this kind of creative process. Kunio Sugihara, another artist from Kyoto, challenges to restage *Sarachi (Vacant Lot)*, a work by Shogo Ota, his university mentor. How will this work resonate with contemporary Japan after its experience of the March 11th disasters? Sugihara's perspective on today's reality is tested. The recent collaboration of Junkan Project, a 5 year project at Kobe DANCE BOX, and Thikwa, sheds light on the borderlines that exist in our daily life and that define our perception and action, such as "normal (abled)" and "abnormal (disabled)". The work by Potudo-ru questions our reality. Do not simply assume it's a representation of life in Tokyo. It talks about a fundamental aspect of human existence—void, and what you see on the stage is rather fictional and metaphorical scenery. Lazyblood is a performance unit from Iceland. Their compelling performance, fully involving the audience, takes place at Kyoto's legendary club, METRO where various genres of culture have interacted and stimulated creative minds. Ka Fai Choy from Singapore closes in on the idea of contemporary dance in his double bill performance. Today, Contemporary Dance has broad meanings and understandings throughout the world. Reflecting it both from personal memories of dancers as well as the history of dance, Choy's exploration provides us with a vision for the future. This year's artist from Brazil is Lia Rodrigues. Examining the relationship between the individual and the mass, her work reveals the political and historical background of Brazilian society. At the same time, her projects question what it is for art to be committed to society. Following last year's project, Tadasu Takamine, from Japan, introduces work inspired by Brazil. His performance work embodies the correspondence between Japan and Brazil. One of the axes of this year's program is "sound". Ryoji Ikeda, composer and visual artist, introduces a audiovisual piece in a "theater" setting. The experience of being indulged with sound and images invokes very different perceptual experience from our day-to-day life and re-defines the idea of live performance. Is a mutual love between dance and music possible? ASA-CHANG, musician, responds to the one-way love from dance. The audience will witness how dance dimensionalizes the multilayer structure of music. Last but not least, is the video installation by Billy Cowie from Scotland, which is exhibited throughout the festival. The "absence" of the body in his 3D dance video provides us a clue to find where your consciousness on your own body lies.

Taking a close look at each program, you may discern the reason for this line-up. However, I can imagine that some may find it a somewhat obscure list. Indeed, some works transgress the border of genre and other works are collaborations among artists from different backgrounds. They are the kind of work that is not easily categorized. But it is my intention to introduce these works in KYOTO EXPERIMENT. The words we use to categorize artwork are named only after its creation. I think art was once something much more ambiguous than what it is now. At least, it started as something more mysterious and alluring for that reason. But it has been segmentalized so that it can be understood easily and has now become a household notion. Such simplicity and clarity must be treated with skepticism. Today, all aspects of our lives are segmentalized to be clarified and the place for ambiguity is diminishing. This is happening both in reality and in our perception of reality. How can we continue to have an imagination that allows us to cope with the difficulties in life under such conditions, where there is no room for new and uncategorized elements?

When I thought of what's in common with the program of 2012, phrases like "create a new map" or "redraw the map" first came to mind. Despite its intensity and simplicity, even the familiarity, the description didn't feel right. Because a "map" is something that's created by someone and projects that person's perspective on to the world. I realized I need further delicacy when using the word "map" in regard to art and culture. Lamenting the fact Japan, and even more so Kyoto, is a remote part of the world, and trying to create a new map with the idea that Kyoto as the center of art is not our intention. That suggests a certain arrogance and danger in isolation. KYOTO EXPERIMENT is not shaped upon the traditional spirit of adventure nor the ambition to expand the map in a concentric fashion. In this day and age, there is no longer a "center". And we can link with the "world", which we expect to encounter, in other words the "other", by creating networks. We no longer need to be a majority for our voice to be heard. It is more meaningful to have direct and sincere dialogues with peers who are scattered around the world than feeling ashamed about not being a majority. And I believe that art has a certain potential to provide a platform for such dialogues. That's why I think we probably don't need maps any longer. And the catch copy for KYOTO EXPERIMENT 2012 has become "Throw out the map. Encounter the world." I think many people have likely figured that out, too.

KYOTO EXPERIMENT Program Director Yusuke Hashimoto and Festival Team



# 地点

ch fifteen

KYOTO



Illustration: Atsuko Nakai

## はだかの王様

The Emperor's New Clothes

🕒 60 min (新作 | 世界初演 / New Creation | World Premiere)

📅 9/22 (Sat) 14:00-, 19:00-  
9/23 (Sun) 13:00-, 18:00-  
9/24 (Mon) 15:00-, 19:00- ☐  
9/25 (Tue) 20:00-  
9/26 (Wed) 17:00-, 19:30-

\*開場は開演の15分前  
\*The theater opens 15 min.  
prior to the performance.

☐ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

📍 京都芸術センター 講堂  
Kyoto Art Center Auditorium

👤 対象年齢 5歳~  
Recommended for age 5 & up

原作: ハンス・アンデルセン  
脚本: 戌井昭人  
演出: 三浦基  
出演: 安部聡子、石田大、窪田史恵、  
河野早紀、小林洋平  
舞台美術: 杉山至+鳩屋  
照明: 藤原康弘  
音響: 堂岡俊弘  
衣裳: 堂本敦子  
舞台監督: 大鹿展明  
宣伝美術: 納谷衣美  
制作: 田嶋結菜  
製作: 地点  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT  
京都芸術センター制作支援事業  
助成: 芸術文化振興基金、EU・ジャパン  
フェスト日本委員会  
主催: 合同会社地点、KYOTO EXPERIMENT

Original text: Hans Christian Andersen  
Script: Akito Inui  
Direction: Motoi Miura  
Cast: Satoko Abe, Dai Ishida, Shie Kubota,  
Saki Kohno, Yohei Kobayashi  
Stage Design: Itaru Sugiyama + Karasuya  
Lighting: Yasuhiro Fujiwara  
Sound: Toshihiro Dooka  
Costume: Kyoko Domoto  
Stage Manager: Nobuaki Oshika  
Advertising Art: Emi Naya  
Production Coordinator: Yuna Tajima  
Produced by Chiten  
Co-Produced by KYOTO EXPERIMENT  
Kyoto Art Center "Artist in Studios"  
Program  
Supported by Japan Arts Fund and  
EU-Japan Fest Japan Committee  
Presented by Chiten (LLC.),  
KYOTO EXPERIMENT

「王様は裸だよ」 無垢なことばで演劇そのものを挑発する。  
誰も予想しなかった、地点の新たな挑戦はなんと子ども劇！

**"But he hasn't got anything on..." Provoking theater with innocent words. Chiten's new and unexpected challenge -A play for children!**

京都をベースに、演劇の可能性を問いつける地点が、3年連続でKYOTO EXPERIMENTに登場する。2010年『——ところでアルトーさん、』ではアントナン・アルトー、2011年『かもめ』ではチャーホフを再構築。そして今回は誰も予想しなかった、子ども劇に挑む。原作となるのはアンデルセン『はだかの王様(原題:皇帝の新しい着物)』。脚本を手がけるのは戌井昭人。戌井は主宰する鉄割アルバトロスケットで2010年のKYOTO EXPERIMENTにも参加、小説『まずいスープ』『びんぞろ』『ひっ』で3度の芥川賞候補となっている。知的でスティックに演劇を構築してきた演出の三浦基と、さまざまな大衆芸能からインスパイアされて芝居を創作してきた戌井昭人。一見、好対照な存在に見える両者が、子ども劇という格好の素材で相まみえることになる。見えない衣装を身にまとった王様を家臣らが誉めそやすというアンデルセンの物語は、視点を変えれば「何かを演じる」、「フリをする」という演劇の構造そのもの。誰もが知るこの原作に、深遠さとシュールでバカバカしいテイストを同居させ、地点ならではの舞台が生まれる。はじめて演劇に接する子どもだけでなく、一般の鑑賞者にとっても大いに想像力が刺激される、いわば「子どものためのおとな劇/大人のための子ども劇」が誕生する。

2012 marks the third consecutive year in KYOTO EXPERIMENT for Kyoto-based Chiten, a troupe recognized for perpetually challenging the possibilities of theater. After recreating works by Antonin Artaud, and Chekhov, they now take on the unexpected challenge of staging a play for children. This year, Hans Christian Andersen's *The Emperor's New Clothes* is adapted to script by Akito Inui, best known as the director of *Tetsuwari Albatrossket* –part of 2010 KYOTO EXPERIMENT—and as the author of the Akutagawa-award nominated three times. This play marks the first collaboration between Motoi Miura, who has developed an intellectual and stoic form of theater, and Akito Inui, creator of plays influenced by several kinds of popular arts. Just by looking at their approach to theater, one would think that there is nothing but contrast between them; however they have found a connection in the material provided by a play for children. When seen from a different perspective, Andersen's story, which depicts a king wrapped in an invisible garment being praised by his vassals, presents the structure of theater itself in terms of "pretending" or "playing something". What kind of performance will this universally known story bring about, when combined with a touch of depth, strangeness and a taste for the ridiculous?



## 地点

演出家・三浦基が代表をつとめる。2005年、活動拠点を東京から京都へ移転。2006年、カイロ国際実験演劇祭ベスト・セノグラフィー賞受賞。以降も、モスクワでのチェーホフ2本立て公演を成功させ、2012年にはロンドン・グローブ座のフェスティバルに正式招待されるなど、海外でも高く評価される。また、KAAT 神奈川芸術劇場との継続的な共同制作など、京都に拠点をおきながら国内外で旺盛に活動を展開している。

## 三浦基

1973年生まれ。1999年より2年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリに滞在する。2001年帰国、「地点」の活動を本格化。2005年、『かもめ』にて利賀演出家コンクール優秀賞受賞。2007年より「地点」によるチェーホフ四大戯曲連続上演>に取り組み、第三作『桜の園』にて文化庁芸術祭新人賞受賞。2008年度京都市芸術文化特別奨励者。2010年度京都府文化賞奨励賞受賞。2011年度京都市芸術新人賞受賞。現在、京都造形芸術大学舞台芸術学科客員教授。

## 公演歴

2012  
『コリオレイナス』  
(原作:ウィリアム・シェイクスピア)  
グローブ座(ロンドン)

『トカトントン』  
(原作:太宰治)  
KAAT神奈川芸術劇場

2011  
『かもめ』  
(原作:アントン・チェーホフ)  
京都芸術センター、ART COMPLEX 1928  
(京都)

『Kappa/或小説』  
(原作:芥川龍之介、戯曲:永山智行)  
KAAT神奈川芸術劇場、びわ湖ホール  
(滋賀)

2010  
『——ところでアルトーさん、』  
(テキスト:アントナン・アルトー、翻訳・構成:宇野邦一)  
京都芸術センター、東京芸術劇場

## Chiten

Led by Motoi Miura, a director, the company moved to Kyoto from Tokyo in 2005. Received the best scenography award at the Cairo International Festival for Experimental Theatre in 2006. After having successful performances of two Chekhov plays in Moscow, the company was officially invited to the Globe to Globe Festival at The Shakespeare's Globe in London in 2012. Co-producing with Kanagawa Arts Theatre, the company actively stages its work in Japan and abroad.

## Motoi MIURA

Born in 1973. After spending two years in Paris as a researcher for the Agency of Cultural Affairs, he returned to Japan in 2001 and devoted himself to the activities of his theater unit "Chiten". In 2005 Miura received the Outstanding Performance Award at the Toga Director Contest. Since 2007, the year he was granted the New Director Award at the Agency for Cultural Affairs' Arts Festival with Chekhov's *The Cherry Orchard*, Miura started producing Chekhov's four major plays. In 2008 he received the Special Promotion for Arts and Culture Award from the City of Kyoto and in 2010 the Kyoto Prefecture Culture Award. In 2011 Miura received the Best Young Artist Award by City of Kyoto. At present, he is a visiting professor at the Department of Performing Arts in Kyoto University of Art and Design.

## Selected Works

2012  
**Coriolanus**  
(Text: William Shakespeare)  
The Globe (London)

**Tokatontonto (The Sound of Hammering and)**  
(Text: Osamu Dazai)  
KAAT-Kanagawa Arts Theatre

2011  
**The Seagull**  
(Text: Anton Chekhov)  
Kyoto Art Center, ART COMPLEX 1928  
(Kyoto)

**Kappa / A Novel**  
(Text: Ryunosuke Akutagawa / Adaptation: Tomoyuki Nagayama)  
KAAT-Kanagawa Arts Theatre, Biwako Hall  
(Shiga)

2010  
**—And Then Mr. Artaud,**  
(Text: Antonin Artaud / Translation, Concept: Kuniichi Uno)  
Kyoto Art Center  
Tokyo Metropolitan Art Space

## SPECIAL ARTIST TALK

### 対談 演出 三浦基 × 脚本 戌井昭人

#### Motoi Miura (Direction) × Akito Inui (Script)

**三浦:** 作家とこんなに具体的に言葉を変わしながらつくっていくというのは初めてですが、原作が童話ということもあり、二人の原作に対する距離感はかなり等しいのではないかと思います。そういう意味では、文字通り一緒につくっている感じがある。

**戌井:** この間(地点の)芝居も観て、イメージが広がりました。それぞれの俳優の演技の方法を意識してつくりたいなっていうのはすごくあって、あて書きぐらいの感じに最終的にはしたいなと。

**三浦:** この前会ったロシアの子ども劇を書いている劇作家が、子どもは基本的にどんなに簡単に書いてあるものでも、意味を理解しようとして観ることはしないから、そのことは気にしないほうがいい、って言うってくれたんですよ。つまり、子どもは何を観ているかっていうと、突きつめて考えると大人も一緒なんだけど、ある人がどういう行為をしているのか、どういう情熱を持って動いているのか、そのパッションみたいなものしか見えないと思うんですよ。そういうところを大事につくっていかないと、とは思ってる。

**戌井:** そうなんですよ。鉄割も子供がたまに見に来ることがあって、だいたい、パンツをかぶったり、納豆かき混ぜながらファンキーとか言ったりすると、動きを真似たりしてくれる。

**三浦:** 子ども劇といっても、実は、大人が同伴して

連れて来るってということが非常に重要なことで、その大人が納得してくれないと多分意味がないし、子どもはそばにいる大人の態度をすごく見ている。そして大人の方も、すごく子どものことを気にしているんです。だから、その親と子の関係、保護者、引率者と子どもの関係性に訴える劇をつくるのが、すなわち、子ども劇をやる意味なのかなっていうことには、最近少し気づいてきたんです。

2012年6月8日 京都芸術センターにて  
(対談の全文はKYOTO EXPERIMENTのWebでお読みいただけます)

戌井昭人  
1971年生まれ。パフォーマンス集団「鉄割アルパトロスケット」で脚本や出演を担当。小説『まずいスープ』、『びんぞろ』、『ひつ』がそれぞれ芥川賞候補になる。

**Miura:** It was the first time for me to communicate so concretely when collaborating with an author. But because the original is a fairy tale, I think our remove from the story was similar. That's probably a factor in making it feel like we really are making a piece together.

**Inui:** Watching Chiten's work the other day inspired me and gave me some ideas. I had wanted to work along with the style of the actors. So I was hoping to write a script to fit them.

**Miura:** A Russian playwright for children's theater who I met recently told me that children basically don't search for meanings when watching a play. Thus we don't need to worry about that so much. Their concern is what a person's doing or what motivates him/her, which is indeed ultimately the same for adults. They mostly care about the passion rather than the message behind it. I'm aware that's what's important when creating a work.

**Inui:** That's right. Sometimes children come to see Tetsuware's show. They copy our moves when we put underwear over our head or scream "funky" while mixing Natto beans.

**Miura:** Even as a play for children, the fact that adults are accompanying them is quite critical. A performance must be convincing to the adults too and the children watching their reactions very closely. And the adults do care about the children. I've come to realize that creating a play for children is to make something that speaks to the parent-child relationship or the relationship between a child and his/her guardian.

June 8th, 2012 at Kyoto Art Center

Akito INUI  
Born in 1971. Writes and acts with Tetsuware Albatrossket.  
His novels, *Mazui Soup*, *Pinzoro* and *Hittsu*, were nominated for the Akutagawa-award.



『コリオレイナス』 / *Coriolanus*  
photo: Simon Annand



『かもめ』 / *The Seagull*  
photo: Ayako Abe

# 砂連尾理 / 劇団ティクバ+循環プロジェクト

Staff: fareh / the fiffia x funffian @ rh fedtt

OSAKA + BERLIN + KOBE

## 劇団ティクバ+循環プロジェクト

Thikwa + Junkan Project

60 min (再創作 | 日本初演 / Re-Creation | Japan Premiere)

9/22 (Sat) 16:00-  
9/23 (Sun) 15:00- ♿

\*開場は開演の10分前  
\*The theater opens 10 min.  
prior to the performance.

関連イベント フォーラム「身体/障がい/ローカリティ - 劇団ティクバ+循環プロジェクトをめぐる」 Related Event - Forum → p62

元・立誠小学校 講堂  
Former Rissei Elementary School  
Auditorium



photo: Toshie Kusamoto

障がいと健常、福祉とアート、ドイツと日本、パフォーマーと観客…。あらゆる差異をそのままに、センシティブに研ぎ澄まされた対話が始まる。

**Disability and normalcy, welfare and art, Germany and Japan, performers and spectators...**  
**The beginning of a sensitive and refined dialogue between all differences.**

ベルリンを拠点に活動する「劇団ティクバ」。NPO法人ダンスボックスによってはじめられた「循環プロジェクト」。障がいのあるなしの境界を超えて、舞台表現と向き合うこの2つのプロジェクトは、2009年から国際共同プログラムを継続。今回のKYOTO EXPERIMENTでさらなる展開をみせる。振付、演出を手がけるのは、2008～2009年に文化庁の研修員として訪れたベルリンで、ティクバと出会ったダンサー・振付家の砂連尾理(じゃれお・おさむ)。以来、障がいと健常、福祉とアート、そして日本とドイツといった異なる文脈を超えて対話を生み出し、その差異にひそむ微細な世界に目を凝らしながら、作品として成立させてきた。

今回、このプロジェクトの第3部として7月にベルリンで滞在制作を行ない、現地で作品を発表した。その後、京都では元・立誠小学校を舞台に、作品が再構成される。『劇団ティクバ+循環プロジェクト』の舞台では、容易には共有し得ない差異を互いに抱えたパフォーマーどうしが出会い、言語では決して置き換えられないコミュニケーションを交わす。さらに、プログラマーの望月茂徳によって車椅子のホイールはDJブースのように音を発するインタラクティブな装置となり、照明や音響といった裏方であるスタッフも舞台上でオペレーションを行なう。当たり前ものとして疑いをもっていなかった感覚、常識、そして舞台芸術の制度そのものを問い直す試みとなるだろう。

Although both these projects – Berlin-based Theater Thikwa and Junkan Project, originating from the NPO DANCE BOX – have long worked with theatrical expression beyond the boundaries of the able bodied and disabled, only in 2009 did they become an international conjunct program. For this year's edition of KYOTO EXPERIMENT they will present yet one more development of their work. Choreography and Direction are led by Osamu Jareo, a dancer and choreographer who encountered Thikwa in Berlin during his sojourn as a trainee for the Japanese Agency of Cultural Affairs from 2008 to 2009. Since then, Jareo has not ceased to create a dialogue that transcends the frontiers between different contexts such as disability and normalcy, welfare and art, Japan and Germany. Concentrating on the almost imperceptible worlds that hide within these differences, he has been able to crystallize them and put them on stage. During July, and for the third phase of this project, an artist residence project was held in Berlin, and also a presentation of its results. Now, this work will be recreated in Kyoto at the Former Rissei Elementary School. In Thikwa + Junkan Project's work we witness the encounter of performers who bear differences that seem impossible to reconcile, as well as a kind of communication that could not be achieved with words. On stage, we will find unexpected elements such as an interactive sound-producing device connected to the wheels of a wheelchair created by programmer Shigenori Mochizuki, as well as lighting and sound technicians among other backstage staff performing their usually hidden operations in the open. They will attempt to question not only incontrovertible sensations and common sense, but also the very system of scenic arts.

構成・振付・演出: 砂連尾理  
ダンスドラマトゥック: 中島那奈子  
出演: カロル・ゴレビオウスキ、ニコ・アルトマン、ゲルト・ハルトマン、福角宣弘、福角幸子、西岡樹里、星野文紀、砂連尾理  
アーティストック・コラボレーション: ゲルト・ハルトマン  
音: 西川文章  
照明: 三浦あさ子  
舞台監督: 大田和司  
舞台美術: 望月茂徳、目次護、椎橋伶奈、立命館大学映像学部望月ゼミ  
製作: NPO法人DANCE BOX、劇団ティクバ  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT  
助成: Berlin Senate's Cultural Affairs Department  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Concept, Choreography, Direction: Osamu Jareo  
Dance Dramaturge: Nanako Nakajima  
Dance: Karol Golebioski, Nico Altman, Gerd Hartmann, Nobuhiro Fukusumi, Sachiko Fukusumi, Juri Nishioka, Fuminori Hoshino, Osamu Jareo  
Artistic Collaboration: Gerd Hartmann  
Sound: Bunsho Nishikawa  
Lighting: Asako Miura  
Stage Manager: Kazushi Ota  
Stage Design: Shigenori Mochizuki, Mamoru Metsugi, Reina Shiihashi, Ritsumeikan University Associate Professor Mochizuki's seminar at the Department of Image Arts and Science  
Produced by NPO DANCE BOX, Theater Thikwa  
Co-Produced by KYOTO EXPERIMENT  
Supported by the Berlin Senate's Cultural Affairs Department  
Presented by KYOTO EXPERIMENT

berlin Berlin

## 砂連尾理

1991年、寺田みさことダンスユニット「砂連尾理+寺田みさこ」を結成。2002年TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002にて、次代を担う振付家賞(グランプリ)、オーディエンス賞をダブル受賞。2004年度京都市芸術文化特別奨励者。近年はソロ活動を展開し、舞台作品だけでなく障がいを持つ人や老人との作品制作やワークショップを手がける他、音楽家、臨床哲学者、インタラクティブメディア・アーティスト、情報・ロボット工学者とプロジェクトを行う等、ジャンルの越境、文脈を横断する活動を行っている。

## 劇団ティクバ

1990年に設立、ベルリンを拠点にした、障がいのあるアーティストとそうでないアーティストによるアート・ラボラトリー。全てのティクバ作品の共通点は、そこに携わる人々の持ち味や特徴と、共有する部分を見出し、表現に打ち出すことである。また、演劇、パフォーマンス、音楽、言語、ダンスの境界線上で新たなアートを志向している。

## 循環プロジェクト

障がいのあるアーティストとそうでないアーティストの境界線を、舞台表現を通じて、クリエイティブに超える試みとして、2007年に始動。ここでは「差異」ということを、自然に受け止め、優劣という物差しではなく独自性としてとらえ、幾重にも循環していくような関係性をつくり出す。2008年に初演をむかえた作品『≒2(にあいこーのじじょう)』は国内6ヶ所で上演。

## 『劇団ティクバ+循環プロジェクト』のあゆみ

2007  
NPO法人ダンスボックスによる「循環プロジェクト」始動。砂連尾理がダンスのナビゲーターをつとめる

2008  
文化庁新進芸術家海外研修制度の研修員としてベルリンに滞在した砂連尾理がダンスドラマトゥルク中島那奈子からの提案を受け、劇団ティクバと共同作業を始める

2009  
「劇団ティクバ+循環プロジェクト」始動

10月  
ベルリン、F40スタジオにてショーイング

2011 3月  
Art Theater dB KOBEにて公演

2012 7月  
ベルリン、F40 Große Bühneにて公演

## Osamu JAREO

Jareo founded the dance unit Jareo Osamu + Terada Misako in 1991; a decade later, in the summer of 2002, they were awarded both the Next-generation Choreographer Grand Prix and the Audience Award at the renowned Toyota Choreography Award. Among the recognitions they have received there is also the Kyoto City Art and Culture Prize for the Promotion of Exceptional Artists (in 2004). In recent years he's started a solo career and since then has been expanding the limits of his artistic activity by becoming involved in a wide range of enterprises, such as carrying out stage works and workshops with the elderly and people with disabilities, and creating projects that involve musicians, clinical philosophers, interactive media artist, robotic and information engineers among others. It is a work that transgresses the limits of genres and of contexts.

## Theater Thikwa

Founded in 1990, Theater Thikwa is an art laboratory as well as a social experiment, where artists with and without disabilities meet. All of Thikwa's productions have in common the fact of bringing out both the peculiarities and individual feats of its participants as well as their similarities of expression. Thikwa is a group that works on the borderline between theater, performance, music, language and dance and aims for a new kind of art.

## Junkan Project

Junkan Project was created in 2007 as a creative attempt to erase the boundaries between disabled and non-disabled artists on stage. Here, the notion of "difference" is accepted in a natural way; not as a measure of superiority/inferiority but as a form of individuality. This creates a new form of creating relationships that circulate (this is what the Japanese word junkan means) over and over. Their piece ≒2, staged for the first time in 2008 and performed in six locations around the country until March 2010.

## History of Thikwa + Junkan Project

2007  
Junkan Project was launched at DANCE BOX with Osamu Jareo as choreographer

2008  
Jareo moved to Berlin as a member of the Japanese Government Overseas Study Program for Artists and and Dance Dramaturge Nanako Nakajima proposed the idea of Thikwa + Junkan Project to him and Jareo started to collaborate with Thikwa.

2009  
Thikwa + Junkan Project was launched.

October  
Trial performance at F40 Studio (Berlin)

March, 2011  
Performed at Art Theater dB KOBE

July, 2012  
Performed at F40 Große Bühne (Berlin)



『劇団ティクバ+循環プロジェクト』  
/ Thikwa + Junkan Project  
F40 Große Bühne 2012



『劇団ティクバ+循環プロジェクト』  
/ Thikwa + Junkan Project  
Art Theater dB KOBE 2011  
photo: Toshie Kusamoto

## ABOUT THE WORK

### 『劇団ティクバ+循環プロジェクト』の経緯について

ダンスドラマトゥルク 中島那奈子

『劇団ティクバ+循環プロジェクト』は、振付家やダンサー、ドラマトゥルク、デザイナーそれぞれが意見を交換しながら、同等の立場で作品を作っていけるような、新しい作り方を目指してきました。「障がい」や「健常」、「日本」や「ドイツ」、「パフォーマー」や「観客」、「劇場」や「学校」といった間の境界を越える可能性がここでは試され、そのタイトルも完結した個人の作品とするのではなく、完結しない進行中の状態を暗示する「プロジェクト」となりました。この名称にはまた、これまで日独双方で行われてきた二つの団体の歴史を繋ぎながら、日本側の「循環プロジェクト」で模索された価値の循環を促していく意味も受け継がれています。これまでのダンサーやダンス作品のあり方、そして芸術作品という考えに、この『劇団ティクバ+循環プロジェクト』は問題を投げかけながら、ダンスの新しい感じ方、新しい文脈を見つけ出すことを目指しています。

### About Thikwa + Junkan Project

Dance Dramaturge Nanako Nakajima

The *Thikwa + Junkan Project* aims at a new form of creation. While exchanging opinions and points of view, choreographers, dancers, dramaturges, and designers stand together on common ground and work toward the creation of new pieces. They explore the possibility of crossing the boundaries between disability and normalcy, Japan and Germany, performers and spectators, stage and school. This groundbreaking spirit is evident in their name: Instead of referring to an individual, concluded work, they chose to call themselves a "project", suggesting the incomplete nature of an ongoing process. Besides being a connector between two groups active in Japan and in Germany, this name inherits the spirit of its Japanese part ("junkan" means cycle) by promoting a circulation of values. *Thikwa +*

*Junkan Project* openly questions the way dance and dancers work, and even how works of art in general have been understood, and aspires to find a new way of feeling dance, an entirely new context for it.

中島那奈子  
ダンス研究(ベルリン自由大学、埼玉大学)、ダンスドラマトゥルク。宗家藤間流師範藤間勘那恵。NY、ベルリンでドラマトゥルクとして活躍し、今春ベルリンでシンポジウム「踊りと老い」を企画開催。

Nanako NAKAJIMA  
Nanako Nakajima is a dance researcher (Freie Universitaet Berlin, Saitama University), traditional Japanese dance teacher under the name, Kannae Fujima, and dance dramaturge who has worked in experimental arts in NYC and Berlin. This spring in Berlin she curated and organized the symposium "Aging Body in Dance."

# レイジーブラッド featuring reffiffaffh fih laffffh fh h h featuring reffiffaffh fih

REYKJAVIK



photo: Horður Sveinsson

## The Tickling Death Machine

🕒 75 min (日本初演 / Japan Premiere)

📅 9/26 (Wed) 21:30-  
9/27 (Thu) 21:30-

\*開場は開演の1時間前

\*The theater opens 1h prior to the performance.

📍 METRO



18歳未満、高校生入場不可。  
Suitable for 18 years and older

ライブが型破りなパフォーマンスへと変貌する!?  
アイスランドからパンクでアバンギャルドなユニットが上陸!

**A music concert turns into an unpredictable performance!  
The punk avant-garde unit from Iceland lands in Japan!**

ライブとパフォーマンスが渾然一体。予測不能なジェットコースター的展開で、息もつかせない作品がアイスランドからやってくる! 振付家のエルナ・オーマズドテルと作曲家のヴァルディマル・ヨハンソンによるレイジーブラッドは、世界中のフェスティバルや劇場に招聘されているパフォーマンス・ユニット。ハイとローを自在に行き来しながら、過激に観客を挑発するスリリングなライブを展開。いつしかステージと客席のボーダーを越えて、会場を混沌たるディープな世界へと変えてしまう。世界的に重要なパフォーマンス・アーティストのひとり、ヤン・ファープルをはじめ、著名な振付家の作品に参加してきたエルナは、ビョークやヨハン・ヨハンソン、オルロフ・アルナルズといったアイスランドの音楽シーンを代表するミュージシャンたちともコラボレーションを行ってきた。レイジーブラッドとしては、バンド活動から始めて、近年はパフォーマンスユニットとしてヨーロッパ中で公演を行なっている。そして今回、アイスランドのパンクロックバンドReykjavík! (レイキャビク)と共に、京都メトロへやってくる。北欧の島国として、固有のカルチャーを発展させてきたアイスランド。そのオルタナティブな空気を存分に吸収したレイジーブラッドが、一筋縄ではいかないパフォーマンスで予定調和なライブを蹴散らかす!

No one knows what will happen. The work from Iceland blends live music and dance. It spins the audience like a roller-coaster at breathless speed! Lazyblood, with Erna Ómarsdóttir, choreographer, and Valdimar Jóhannsson, composer, has been touring internationally for the past few years. Shifting back and forth between high and low art freely, they radically provoke the audience. Their thrilling live show crosses the border between the stage and audience and turns every venue they perform into a deep chaotic world. Erna has performed with world-renowned artists and choreographers such as Jan Fabre. She also has collaborated with leading musicians from Iceland such as Björk, Jóhann Jóhannsson, Ólaf Arnalds and more. Started as a band, Lazyblood is now recognized as a performing arts company and mainly puts on shows around Europe. Together with Reykjavík!, the Icelandic punk rock band, they come to perform at Metro in Kyoto.

As an island located at the tip of Northern Europe, Iceland has developed a unique culture. Lazyblood was born and raised in such an alternative environment. Their unpredictable performances challenge our notion of what a live show is!

コンセプト:エルナ・オーマズドテル、ヴァルディマル・ヨハンソン  
音楽・脚本・振付:レイジーブラッド、Reykjavík! (ヴァルディマル・ヨハンソン、オーラス・ハルグリムソン、ヘイクル・マクノソン、クリスチャン・フレール・ハルドソン、アオスゲル・シーグルソン、グエムントゥル・ビルギル・ハルドソン)  
音響:リーヴェン・ドゥッセルラ  
照明:シルヴァン・ラウサ  
制作:エスター・ウェルガー・バルボザ、ア・シャララ・プロダクション  
共同製作:クンステンフェスティバルデザール、コーバヴォグル町  
主催:KYOTO EXPERIMENT

Concept: Erna Ómarsdóttir, Valdimar Jóhannsson  
Music, Text and Choreography: Lazyblood, Reykjavík! (Valdimar Jóhannsson, Þóas Hallgrímsson, Haukur S Magnússon, Kristján F Halldórsson, Ásgeir Sigurðsson, Guðmundur B Halldórsson)  
Sound: Lieven Douselaere  
Lighting: Sylvain Rausa  
Production Manager: Esther Welger Barboza, A shalala production  
Co-Produced by Kunstenfestivaldesarts and The town of Kópavogur  
Presented by KYOTO EXPERIMENT  
Thanks to The National Theater of Iceland, our mothers and fathers, KIMI Records, Reykjavík Loftbrú

## レイジーブラッド

エルナ・オーマズドテルとヴァルディマル・ヨハンソンによる音楽バンド。「レイジーブラッド」としての活動は始動しはじめたばかりだが、彼らのダンスおよび演劇作品は、過去数年の間にヨーロッパ全土をツアーしている。ヘッドバンギングと絶叫アクトを得意とし、コンピュータを駆使して変音をあやつるパフォーマンスは、まるでメタル・オペラの様。観客を笑顔にする、ハートウォーミングな作品は、観る者の人生を変える経験になるかもしれない。現在、来年リリースされるファーストアルバムを制作中。

## エルナ・オーマズドテル

振付家、パフォーマー。レイキャピク在住。1988年、アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル (ROSAS) の主宰するP.A.R.T.S. (ベルギー) を卒業。ヤン・ファーブルのもとで数年、その後、2002年、「Les Ballets C de la B」およびシディ・ラルビ・シェルカウイと共に『Foi』を制作、上演。様々なカンパニーおよび振付家の作品に出演する他、自身の作品制作も手がける。ミュージシャンであり作曲家でもあるヨハン・ヨハンソンや、フランク・ベイ、ダミアン・ジャレおよびヴィジュアル・アーティストであるガブリエラ・フリドリクスドテルなどアイスランドおよび世界中のアーティストとコラボレーションを展開している。

## ヴァルディマル・ヨハンソン

アイスランドの様々なバンドのメンバーとして活動した後、現在は「Reykjavík!」のメンバーとして作曲、演奏活動を展開。「Icelandic Dance Company」のダンス作品のために楽曲も提供。

## Lazyblood

The two members of Lazyblood, Valdimar Jóhannsson and Erna Ómarsdóttir, only recently started their carrier as a band together but their dance and theater productions have been touring all over europe for the past few years. Their speciality is a mixture of unique head-banging and screaming technic. They thrust out something that can be described as electronically distorted metal opera which leaves the audience with smiles on their faces and warmth in their hearts and is possibly a life-altering experience. They are currently working on their first album which will be released at the beginning of next year.

## Erna ÓMARSÐÓTTIR

Choreographer and performer, Erna Ómarsdóttir is living in Reykjavík. She graduated from P.A.R.T.S. in 1998 and worked for a few years with Jan Fabre and later with Les Ballets C de la B and Sidi Larbi Cherkaoui. She has been concentrating more on her own work the last few years, and collaborated with Icelandic and international artists such as Jóhann Jóhannsson, Gabriela Frídríksdóttir, Damien Jalet, Poni, Björk, Arthur Nauzyciel, Lieven Dousselaere, Ben Frost, Ólóf Arnalds etc.

## Valdimar JÓHANSSON

He has been playing with several Icelandic bands from an early age, but is currently composing and playing with the band Reykjavík!. He also composed music for several dance productions of the Icelandic Dance Company.

## IMAGES OF THE WORK

### The Tickling Death Machine



photo: Vasilis Panagiotopoulos



© Christophe Lucien



© Christophe Lucien

『We saw monsters』 / *We saw monsters*  
アーティストック・ディレクション: エルナ・オーマズドテル  
Artistic Direction: Erna Ómarsdóttir



© Bjarni Grimsson

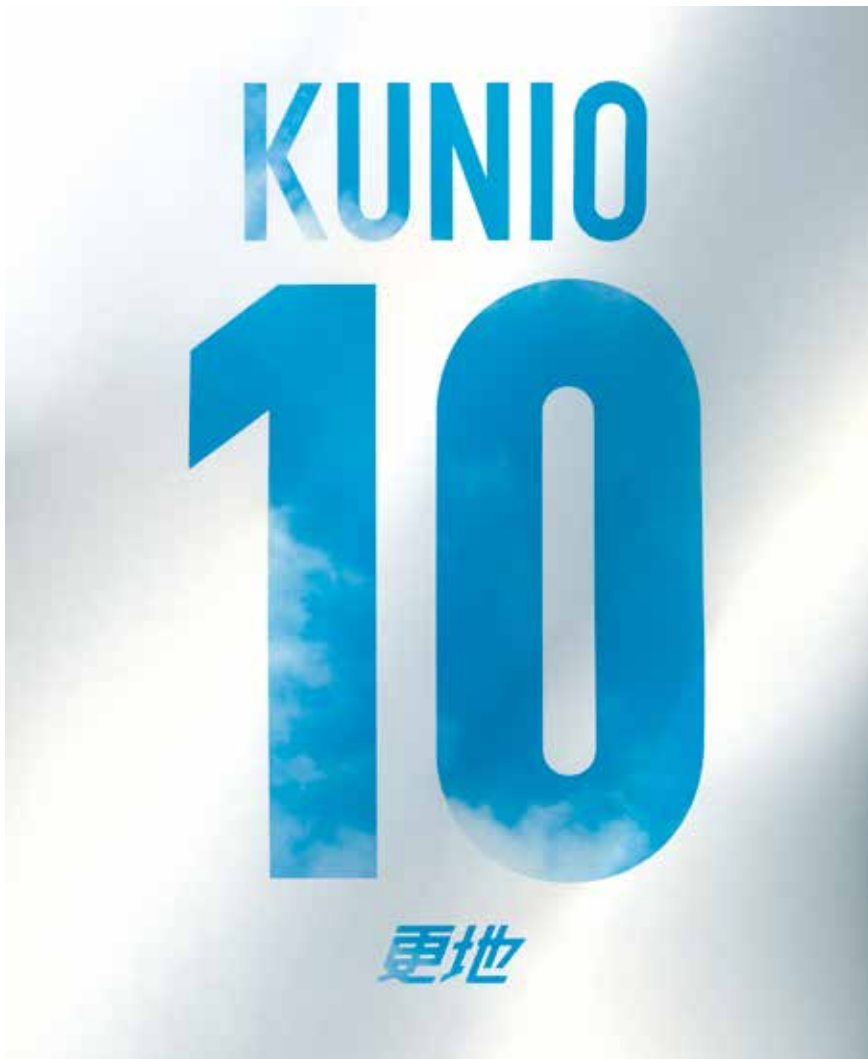


© Bjarni Grimsson

杉原邦生 / h ftnio

h un.fih s.uh fih ara./h ftnio

KYOTO



design: Hiroshi Toyama

## KUNIO10 更地 Sarachi (Vacant Lot)

🕒 90 min (新作 | 世界初演 / New Creation | World Premiere)

📅 9/27 (Thu) 19:30-  
9/28 (Fri) 19:30-  
9/29 (Sat) 16:00- ☐  
9/30 (Sun) 16:00-

\*開場は開演の10分前  
\*The theater opens 10 min.  
prior to the performance.

☐ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

あの太田省吾の代表作『更地』を  
KUNIOはいかにして裏切ることができるのか。

How will KUNIO manage to betray  
Shogo Ota's masterpiece *Sarachi (Vacant Lot)*?

KYOTO EXPERIMENT 2011では、上演時間が約8時間半にもおよんだ大作、KUNIO09『エンジェルス・イン・アメリカ』を発表。複雑な物語と数多くの登場人物を見事にまとめあげた濃密な舞台で、大いに評判を呼んだ。今回は、沈黙劇をはじめ独自のスタイルを追求し続けた、太田省吾の戯曲に挑む。KUNIOは2004年の立ち上げ以来、俳優やスタッフを固定せずに、国内外のヘビー級の戯曲ばかりを選んで上演してきた。観客の予測を裏切るような挑発的な仕掛け、ポップでハイテンションなアプローチ。KUNIOの舞台は常に刺激的であると同時に、戯曲の本質を浮き彫りにしてみせるという、とてもアクロバティックな着地を決めてきた。今回、挑む戯曲『更地』は、転形劇場解散後の太田省吾の代表作となった作品。17年前の阪神・淡路大震災後にも上演され、さまざまな議論を呼んだ。さらに、太田省吾は杉原にとって京都造形芸術大学時代に学んだ恩師でもある。演出家にとどまらず、舞台美術家、企画者としても活躍を見せる杉原が、昨年とは一転して、要素の限られたシンプルな戯曲をどのように扱うのか。舞台は家の解体を終えた更地、たった2人の登場人物に、魚灯の武田暁、イクウメの大窪人衛という実力派の俳優を迎えて、KUNIOがさらなる演劇の地平を切り拓く。

At the 2011 version of KYOTO EXPERIMENT, KUNIO presented its version of the epic KUNIO09 *Angels in America*, a performance that lasted eight and a half hours. Dealing masterfully with a complex narrative and numerous characters, KUNIO received the highest praise for this work. This time, they will try their hand at a work of silent-theater master Shogo Ota an author who never ceased in seeking his own style. KUNIO was launched in 2004 by Kunio Sugihara, then a college student, as a space for a variety of theatrical productions to be staged. Since then, they have been staging mainly difficult plays with a flexible casting. Their work is full of provocative gimmicks which betray audiences' expectations, and reveal an upbeat and pop approach to theater. KUNIO's productions are not only always stimulating but simultaneously manage to bring out the true essence of the plays. This year's production, *Sarachi (Vacant Lot)*, is Shogo Ota's most representative work from the period just before his Tenkei Theater was dissolved. Staged 17 years ago, after the great Hanshin-Awaji Earthquake, it is a piece that has always raised discussion. Ota was Sugihara's former teacher at the university. In his multiple roles as director, stage designer and planner, how will Sugihara show a different approach to that of KUNIO09, in this resource-limited, simple play?

📍 元・立誠小学校 講堂  
Former Rissei Elementary School  
Auditorium

🚫 未就学児入場不可。  
Children under school age are not  
accepted into the theater.

作: 太田省吾  
演出・美術: 杉原邦生  
出演: 武田暁(魚灯)、大窪人衛(イクウメ)  
舞台監督: 大鹿展明  
照明: 魚森理恵  
音響: 齋藤学  
衣装: 植田昇明 (kasane)  
宣伝写真: 堀川高志  
宣伝美術: 外山央  
Web: ヨシダホーセー  
演出助手: 土屋和歌子  
演出部: 楠海緒  
制作: 小林みほ  
協力: イクウメ、エッチビィ、魚灯  
製作: KUNIO  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Text: Shogo Ota  
Direction, Stage Design: Kunio Sugihara  
Cast: Aki Takeda (Gyotou), Hitoe Ohkubo (Ikiume)  
Stage Manager: Nobuaki Oshika  
Lighting: Rie Uomori  
Sound: Manabu Saito  
Costume: Nobuaki Ueda (kasane)  
Advertising Photo: Takashi Horikawa  
Advertising Art: Hiroshi Toyama  
Web Design: Housei Yoshida  
Assistant Director: Wakako Tsuchiya  
Second Assistant Director: Mio Kusunoki  
Production Coordinator: Miho Kobayashi  
In Cooperation with Ikiume, HB inc., Gyotou  
Produced by KUNIO  
Co-Produced by KYOTO EXPERIMENT  
Presented by KYOTO EXPERIMENT

## 杉原邦生

演出家、舞台美術家。1982年東京生まれ、神奈川県茅ヶ崎育ち。EXILEファンクラブ「EX FAMILY」会員。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科第2期卒業生。人を喰ったような生意気さとポップなバランス感覚を兼ね備えた演出が特長。2004年、杉原邦生が既存の戯曲を中心に様々な演劇作品を演出する場として、「KUNIO」を立ち上げる。俳優・スタッフ共に固定メンバーを持たない、プロデュース公演形式のスタイルで活動している。2009年KUNIO06『エンジェルス・イン・アメリカ-第1部 至福千年紀が近づく』で京都芸術センター舞台芸術賞2009佳作受賞。KUNIOと平行して、歌舞伎演目上演の新たなカタチを模索するカンパニー「木ノ下歌舞伎」に、2006年以降演出および企画にも参加、舞台美術も手がけている。また、こまばアゴラ劇場が主催する舞台芸術フェスティバル<サミット>ディレクターに2008年より2年間就任、2010年からはKYOTO EXPERIMENTフリンジ企画のコンセプトを務めるなど、持ち前の「お祭り好き」精神で活動の幅を広げている。

## 公演歴

- 2012  
木ノ下歌舞伎『義経千本桜』  
京都芸術劇場 春秋座、横浜にぎわい座
- 木ノ下歌舞伎『三番叟』  
横浜にぎわい座
- 2011  
KUNIO09『エンジェルス・イン・アメリカ』  
(作:トニー・クシュナー)  
京都芸術センター
- KUNIO08『椅子』  
(作:ウージェーヌ・イヨネスコ)  
こまばアゴラ劇場(東京)、うりんこ劇場(愛知)
- 2010  
木ノ下歌舞伎『勳進帳』  
アトリエ劇研(京都)、STスポット(神奈川)
- 2009  
KUNIO05『迷路』  
(作:フェルナンド・アラバール)  
AI・HALL(兵庫)

## Kunio SUGIHARA

A Director and Stage Designer, Sugihara was born in Tokyo in 1982. He grew up in Chigasaki, Kanagawa and was a member of EXILE's Fan Club "EX FAMILY". He graduated from the Department of Performing Arts at Kyoto University of Art and Design. His work is known to keep a fine balance of sassy-ness and pop-ness. In 2004, he founded his own company "KUNIO" that allowed him to carry out various projects. In 2009, KUNIO 06 *Angels in America Part 1: Millennium Approaches* won honorable mention at Kyoto Art Center Performing Arts Award 2009.

He has directed 5 works for KINOSHITA-KABUKI since 2006, a company that explores new interpretations of works from the traditional Kabuki repertoire. With a "love to party" spirit, Sugihara is broadening the range of his work with projects such as spending two-years as the director of the Performing Arts Festival "Summit", organized by Komaba Agora Theater since 2008, and being the concept planner of FRINGE at KYOTO EXPERIMENT.

## Selected Works

- 2012  
KINOSHITA-KABUKI *Yoshitsune Senbon Zakura*  
Kyoto Art Theater Shunjuza, Yokohama Nigiwai-za
- KINOSHITA-KABUKI *Sambaso*  
Yokohama Nigiwai-za
- 2011  
KUNIO09 *Angels in America*  
(Text: Tony Kushner)  
Kyoto Art Center
- KUNIO08 *The Chairs*  
(Text: Eugene Ionesco)  
Komaba Agora Theater (Tokyo), Urinko Theater (Aichi)
- 2010  
KINOSHITA-KABUKI *Kanjincho*  
Atelier GEKKEN (Kyoto), ST Spot (Kanagawa)
- 2009  
KUNIO05 *The Labyrinth*  
(Text: Fernando Arrabal)  
AI HALL (Hyogo)

## ABOUT THE WORK

戯曲・太田省吾『更地』について (DVD「太田省吾の世界」小冊子「作品解題『更地』」より抜粋)

### About *Sarachi (Vacant Lot)* by Shogo Ota

\*Abstract from the annotated booklet on *Sarachi (Vacant Lot)* included in *The world of Shogo Ota* (DVD)

### 森山直人 Naoto Moriyama

上演がはじまってまもなく、舞台上にあったすべての道具類は、後方から引き出されてきた巨大な白い布によって覆いつくされる。かつての自分たちの住まいが存在していた更地に旅をしてきた二人は、そのことですでに日常生活から隔たりをもって登場しているが、白い布によって、いわば更地をもう一度更地化することによって、二人は自分たちがこれまで暮らしてきた人生を、まるで死後の世界からかえりみるように再演(お芝居ごっこ)しようとする。このような〈死者〉と〈戯れ〉の主題の結びつきは、他の太田作品のなかにも多数見られる。社会的な文脈でいえば、『更地』の執筆から初演の頃においては、いうまでもなくバブル期の地上げといった記憶が鮮明であり、あるいはまた、数年後には阪神・淡路大震災によって別種の更地が現実のものとなる。けれども太田省吾における〈更地〉の主題は、そうした光景の悲惨さと共振しつつも、別の印象を招き寄せている。おそらくそこには、太田が幼少期に体験した大陸からの引き揚げた経験が関係しているかもしれない。

Soon after the curtain goes up, all the plots on the stage become covered by a large white cloth drawn out from the back. Two characters who have traveled to the place their house used to stand, are already distanced from their everyday life. But the white cloth clearing the vacant lot emphasizes the idea of a void. And the way they play and try to enact their past is as if they are looking back at it from the afterworld. Such thematic conjunctions of "the dead" and "lark" is seen in other works by Ota, as well. Socio-historically, the time of which *Sarachi (Vacant Lot)* was created coincides with the bubble years and its property speculation. And a few years later, another kind of vacant lot became reality as a result of the Great Hanshin-Awaji Earthquake. While Ota's subject of "vacant lot" resonates with this line of distressing scenarios, it brings us a different kind of impression. It might have something to do with his withdrawing experience from China in his childhood.

### 森山直人

1968年生まれ。演劇批評家。京都造形芸術大学舞台芸術学科教授、同大学舞台芸術研究センター主任研究員、機関誌『舞台芸術』編集委員。2011年より、京都国際舞台芸術祭実行委員を務める。

### Naoto MORIYAMA

Born in 1968. Theater critic, Professor of Performing in Department of Performing Arts Kyoto University of Art and Design, Chief Researcher at Performing Arts Research Center at Kyoto University of Art and Design, Editor of *Performing Arts Journal*, and Executive Committee member of KYOTO EXPERIMENT since 2011.



木ノ下歌舞伎『三番叟』 / KINOSHITA-KABUKI *Sambaso*  
photo: Ryuichiro Suzuki



KUNIO09『エンジェルス・イン・アメリカ』 / KUNIO09 *Angels in America*  
photo: Toshihiro Shimizu

## リア・ロドリゲス

Lia Rodrigues

RIO DE JANEIRO

## POROROCA

60 min (日本初演 / Japan Premiere)

10/7 (Sun) 20:00-  
10/8 (Mon) 16:00-

\*開場は開演の15分前

\*The theater opens 15 min.  
prior to the performance.

関連イベント

レクチャー「ダンスと社会—リア・ロドリゲスの実践」

/ Related Event - Lecture →p62

京都府立府民ホール アルティ  
Kyoto Prefectural Citizen's Hall ALTI世界が注視するブラジルのパフォーミング・アーツ界から、  
社会のリアリティを見つめる振付家の野心作が日本初演!From the world renowned performing arts of Brazil  
the Japanese premier of an ambitious new work by a choreographer  
who sets her sights upon the social reality

リア・ロドリゲスはカンパニーの本拠地をリオデジャネイロの大規模な貧民街のひとつ「マレ・ファベラ」に移設、自らの手で物件を改装しスタジオを構えた。ワークショップなどを通じてそこに暮らす人々と関わり、カンパニーのダンサーとして加わった若者もいる。また、1992年にはリオデジャネイロのダンス・フェスティバルPanoramaを創設。2005年まで芸術監督を務めるなど、ブラジルのパフォーミング・アーツを牽引する存在として知られている。そんなブラジル社会のつばに身を置くなりア・ロドリゲスが、自身のカンパニーを率いて日本に初登場する。

上演される『POROROCA(ポロロッカ)』は、2009年にパリで初演されて以来、ブリュッセル、モントリオールと世界各国のフェスティバルで上演されてきた話題の作品。猿雑な日常からそのまま飛び出してきたようなダンサー達が舞台上に現れて、個々のポテンシャルを爆発。豊穡な身体性を解き放ちながら、集合と離散を繰り返して、より大きなエネルギーの塊へと変わっていく。作品タイトル『POROROCA』とは、大潮によって海の水がアマゾン川に大量に逆流する現象を表すことば。その奔流のイメージには、ブラジルの置かれた社会状況や政治的、歴史的背景が幾重にも織りこまれていく。さまざまな解釈へと開かれた舞台を通して、観客は目の覚めるような体験をすることになるだろう。

2011年から、KYOTO EXPERIMENTとPanoramaは提携関係をむすび、ブラジルの重要なアーティストたちが、相次いで京都で作品を発表している。今やコンテンポラリーダンス揺籃の地となったブラジルと京都のネットワークから、かつてないクリエイティブの萌芽が見られるに違いない。

Lia Rodrigues has decided to move to and work in Mare, one of the favelas in Rio de Janeiro, renovating an old building into a studio. Her company involves people in the neighborhood through workshops and other projects. A few local youth have joined the company as dancers. In 1992, Lia, known as a leading figure in performing arts of Brazil, founded Panorama, a dance festival, and directed it till 2005. From the crucible of Brazilian society, Lia and her company come to Japan to introduce *POROROCA*. The work has been internationally acclaimed and toured Brussels, Montreal, and various dance festivals around the globe after its premier in Paris, 2009. The dancers, who seem to have just walked straight out from their rough daily life, each reveal their own unique potential. Repeating convergences and separations expressed with a rich physicality, they become something bigger and more powerful. *POROROCA* is a natural phenomenon occurring in the Amazon in which incoming tides from the ocean travel up the river in waves. The gushing water reminds us of the social, political and historical background of Brazil. But the highly metaphorical direction allows open interpretations at many levels. The audiences are tossed about by the waves. The experience is electrifying. KYOTO EXPERIMENT and Panorama formed a partnership in 2011 and a series of great Brazilian artists have introduced their work in Kyoto since. The Kyoto-Brazil network has become a cradle for contemporary dance. More unprecedented creative work will certainly be coming out of it.

クリエーション:リア・ロドリゲス  
出演・共同創作:アマリア・リマ、アナ・パウラ・カモザキ、リジア・ランシェイラ、カリクスト・ネット、レオナルド・ヌネス、タイス・ガリアキ、ジャミウ・カルドーゾ、ガブリエリ・ナシメント、フランシスコ・カヴァルカンチ、パウラ・ジ・パウラ、ブルーナ・ティモテオ  
共同創作:アリソン・アマラウ、クラリサ・ヘーゴ、カロリナ・カンブス、ヴォウミ・コルディル、プリシラ・マイア  
参加メンバー:シェアネ・ジ・リマ、ルアナ・ベゼハ  
ドラマトゥルク:シウヴィア・ソテル  
照明デザイン:ニコラス・ボジエル  
海外コーディネーター:テレーズ・バーバネル  
制作:コレット・ドゥ・ターヴェイル  
クリエーションサポート:ジャン・ヴィラル劇場  
共同製作:ジャン・ヴィラル劇場、パリ市立劇場、フェスティバル・ドートンヌ、アンジェ国立振付センター、クンステンフェスティバルデザール  
サポート:NGOマレ開発ネットワーク、SESC劇場  
後援:駐日ブラジル大使館  
協力:ダンス・トリエンナーレ・トーキョー2012  
共催:京都府立府民ホール アルティ  
主催:KYOTO EXPERIMENT

Creation: Lia Rodrigues  
Performed and created in collaboration with: Amália Lima, Ana Paula Kamozaki, Lidia Larangeira, Calixto Neto, Leonardo Nunes, Thais Galliac, Jamil Cardoso, Gabriele Nascimento, Francisco Cavalcanti, Paula de Paula, Bruna Thimotheo.  
With the collaboration of: Allyson Amaral, Clarissa Rego, Carolina Campos, Volmir Cordeiro, Priscilla Maia  
With the participation of: Jeane de Lima e Luana Bezerra  
Dramaturgy: Silvia Soter  
Lighting design: Nicolas Boudier  
Photos: Sammi Landweer  
Assistant choreographer: Jamil Cardoso  
Assistant choreographer for the repertory: Amalia Lima  
International booking Thérèse Barbanel - Les Artscéniques  
Production: Colette de Turville  
Creation Support: Théâtre Jean-Vilar  
Co-Produced by Théâtre Jean Vilar, Théâtre de la Ville, le Festival d'Automne à Paris, Centre National de danse contemporaine d'Angers, Kunstfestivaldesarts  
With the support of REDES de Desenvolvimento da Maré, Espaço SESC  
In cooperation with Embassy of Brazil in Tokyo, DANCE TRIENNALE TOKYO 2012  
Co-Presented by Kyoto Prefectural Citizen's Hall ALTI  
Presented by KYOTO EXPERIMENT



## リア・ロドリゲス

出身地であるサンパウロでクラシックバレエを学ぶ。1977年にGrupo Andançaを結成。1980年から1982年にフランスに滞在し、マギー・マランのカンパニーに所属。その後、ブラジルに戻り、リオデジャネイロに移り住み、リア・ロドリゲス・ダンス・カンパニーを設立。彼女の振付は、ブラジル内外で様々な賞を受賞している。1992年には、毎年1回開催されるダンスフェスティバル Panorama を立ち上げ、2005年まで指揮を執る。2005年には、カンパニーと共に、リオデジャネイロに多く存在する貧民街のひとつであるマレに移住。アーティストが制作活動を行える施設を立ち上げ、『Les Fables à la Fontaine』(2004/2005)、『Incarnat』(2005)、『Hymnen』(2007)を含む自らの作品だけでなく、他のアーティストによる作品も定期的に上演している。2007年以降、もうひとつの貧民街であるノバ・ホランダにも新たなアートセンターを建設している。フランス政府より、芸術文化勲章シュヴァリエを授与されている。

## 公演歴

- 2011 『Piracema』
- 2008 『Chantier Poétique』
- 2007 『Hymnen』
- 2005 『Incarnat』
- 2005 『Les Fables à la Fontaine』
- 2002 『Formas breves』

## Lia RODRIGUES

Studied classical ballet in her hometown of São Paulo. In 1977 she founded the Grupo Andança. From 1980 to 1982 she was in France, where she was part of the Compagnie Maguy Marin. Back in Brazil, she took up her residence in Rio de Janeiro, where she founded the Lia Rodrigues Companhia de Dança. Her choreographies all received national and international prizes and awards. In 1992 Lia Rodrigues launched an annual dance festival, Panorama, which she directed until 2005. In that year, Rodrigues and her company moved to Maré, one of the many favelas in Rio de Janeiro, where she created a location for artistic creations, and where she regularly presents her own as well as others' work. Among them were *Les Fables à la Fontaine* (2004/2005), *Incarnat* (2005) and *Hymnen* (2007). Since 2007 Rodrigues has been developing a new location for creation and presentation in the Nova Holanda favela. The French government has made her a Chevalier dans l'Ordre des Arts et des Lettres.

## Selected Works

- 2011 *Piracema*
- 2008 *Chantier Poétique en préfiguration de Pororoca*
- 2007 *Hymnen*
- 2005 *Incarnat*
- 2005 *Les Fables à la Fontaine*
- 2002 *Formas breves*

## PREVIEW

### 『POROROCA』上演によせて On the occasion of the performance *POROROCA*

#### 松村政宏 Masahiro Matsumura

リア・ロドリゲスのカンパニーは、リオデジャネイロのファベラ(貧民街)に本拠を置く。彼女らは当地に存在した大きな倉庫を改装して、2007年に文化センターを立ち上げた。そこに住む人々を対象として、様々なプログラムに取り組んでおり、カンパニーの所属ダンサーにもファベラ出身者が在籍するのだ。

『POROROCA』の冒頭、ドタバタと喧騒の渦中にあるダンサー達。その後、密接なコンタクトが執拗に繰り返されるなかで、少しずつ発酵するように、いや、ともすると誰も気付かぬうちに何かが変わっていく。混沌のなかにあっても、確かに息づくその繊細な成りゆきこそ、振付家が見つめる社会のリアリティなのだろう。

ブラジルは2014年にサッカーW杯、2016年には南米大陸初となるオリンピックの開催を控える。来るべき国際イベントに向け、現在、リオデジャネイロ州政府は大規模な犯罪掃討計画を実行しているのだ。しかし、反発する犯罪組織の抵抗によって多くの住民の命が奪われている。軍警察の戦車が出動するなど、新聞には「戦争」の文字が踊る。

そうした状況の渦中にあるファベラ社会に身をおいて、リア・ロドリゲスは活動している。彼女は、ダン

スを通じ、そこに住む人々の身体を行き交わせることによって、人を、社会を変えようとする。そうした活動において得た「変化」への確信が、作品には反映されているように思える。

終盤、ダンサー達の身体はあきらかな「獣性」を宿らせる。前を見据え、氣勢を上げつつ歩を進める彼ら彼女らの姿は堂々として美しい。そしてラストシーン。観客である貴方の眼前に立ち現れるものは…。ぜひ劇場でその場に立ち会ってほしい。

Lia Rodrigues' company is based in one of Rio de Janeiro's favelas. They renovated an old warehouse into an art center and have created an artistic place for people in the community since 2007. The company includes members from the favela.

Dancers are in a bustle at the beginning of *POROROCA*. Then, while they insistently repeat close contacts, slowly without people noticing it, something starts to change. Such subtle but substantial process is the reality of Brazilian society which the artist sets her sight upon.

Brazil is hosting the Soccer World Cup in 2014 and the Olympics as the first South American venue, in 2016. The Rio de Janeiro state government is conducting counter-crime operations. But the

criminal organizations fight back and many lives, including innocent citizens, have been lost. Military police tanks are sent out. Newspapers describe the situation as "war".

Lia Rodrigues chose to live and work in the middle of a favela, where crime is so prevalent. She is trying to change people and society through dance and physical interactions among people in the favela. Her assurance that "things can change", gained from her experiences, is reflected in the work.

Toward the end, again, a brutal nature resides in the bodies of the dancers. The way they firmly look ahead and start walking in good spirits is powerful and beautiful. And what comes last is... Well, you'll have to witness it with your own eyes.

#### 松村政宏

ウェブマガジン「dance+」等にダンス関連の記事を寄稿。ウェブ業界でメディア運営/サービス開発に従事した後、現在フリーのライター/ウェブディレクター。

#### Masahiro MATSUMURA

Writes about dance for the web magazine *dance+*. Having experience in system management and web business development, he is now a freelance writer / web director.



『POROROCA』 / *POROROCA*  
© Sammi Landweer



『POROROCA』 / *POROROCA*  
© Sammi Landweer

# チョイ・カファイ

h a h a f i h h f f i

📍 SINGAPORE

## “Notion: Dance Fiction” and “Soft Machine”

🕒 80 min (再演+再創作 / Premiered in 2011 + Re-Creation)

📅 10/13(Sat) 20:00-  
10/14(Sun) 17:00- 🗨️

\*開場は開演の10分前

\*The theater opens 10 min.  
prior to the performance.

🗨️ ポスト・パフォーマンス・トーク  
Post-Performance Talk

関連イベント 「『Soft Machine』映像バージョン展示」  
/ Related Event – Exhibition 10/8 – 10/14 →p62

📍 京都芸術センター  
フリースペース  
Kyoto Art Center Multi-purpose Hall

最先端のメディアアートを駆使してダンサーに肉薄！  
シンガポール発のマルチクリエイターが、真実と虚構のはざまにニヤリと笑う。

**The latest media art closes in on dancers!**  
**A multi media creator from Singapore experiments in the space  
between reality and fiction.**

ダンス、アート、演劇…さまざまな領域を横断して注目を集めているチョイ・カファイ。国境を超えて同時代的に共有されているムーブメントを敏感につかみとり、刺激的な作品をつくりあげる気鋭のアーティストである。『Notion: Dance Fiction(ノーション:ダンス・フィクション)』は人間の筋肉に電流を流して動きをコントロールすることで、ピナ・バウシュや土方巽といった“ダンスレジェンド”の振りを再現するという試み。舞踊史の膨大なデータベースを、自身も様々なダンスを経験し振付家としても活躍するダンサー・寺田みさこの体に移植していく。そんなことが本当に可能なのか？ SF的な想像力すら働きはじめる作品。『Soft Machine(ソフト・マシーン)』はダンサーや振付家へのインタビューを通して、個人の身体に刻まれた記憶を丁寧に掘り起こす。contact Gonzoの塚原悠也との親密なコラボレーションによって、ごく私的な記憶から、いつしか大文字のダンスの潮流が見えてくる。ダムタイプに影響を受けたことを公言する、チョイ・カファイの実験的なアプローチとアクチュアルな姿勢。ダブルビル公演で「コンテンポラリーダンスとは何か？」へと鋭く迫る。

Ka Fai is a cross-disciplinary artist. He works beyond the realm of dance, visual art, theater and whatever else one might think of. He is quick to grasp a new and contemporary movement shared around the world and creates evocative work based on it. *Notion: Dance Fiction* attempts to reenact the choreography of dance legends such as Pina Bausch and Tatsumi Hijikata, controlling body movements by passing electric current through dancers' muscles. He transplants vast amount of movement data from the history of dance to the single body of Misako Terada, a choreographer and dancer, who has experienced so many varied forms of movement. Theoretically, maybe, but is it really possible? It seems like something from the world of science fiction. In *Soft Machine*, Ka Fai interviews dancers and choreographers in order to carefully unearth the memories secretly hiding in their bodies. Through close collaboration with Yuya Tsukahara from "contact Gonzo", the work brings out personal memories at first but gradually reveals a larger picture; what is dance? Professing, his early influences from Dumbtype, Ka Fai's approach is experimental and actual. He explores the subjective notion of contemporary dance in his double bill performance.

『Notion: Dance Fiction』  
コンセプト・演出・マルチメディアデザイン:  
チョイ・カファイ  
振付・出演:寺田みさこ  
通訳:塚原悠也(contact Gonzo)  
照明・テクニカルディレクター:リン・アンディー  
(stage 'LIVE')  
プロジェクト制作協力:STUK Art Center  
デザイン・インタラクティブ:英国ロイヤル・  
カレッジ・オブ・アート

『Soft Machine』  
作・演出:チョイ・カファイ  
出演:チョイ・カファイ、塚原悠也(contact  
Gonzo)  
DANCE BOX Residency Program 2011  
参加作品  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT  
『Soft Machine project』  
助成: The Arts Creation Funds, National  
Arts Council, Singapore

主催: KYOTO EXPERIMENT

**Notion: Dance Fiction**  
Concept, Direction, Multimedia:  
Ka Fai Choy  
Performance, Choreography:  
Misako Terada  
Live Translator: Yuya Tsukahara (contact  
Gonzo)  
Lighting Design, Technical Direction:  
Andy Lim (stage 'LIVE')  
Initial development of the project is  
supported by STUK Art Center  
Design Interaction: Royal College of Art,  
London, UK

**Soft Machine**  
Concept: Ka Fai Choy  
Creation, performance: Ka Fai Choy and  
Yuya Tsukahara (contact Gonzo)  
Supported by Dance Box Residency  
Program 2011, Art Theatre dB KOBE  
Co-Produced by KYOTO EXPERIMENT  
“Soft Machine project”  
Supported by The Arts Creation Funds,  
National Arts Council, Singapore

Presented by KYOTO EXPERIMENT

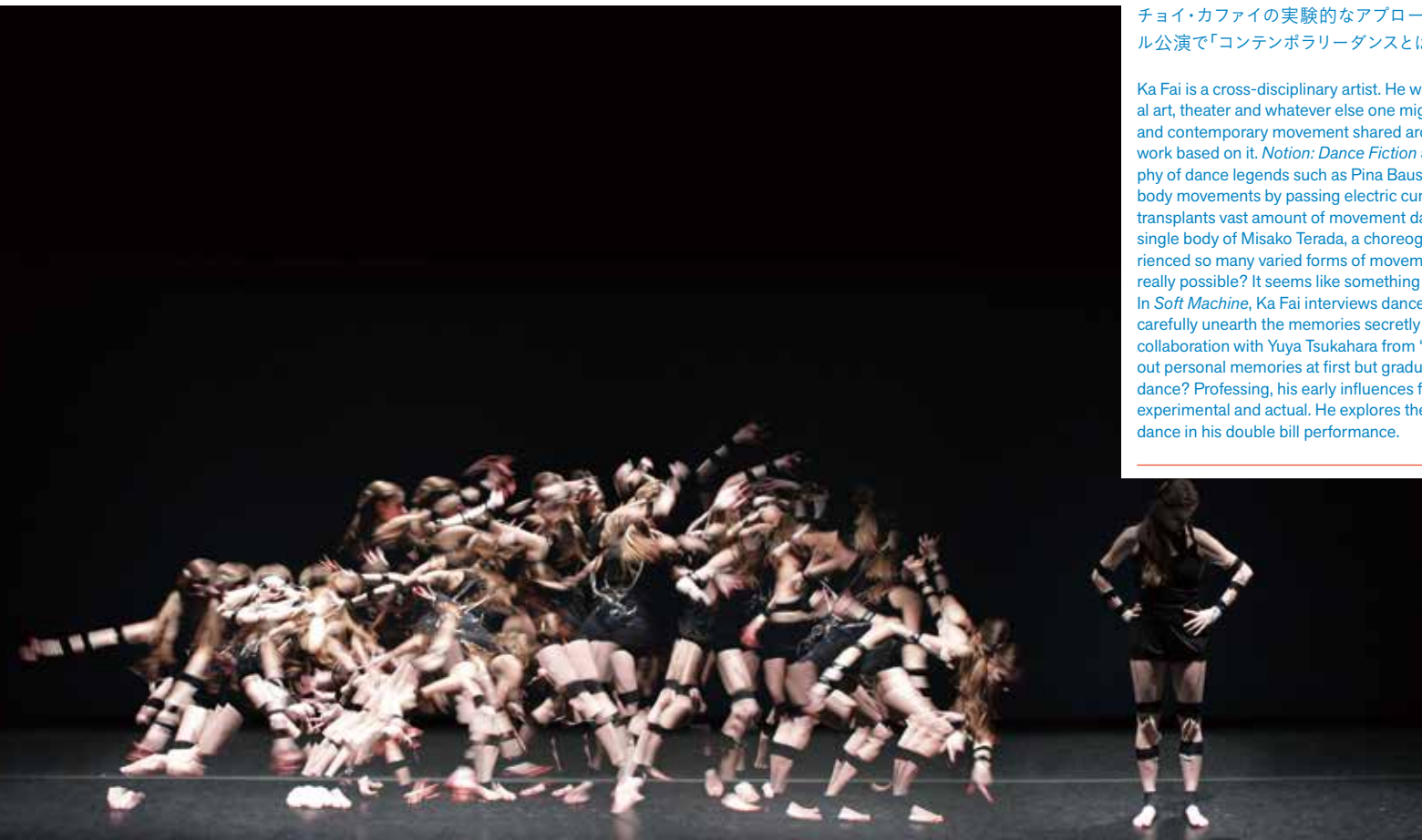


image: Ka Fai Choy

## チョイ・カファイ

ニューメディア・アーティスト、演出家。

1979年シンガポール生まれ。歴史的事象と未来への思索に着想を得て、ビジュアルアート、ダンス、演劇の領域を横断する多くの作品を創作。その制作の根底には人間の身体の様相を理解しようとする願望があり、それらの様相は、アート、デザイン、テクノロジーが相互作用する新たなナラティブを生み出す。

ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アート(デザインインタラクション)卒業。2007年～2009年まで、シンガポールでの主要なアート・グループである「TheatreWorks Singapore」のアソシエート・アーティストック・ディレクターを務めた。また、アーティスト集団「Kill Your Television (KYTV)」の共同芸術監督として、彼の作品は、ハウス・デア・クルトゥレン・デア・ヴェルト(ベルリン)、福岡アジア美術トリエンナーレ、インスティテュート・オブ・コンテンポラリー・アーツ(ロンドン)、エジンバラ国際フェスティバルやシンガポールアートフェスティバルなど世界中の主要な芸術機関やフェスティバルに招聘された。シンガポールヤングアーティスト賞2010受賞。

## 公演歴

2012  
『Soft Machine』  
[リサーチ・エキシビション]  
KOBÉ-Asia Contemporary Dance Festival  
#02

『Lan Fang Chronicles』  
[インスタレーション・パフォーマンス]  
シンガポールアートフェスティバル2012

2011  
『Notion: Dance Fiction』  
[レクチャー・パフォーマンス]  
フェスティバル/トーキョー11/シアター  
グリーン(東京)

『Prospectus For a Future Body』  
[エキシビション]  
Curious Mind / イスラエルミュージアム  
(エルサレム)

## Ka Fai CHOY

Ka Fai Choy is an artist, performance maker and speculative designer. He is inspired by the stories of history and speculations of the future, and his research often stems from a desire to understand the conditions of the human body. These conditions would then coalesce into new narratives at intersection of art, design and technology.

He graduated from the Royal College Of Art London (Design Interaction) and was conferred the Singapore Young Artist Award 2010. He was the associate artistic director of TheatreWork Singapore from 2007-2009 and was the core member of artist collective- Kill Your Television from 2002-2009. He had participated in various art festivals worldwide including, 3rd Fukuoka Asian Art Triennale (2005), Edinburgh International Festival (2009) and the Singapore Art Festival (2012).

## Selected Works

2012  
**Soft Machine**  
[Research Exhibition]  
KOBÉ-Asia Contemporary Dance Festival  
#02

**Lan Fang Chronicles**  
[Installation Performance]  
Singapore Art Festival 2012

2011  
**Notion: Dance Fiction**  
[Lecture Performance]  
FESTIVAL / TOKYO11 / Theatre Green

**Prospectus for a Future Body**  
[Exhibition]  
Curious Mind / The Israel Museum,  
Jerusalem

## ABOUT THE WORK

### Notion: Dance Fiction



photo: Kazuyuki Matsumoto

『ノーション:ダンス・フィクション』は、録画されたダンスのムーブメントをデジタル化し、現代のダンサーの身体で再生するという、筋肉の記憶の可能性を探求する作品である。20世紀ダンス史の軌跡に着想を得て、ダンスの巨匠たちの身体言語をデジタル情報としてアーカイブし、その情報を、別の身体にインストールする。インストールされた身体は情報を認識し、自らの身体に順応させるプロセスを経て、身体表現として表出させる。

*Notion: Dance Fiction* is a demonstration performance exploring the possibilities of muscle memory as a digital form for recording, playback and real-time mapping of movement-based technique. Inspired by the evolution of dance history in the last century, the performance attempt to install digital muscle memory implants from a selection of iconic dance movement vocabulary into a singular body as it learn, adapt and recreate within the multiplex of kinesics expression.

### Soft Machine



『ソフト・マシーン』プロジェクトは、アジアにおけるコンテンポラリーダンスの存在論について考えるリサーチプロジェクト。この10年の間にコンテンポラリーダンスの振付がどの様に変化してきたかを解き明かすべく、アジアの各都市を訪れ、調査/記録/実験を展開。アジアのコンテンポラリーダンスの歴史的系譜と未来像を浮き彫りにする。

The "Soft Machine" project is a nomadic dance research studio exploring the ontology of contemporary dance in Asia. Driven by a personal desire to study the choreographic process of contemporary dance in the last decade, the project seeks to carry out research, preservation and experiments across various cities in Asia, in an attempt to map out the historical lineages and possible futures of contemporary dance in Asia.

# 高嶺格

ta.h a.stu ta.ffa.ffi.fine

SHIGA



## ジャパン・シンドローム ～step2. “球の内側”

Japan Syndrome ~ step2. "Inside of the ball"

🕒 上演時間未定 (新作 | 世界初演 / New Creation | World Premiere)

📅 10/19 (Fri) 20:00- \*開場は開演の10分前  
 10/20 (Sat) 14:00-, 19:30- ☑ \* The theater opens 10 min.  
 10/21 (Sun) 17:00- prior to the performance.

☑️ ポスト・パフォーマンス・トーク  
 Post-Performance Talk

📍 京都芸術センター 講堂  
 Kyoto Art Center Auditorium

👤  
 16歳未満入場不可  
 Suitable for 16 years and older

構成・演出: 高嶺格  
 出演: ジョージア・コンセイサン、ラヤネ・  
 ホランダ、小林由佳  
 舞台監督: 夏目雅也  
 照明: 藤原康弘  
 音響: 齋藤学  
 パンデイロマン制作: KIMURA  
 制作: 川崎陽子 (京都芸術センター)  
 製作: KYOTO EXPERIMENT  
 共同製作: Festival Panorama  
 助成: 公益財団法人セゾン文化財団  
 主催: KYOTO EXPERIMENT

Concept, Direction: Tadasu Takamine  
 Cast: Giorgia Conceição, Layane Holanda,  
 Yuka Kobayashi  
 Stage Manager: Masaya Natsume  
 Lighting: Yasuhiro Fujiwara  
 Sound: Manabu Saito  
 Technical Staff for Pandeiro: KIMURA  
 Production Coordinator: Yoko Kawasaki  
 (Kyoto Art Center)  
 Produced by KYOTO EXPERIMENT  
 Co-Produced by Festival Panorama  
 Supported by The Saison Foundation  
 Presented by KYOTO EXPERIMENT

地球の裏側ブラジルから日本を逆照射！  
 3年連続で進められる、現在進行形のプロジェクト。

Exposing Japan from the other side of the earth!  
 This is a three year ongoing project.

リオデジャネイロのダンスフェスティバルPanoramaとKYOTO EXPERIMENTとの共同製作プロジェクトの2年目。昨年は、高嶺がブラジルで採集した画像を使った映像インスタレーションを制作した。今年は、ブラジルから招聘したパフォーマーと共に1ヶ月京都に滞在し、パフォーマンスを制作する。近年、急速な経済成長により世界に台頭し、芸術分野でも世界の注目を集めつつあるブラジル。かたや経済成長を終え、昨年の大震災で未曾有の後遺症に苦しむ日本。文化的にも対極にある、この日本／ブラジルの現在から、高嶺が最終的に抽出するものは何か？

This project is KYOTO EXPERIMENT's second year of collaboration with "Panorama", a dance festival in Rio de Janeiro. Last year, Takamine created a video installation with photos and videos he collected in Brazil. This year, he has a one-month residency in Kyoto together with the performers from Brazil to create a performance piece. Brazil has been experiencing rapid economic growth and their art has become world renowned, while Japan has finished its peak of the economic growth and suffers from the unparalleled aftermath of last year's disaster. What would Takamine extract from the two countries, which are not only geographically but also culturally opposite?

## 高嶺格

高嶺格は、パフォーマンス、ビデオ、インスタレーションなど多様な表現を行っているアーティストである。アメリカ帝国主義、身体障害者の性、在日外国人などの社会問題を扱った作品、また移民労働者を取り上げた作品などで知られる。彼の作品は、国/ジェンダー/言語など、社会を構成するものの矛盾や不和を、自らの身体を使った表現で明らかにしようとする。彼の表現は声高にメッセージを叫ぶものではないが、差別や偏見のもとに横たわる、権力や抑圧をあぶりだす。舞台演出を含む近年の作品では、自身の体が直接舞台に現れることはない。しかしいかなる者と共同作業しようとも、高嶺の作品には、人間の身体が可能にする、画一化され得ない人間の野性的精神といったもの、あるいは熱狂的信頼関係といったものを見ることが出来る。

## 最近の作品

2012  
『木村さん』  
クイアニューヨーク / Abrons Arts Center  
(ニューヨーク)

『いかに考えないか』  
『ジャパン・シンドローム～山口編』  
YCAM performance lounge #6 / 山口情報  
芸術センター [YCAM]

『いかに考えないか』  
クイアザグレブ / Gavella Theater (ザグレブ)

2011  
『ジャパン・シンドローム～step1. “球の裏側”』  
『ジャパン・シンドローム～関西編』  
KYOTO EXPERIMENT 2011 / 京都芸術  
センター

オペラ『Seven Angels』(The Opera Group)  
における舞台美術・衣装  
ロイヤルオペラハウス(ロンドン)他、イギリス  
7都市

## Tadasu TAKAMINE

Takamine works in various media such as performance, video, installation and more. Known for his social commentary on US imperialism, sexual issues of the disabled, foreigners residing in Japan and migrant workers, he reveals the conflict and dissension in society: nationality, gender and language etc, through his own body. Without being vociferous, his art uncovers the power and oppression that lies at the bottom of discrimination and prejudice. Although in his recent work, including stage direction, his own body is not visually present, the presence a human spirit that resists uniformity, and a fanatic relationship of trust are always perceptible in Takamine's work, no matter who he collaborates with.

## Recent Works

2012  
**Kimura-san**  
Queer New York / Abrons Arts Center  
(New York)

**How not to think?**  
**Japan Syndrome in Yamaguchi**  
YCAM performance lounge #6 / Yamaguchi  
Center for Arts and Media (YCAM)

**How not to think?**  
Queer Zagreb / Gavella Theater (Zagreb)

2011  
**Japan Syndrome ~step1. "The other  
end of the ball" # [Exhibition]**  
**Japan Syndrome in Kansai**  
KYOTO EXPERIMENT 2011 / Kyoto Art  
Center

Opera **Seven Angels** by The Opera Group  
[Set and Costume Design]  
Royal Opera House (London) and 7 other  
cities in England

## ABOUT THE WORK

### step1. “球の裏側” step1. “The other end of the ball”

2011年夏、高嶺格は家族でブラジルのリオデジャネイロに1ヶ月間滞在し、その体験をもとに制作に取り組んだ。ギャラリー南には、現地で撮影された映像・写真がランダムに映し出され、ファベラ(ブラジルのスラム)発祥の音楽が大音量でかかる。スクリーンに手をかざすと、映像・音・照明はめまぐるしく変化し、鑑賞者自ら体を動かしながらブラジルのイメージを発見していく。

その身振りは、離れたギャラリー北で中継され、かすかに流れる日本の歌謡曲と重なると、否応なく日本人らしさが立ち現れる。地球の裏側から日本を見つめるように、ブラジルを合せ鏡に日本の姿が浮かび上がる。

一方の映像作品『ジャパン・シンドローム～関西編』は、昨年3月の震災後の状況を受けて制作された。3人のパフォーマーが店舗や施設に出向き、食品の放射能汚染について尋ねた時の反応を、次々と演技で再現する。あからさまな敬遠や努めてマニュアル的な応対。「大丈夫」の裏には不安が顔をのぞかせ、人々の間に広がる見えない壁を浮き彫りにした。「ジャパン・シンドローム」は、高嶺が本フェスティバルのもとで取り組む3年間のプロジェクト。step1から見えたのは、「日本人であること」を問い直そうとする姿勢だ。この問いは今後、step2、step3へと発表の形態を変えながら深化していく。

清澤暁子 (KYOTO EXPERIMENT 2011『ジャパン・シンドローム～step1. “球の裏側”』制作担当)



ギャラリー南 展示風景 / Installation view at South Gallery  
photo: Takuya Oshima

In the summer of 2011, Tadasu Takamine stayed in Rio de Janeiro for a month with his family. And he created an artwork based on his experience. The video and photo images he took in Brazil are randomly projected in the SOUTH Gallery while the music from a favela, a shanty town in Brazil, is played at full blast. When viewers move their hands in front of the screen, the image, sound and light change drastically and he/she discovers the portrayal of Brazil through their own kinesthetic movement. Their movements are broadcast live in the NORTH gallery, which is located on the other side of the building. Once their motion accompanies the faint sound of Japanese popular music, some aspect of Japan also comes into view. Takamine reveals an aspect of Japan by illuminating Brazil as if Brazil is the opposing mirror that allows Japan to see itself from another angle. His video work *Japan Syndrome in Kansai* is inspired by the post-quake situation after the Great East Japan Earthquake. Three performers went to stores and shops and asked questions about radioactive contamination in food. And they reenact the series of interactions they actually had. Some people obviously try to avoid the subject and others have a quite automatized manner toward it, thus appearing somewhat inhuman. We sense their anxieties when they tell us

“no problem”. The work uncovers the invisible wall that pervades our society. Japan Syndrome is Takamine's three-year project, co-produced by KYOTO EXPERIMENT. What we have seen at “step1” is his approach to questioning what it is to be Japanese. His query will evolve while changing its form of representation in “step2” and “step3”.

Satoko Kiyosawa, Production Coordinator for  
*Japan Syndrome ~step1. “The other end of the ball”*  
/ KYOTO EXPERIMENT 2011



ギャラリー北 展示風景 / Installation view at North Gallery  
photo: Takuya Oshima

# 池田亮司

ryūichi ikeda

PARIS

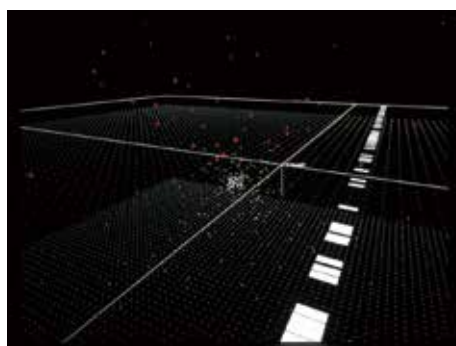
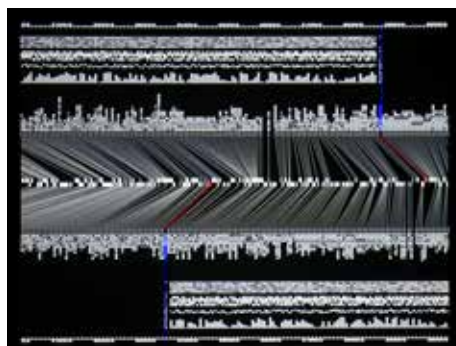
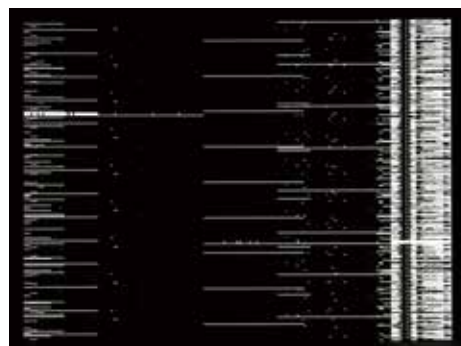


photo by Ryūichi Maruo  
courtesy of Yamaguchi Center for Arts and Media (YCAM)

## datamatics [ver.2.0]

55 min

1 10/20 (Sat) 17:00-

※関連イベント アーティスト・トーク  
「datamaticsをめぐって」  
Related Event - Artist Talk 10/21 →p62

\*開場は開演の30分前  
\*The theater opens 30 min.  
prior to the performance.

巨大な劇場空間で、池田亮司の話題作が1日かぎりの上演！  
膨大なデータから変換されたサウンド/ビジュアルの渦に  
全身が飲み込まれる。

**A one-day performance of Ryoji Ikeda's masterpiece  
(high-profile piece) in a vast theater space.  
The swirl of sound and visuals converted by an enormous  
amount of data engulfs our entire being.**

コンピューターとテクノロジーを最大限に駆使し、人間の知覚を超えたサウンドとビジュアルをつくりだす池田亮司が、京都芸術劇場 春秋座の巨大空間で1日かぎりのオーディオビジュアル・コンサートを開催！池田亮司はパリ在住、世界中で作品発表の機会が待たれるエレクトロニック・コンポーザー、ビジュアル・アーティスト。日本でも東京都現代美術館での大規模な個展『+/-[the infinite between 0 and 1]』や、成層圏にまで達する強力なサーチライトと音の波による、名古屋城での巨大インスタレーション『spectra[nagoya]』をあいちトリエンナーレ2010で発表するなど、その作品は常にサウンド、ビジュアルの両面から圧倒的なインパクトを与えてきた。微視的なDNAや分子から巨視的な宇宙まで、われわれを取り巻くさまざまな事象から抽出したデータを素材とし、知覚の極限から世界を理解、制御しようとする『datamatics[ver.2.0]』は、2006年から発展させてきたシリーズの最終形。高速で無限のシークエンスを生みだし、暴力的なまでの空間を緻密に構築するライブパフォーマンスとなる。2013年には完全なる新作パフォーマンス『superposition』を京都にて日本初演する予定。その前段階ともいえる、池田によるウルトラミニマムな世界。無限に近いデータから生み出される、崇高なまでのオーディオビジュアル体験となるだろう。

Ikeda creates sounds and visuals that are beyond our perception, making excellent use of computer and state-of-art technology. The one day only audio-visual concert takes place in the vast space of Kyoto Art Theater Shunjuza! Based in Paris, Ikeda is one of the world's leading electronic composers and visual artists and his new work is always eagerly anticipated. His large solo exhibition "+/-[the infinite between 0 and 1]" at Museum of Contemporary Art Tokyo and *spectra[nagoya]*, which was done as a massive installation at Nagoya Castle with a high voltage search light that reached the stratosphere (Aichi Triennale 2011), have both left, sonically as well as visually, a great impact on audiences. *datamatics [ver.2.0]*, in which Ikeda uses all sorts of data such as microscopic DNA and molecules all the way to the macroscopic cosmos in an attempt to grasp the world by exploring the limit of human perception, is the final piece of a series that began in 2006. Creating infinite sequences at high speed, he composes the almost violent performance with great precision. Ikeda's ultra minimalistic world offers a sublime audio-visual experience. In 2013, his new work, *superposition*, will come to Kyoto for its Japanese premiere.

京都芸術劇場 春秋座  
Kyoto Art Theater Shunjuza

未就学児入場不可。  
本作品は強いストロボと重低音・高周波を使用いたしておりますので、心臓の弱い方やペースメーカーをご使用の方などはご遠慮下さい。

Children under school age are not accepted into the theater.  
Due to the use of the strobe effect and the high frequency sound during the performance, it is not recommended for those who have heart conditions including those who wear pacemakers.

ディレクション:池田亮司  
コンセプト・コンポジション:池田亮司  
コンピュータグラフィクス・プログラミング:  
松川昌平、平川紀道、徳山知永  
共同委嘱:AV Festival 06, ZeroOne San  
Jose & ISEA 2006  
共同制作:Forma、ジョルジュ・ボンビドゥー  
国立芸術文化センター、山口情報芸術  
センター (YCAM) 2008  
協力:Recombinant Media Labs  
主催:KYOTO EXPERIMENT

Direction: Ryoji Ikeda  
Concept, composition: Ryoji Ikeda  
Computer graphics, programming:  
Shohei Matsukawa, Norimichi Hirakawa,  
Tomonaga Tokuyama  
Co-commissioned by AV Festival 06,  
ZeroOne San Jose & ISEA 2006  
Co-produced by Forma, les Spectacles  
vivants-Centre Pompidou, YCAM, 2008  
Supported by Recombinant Media Labs  
Presented by KYOTO EXPERIMENT

## 池田亮司

1966年岐阜生まれ。パリ在住。日本を代表する電子音楽作曲家／アーティストとして、音そのものの持つ本質的な特性とその視覚化を、数学的精度と徹底した美学で追及している。視覚メディアとサウンドメディアの領域を横断して活動する数少ないアーティストとして、その活動は世界中から注目されている。音／イメージ／物質／物理的現象／数学的概念を素材に、見る者／聞く者の存在を包みこむ様なライブとインスタレーションを展開する。

音楽活動に加え、「datamatics」シリーズ(2006-)では、映像、立体、サウンド作品を通じて、現代社会に広がる不可視なデータを知覚する事の可能性を探求している。「test pattern」プロジェクト(2008-)では、テキスト／音／写真／映像といったあらゆるタイプのデータを、バーコードおよびバイナリーパターンに変換するシステムを開発。テクノロジーと人間の知覚の臨界点に挑んでいる。「spectra」シリーズ(2001-)は、強烈な白色光を彫刻的な素材として用い公共空間を変容させる大規模インスタレーション。過去、アムステルダム、パリ、バルセロナ、名古屋で展示している。カーステン・ニコライとのコラボレーション・プロジェクトである「cyclo.」(2000-)では、コンサート、CD、書籍を通じて、音の視覚化をリアルタイムで行うオーディオビジュアル・モジュールと共に、ソフトウェアとコンピューターでプログラムされた音楽の中で、エラー構造と繰り返されるループを考察している。

## 発表歴

- 2011  
『test pattern [enhanced version]』  
オーディオビジュアル・インスタレーション
- 2010  
『spectra [nagoya]』  
サイトスペシフィック・インスタレーション
- 2009  
『data.tron [3 SXGA+ version]』  
オーディオビジュアル・インスタレーション
- 2008  
『test pattern [live set]』  
オーディオビジュアル・パフォーマンス
- 『a natural number』  
フォトプリント・インスタレーション
- 2007  
『data.tron』  
オーディオビジュアル・インスタレーション

## Ryoji IKEDA

Born in 1966 in Gifu, Japan. Live and work in Paris, France. Japan's leading electronic composer and visual artist Ryoji Ikeda focuses on the essential characteristics of sound itself and that of visuals as light by means of both mathematical precision and mathematical aesthetics. Ikeda has gained a reputation as one of the few international artists working convincingly across both visual and sonic media. He elaborately orchestrates sound, visuals, materials, physical phenomena and mathematical notions into immersive live performances and installations. Alongside of pure musical activity, Ikeda has been working on long-term projects: 'datamatics' (2006-) consists of various forms such as moving image, sculptural, sound and new media works that explore one's potentials to perceive the invisible multi-substance of data that permeates our world. The project 'test pattern' (2008-) has developed a system that converts any type of data - text, sounds, photos and movies into barcode patterns and binary patterns of 0s and 1s, which examines the relationship between critical points of device performance and the threshold of human perception. The series 'spectra' (2001-) is large-scale installations employing intense white light as a sculptural material and so transforming public locations in Amsterdam, Paris, Barcelona and Nagoya where versions have been installed. With Carsten Nicolai, Ikeda works a collaborative project 'cyclo.' (2000-), which examines error structures and repetitive loops in software and computer programmed music, with audiovisual modules for real-time sound visualization, through live performance, CDs and books (Raster-noton, 2001, 2011).

## Selected Works

- 2011  
**test pattern [enhanced version]**  
audiovisual installation
- 2010  
**spectra [nagoya]**  
site-specific installation
- 2009  
**data.tron [3 SXGA+ version]**  
audiovisual installation
- 2008  
**test pattern [live set]**  
audiovisual performance
- a natural number**  
photo print installation
- 2007  
**data.tron**  
audiovisual installation

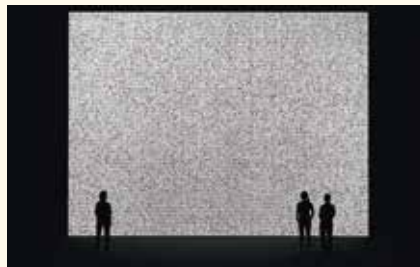
## ABOUT THE WORK

### The datamatics project

「datamatics」は、現代社会に広がる不可視なデータを知覚することをテーマにしたアート・プロジェクト。その多面性を捉え、実体化する試みは、様々な形式(音と映像を用いたコンサート／インスタレーション／出版物／CD)で作品化される。『datamatics [ver.2.0]』は、2006年3月に初演された前作に、新たに第2部を加え大きくバージョンアップした、コンサートの長編最終版。リアルタイムのプログラム計算とデータ・スキャンニングを用いることで、前作よりもさらに抽象性の高いシークエンスを作り出している。



『data.tron [8K enhanced version]』 / *data.tron [8K enhanced version]* audiovisual installation (2008-09)  
© Ryoji Ikeda photo: Liz Hingley



『data.tron』 / *data.tron* audiovisual installation (2007)  
© Ryoji Ikeda photo by Ryuichi Maruo courtesy of Yamaguchi Center for Arts and Media (YCAM)



*data.tron [advanced version]* / *data.tron [advanced version]* audiovisual installation (2007-2011)  
© Ryoji Ikeda photo: James Ewing, courtesy of Forma



『spectra [nagoya]』 / *spectra [nagoya]* site-specific installation (2010)  
© Ryoji Ikeda courtesy of Aichi Triennale 2010



『test pattern [live set]』 / *test pattern [live set]* audiovisual performance (2008)  
© Ryoji Ikeda photo by Liz Hingley

# ポツドール

©h ftu.h h -ru

TOKYO

## 夢の城 –Castle of Dreams

Castle of Dreams

🕒 70 min

1 10/25 (Thu) 20:00-  
10/26 (Fri) 20:00-  
10/27 (Sat) 15:00-, 20:00-  
10/28 (Sun) 15:00-

\*開場は開演の10分前

\* The theater opens 10 min.  
prior to the performance.

📍元・立誠小学校 講堂

Former Rissei Elementary School  
Auditorium



18歳未満、高校生入場不可  
Suitable for 18 years and older

話すことすら放棄した、若者たちの無気力で異様な集団生活。  
日本社会の縮図をムキ出しにして見せつける、ポツドールの問題作！

**A bizarre apathetic communal life of young people  
who have abandoned even speaking.  
Baring the truth about Japanese society, Potudo-ru  
puts on one controversial work!**

現代のトーキョーを象徴する風俗や若者の姿を題材に、“リアリティのある虚構”を描いた作品で話題のポツドールが京都に初登場！劇作家、演出家の三浦大輔が率いるポツドールは1996年に旗揚げ。演劇的なものを最大限に排除したセミドキュメント作品『騎士クラブ』(2000、2002)などで話題を呼んだ。その後はセミドキュメント作品で得たものをドラマに注入し、さまざまなアプローチから独自のフィクションを追求するようになる。初の大阪公演も行った『ANIMAL』(2004)では、死に直面したチーマーの姿の「風景」を作品としてみせることに挑戦。2005年に上演した『愛の渦』では、三浦は岸田國士戯曲賞を受賞している。『夢の城』は2006年初演。1Kのアパートで集団生活を営む若者たちを無言劇のスタイルで描き、賛否両論を呼んだ問題作。寝て、食べて、テレビを見て…、ただならぬ無気力に暮らす若者たちの状況を、観客はただのぞき見ることになる。2010年のドイツ・エッセンでの公演を皮切りに、2011年にはブリュッセル、ウィーン、モントリオールと海外でも上演を重ねてきた。細部にいたるまで作りこまれた1Kアパートや、舞台上で描かれる虚無的で無気力な若者の姿は、日本社会の一断面であるとともに、空虚なフィクションとして見えはじめるだろう。はたして最後に残るのは嫌悪感か!? 共感か!? それとも…!?

Potudo-ru is known for their realistic fictions, settling on the sex and youth culture in Tokyo as symbolic aspects of modern living. It is their first appearance in Kyoto! Led by Daisuke Miura, a playwright, the company was founded in 1996. Eliminating theatrical aspects to the utmost limit, their semi-documentary work *Knight Club* (2000, 2002) has been highly acclaimed. The company has explored a unique approach to fictional stories, infusing them with a semi-documentary feel since then. *ANIMAL* (2004), traveling to Osaka for the first time, is an ambitious work, in which the emotional state of Tokyo gang members, who are potentially facing death, is displayed silently like a landscape. Miura received the 50th Kunio Kishida Dramatic Award with *Love's Whirlpool* in 2005. Premiered in 2006, *Castle of Dreams* is a controversial silent dramatic work about young people who all live in a one room apartment. The audience is to voyeuristically observe their apathetic life; sleeping, eating, watching TV and just hanging out. After performing in Essen, Germany in 2010, the show traveled to Brussels, Vienna and Montreal in 2011. The elaborate detail of the small apartment and the apathy among the youth can be seen as a slice of Japanese social reality or a vain fiction. Is what's left in the audience at the end a sense of repulsion, empathy or something else!?

作・演出: 三浦大輔  
出演: 米村亮太郎、古澤裕介、鷲尾英彰、井上幸太郎、松浦祐也、遠藤留奈、新田めぐみ、宮嶋美子  
舞台監督: 筒井昭善、横尾友広  
舞台美術: 田中敏恵  
照明: 伊藤孝 (ART CORE)  
音響: 中村嘉宏  
映像・宣伝美術: 冨田中理  
小道具: 河合路代  
制作: 木下京子  
協力: ゴキブリコンビナート、THE SHAMPOO HAT、スターダス・21、ぱれっと、パードレーベル、ダックスoup、オフィスPSC、スペーステン、マッシュ  
製作: ポツドール  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Text, Direction: Daisuke Miura  
Cast: Ryotaro Yonemura, Yusuke Furusawa, Hideaki Washio, Kotaro Inoue, Yuya Matsuura, Runa Endo, Megumi Nitta, Yoshiko Miyajima  
Stage Manager: Akiyoshi Tsutsui, Tomohiro Yokoo  
Stage Design: Toshie Tanaka  
Lighting: Takashi Ito (ART CORE)  
Sound: Yoshihiro Nakamura  
Video, Publicity Design: Norimichi Tomita  
Stage Props: Michiyo Kawai  
Production Coordinator: Kyoko Kinoshita  
In cooperation with gokiburi kombinat, THE SHAMPOO HAT, Stardas21, Palette, BIRD LABEL, Duck Soup, Office PSC, SPACE ten, MASH  
Produced by Potudo-ru  
Presented by KYOTO EXPERIMENT



## ポツドール

1996年12月、早稲田大学演劇倶楽部10期生の三浦大輔を中心に結成された演劇ユニット。現在までに19回の本公演と特別企画公演などを上演している。2005年、第13回公演『愛の渦』では、「裏風俗」を舞台に人間の性欲に真っ向から向かい、この作品で三浦大輔が、第50回岸田國士戯曲賞を受賞する。2010年7月、エッセンで行なわれたテアターデアヴェルト 2010に招聘され、『夢の城』を初の海外公演として実施。以降、クンステンフェスティバルデザール(ブリュッセル)、ウィーン芸術週間、フェスティバルトランスアメリーク(モントリオール)他、計4ヶ国5公演をおこない、海外でも高い評価を得ている。

## 三浦大輔

「ポツドール」結成以降、全本公演の脚本・演出をつとめる。第50回岸田國士戯曲賞受賞。溝口真希子と共同監督した自主映画『はつこい』が第25回PFFびあフィルムフェスティバル(2003)で審査員特別賞を受賞。脚本・監督をつとめた『ボーイズ・オン・ザ・ラン』(原作:花沢健吾/主演:峯田和伸[銀杏BOYZ])が2010年に公開された。2010年5月には、PARCOプロデュース『裏切りの街』の作・演出、2011年2月には、青山円形劇場にて初の海外戯曲となる『THE SHAPE OF THINGS』(作:ニール・ラビュート/主演:向井理)の演出をつとめた。

## 公演歴

2011  
『おしまいのとき』  
ザ・スズナリ(東京)

2009  
『愛の渦』  
シアタートップス(東京)

2008  
『顔よ』  
本多劇場(東京)

2007  
『激情』  
本多劇場(東京)

2006  
『恋の渦』  
シアタートップス(東京)

## Potudo-ru

Founded in December, 1996 with Daisuke Miura and the member of the Theater Club at Waseda University. Has performed 19 works, including self-produced productions and collaborations as of today. Received the 50th Kunio Kishida Dramatic Award with *Love's Whirlpool*, which dealt plainly with human sexual desire, in 2005. Invited by Theater der Welt 2010 at Essen, Germany, the company performed *Castle of Dreams* overseas for the first time. With 5 more performances in 4 other countries, including Kunstenfestivaldesarts in Brussels, Wiener Festwochen and Festival TransAmériques in Montreal, the company has won raves from international audiences.

## Daisuke MIURA

Miura writes and directs all the performances of Potudo-ru. Received the 50th Kunio Kishida Dramatic Award in 2006. The independent film *First Love*, a co-directed with Makiko Mizoguchi, won the jury's special award at the 25th PFF Pia Film Festival in 2003. *Boys on the Run*, a film, which Miura wrote and directed, was released in 2010. Wrote and directed *City of Betrayal*, produced by PARCO, in May, 2010 and directed his first foreign play, *THE SHAPE OF THINGS*, written by Neil LaBute, at Aoyama Round Theater in February, 2011.

## Selected Works

2011  
**oshimai no toki**  
The Suzunari (Tokyo)

2009  
**Love's Whirlpool**  
THEATER/TOPS (Tokyo)

2008  
**Face**  
Honda theater (Tokyo)

2007  
**Passion**  
Honda theater (Tokyo)

2006  
**koi no uzu**  
THEATER/TOPS (Tokyo)

## REVIEW

### 『夢の城』レビュー *Reviews for Castle of Dreams*

「無秩序に、無目的にただだらと生活する8人だが、これは、見事に構成された演出である。ポツドールを率いる日本の演出家・三浦大輔が舞台上に投げ込むのは、表面的で薄っぺらなぞき趣味ではなく、空っぽの消費主義の、知的で徹底的にラディカルな振り付けである。(中略)誰もが、自分のためにだけ生き、欲望を鎮めようとする。三浦は、“人間的な人間”と“価値のある人生”の定義の裏を探るべく、厳密な形式を試み、我々に呈示する。」

『Kulturvollzug』2011年11月22日付

"It appears as if the eight people are arbitrarily living, without any purpose in life, but it is in fact a brilliantly considered work of art by Daisuke Miura. What Miura, director of Potudo-ru, a Japanese theater company, displays, is not voyeurism but an intellectual and radical choreography for empty consumerism. [...] Everybody lives only for him/herself and tries to deal with their own desires. Miura creates a rigorous structure in order to explore the meaning of being human and what is the value of life."

Kulturvollzug November 22, 2011



©Klaus Lefebvre

「『夢の城』において一ラディカルな『アニマル』もそうだが一三浦大輔は、生産と非生産のサイクルから抜け出した、ある日本の若者の生態を描く。彼らは、その場の必要を満たす時にしか外部とのコネクションを持たない。一つ前の世代(1980年)は、接触を求めているが、彼らは数枚の畳で出来た島を自ら転覆させ、手が届かない場所への切断を求める。」

『movement』2011年

"Daisuke Miura once again, after the radical *ANIMAL*, depicts the life of Japanese youth who withdraw from the production / nonproduction cycle in *Castle of Dreams*. They interact with the outside world only when they need to. The previous generation in the 1980's craved for human connection but they drift on the island made of a few Tatami mats and seek for a place no one can reach."

movement 2011



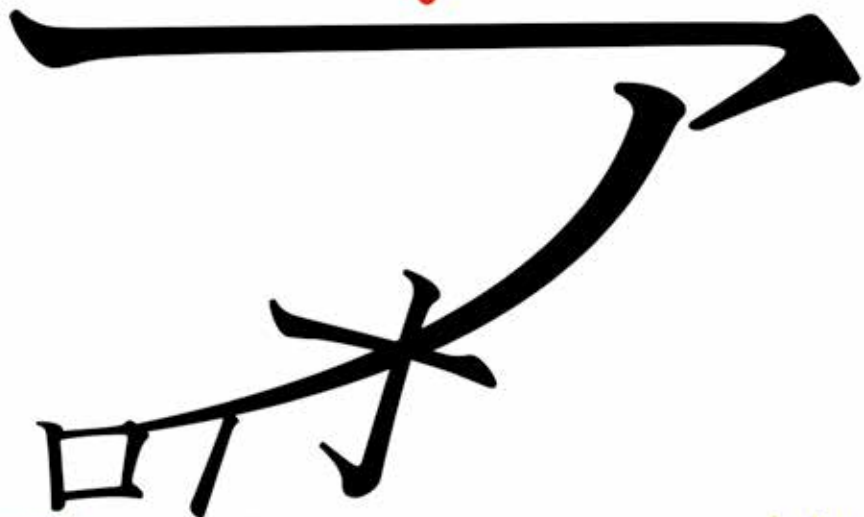
©Bruno De Tollenaere

asa-cThang & 巡礼

asa-cThang & Junray

TOKYO

新



劇場



design: Mabataki

新・アオイ口劇場

NEW Aoiro Theater

🕒 60 min (新作 | 世界初演 / New Creation | World Premiere)

1 10/25 (Thu) 20:00-  
10/26 (Fri) 20:00-  
10/27 (Sat) 17:00- □  
10/28 (Sun) 18:00-

\*開場は開演の10分前  
\* The theater opens 10 min.  
prior to the performance.

□ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk  
ゲスト: 丹下紘希 (映像 / アートディレクター、メインヴィジュアル製作)

音楽ユニットによる、パフォーマンスアートへの果敢な“巡礼”始まる!?  
新生「ASA-CHANG & 巡礼」が京都でそのベールをぬぐ!

**A bold pilgrimage (Junrei) of musicians to the Art of Performance begins!?**  
**A renewed ASA-CHANG & Junray is unveiled in Kyoto!!**

ASA-CHANGのソロユニットとして生まれ変わった新生「ASA-CHANG & 巡礼」による新作パフォーマンスが、KYOTO EXPERIMENTで世界に先駆けて初演される。「ASA-CHANG & 巡礼」は、パワフルさと繊細さを兼ね備え、躍動感のある唯一無二のそのビートで小泉今日子やCHARA、UAなど多くのアーティストから厚い信頼を得るASA-CHANGを中心として結成された音楽ユニット。独自の波動に満ちた楽曲で日本のみならずヨーロッパでも高く評価されるとともに、ライブスタイルや衣装、グッズにまで及ぶ独特の美意識で貫かれた世界観や、ミュージックビデオにおけるコンテンポラリーダンサーとの共演が世界的な注目を集めるなど、音楽界において特異な存在感を放ってきた。そして今回、新たにライブメンバー2人を加え、菅尾なぎさ、垣尾優、斉藤美音子、鈴木美奈子、振子びじんといった個性的なダンサーに、スチャダラパーのANIを迎え、既存の枠組みにとらわれない新たなパフォーマンスを創り出す。

ASA-CHANG & Junray are ready for their world premiere at KYOTO EXPERIMENT. ASA-CHANG & Junray is a music group formed around unique percussionist and drummer ASA-CHANG. Besides various collaborations with musicians such as Kyoko Koizumi, CHARA and UA, this group's original aesthetic sense and worldview include a custom-made sound system and special costumes. Their performance has been highly acclaimed in Europe as well as Japan. And their collaboration with contemporary dancers for their music video has drawn worldwide attention. This year, with the addition of two new members, the renovated ASA-CHANG & Junray will see its first performance. In addition to dancers such as Nagisa Sugao, Masaru Kakio, Mineko Saito, Minako Suzuki and Pijin Neji, this work will also welcome ANI from hip-hop band Scha Dara Parr.

京都芸術センター 講堂  
Kyoto Art Center Auditorium

音楽: ASA-CHANG & 巡礼 (ASA-CHANG、後関好宏、須原杏)  
構成・演出: ASA-CHANG、菅尾なぎさ  
振付・出演: 菅尾なぎさ、垣尾優、斎藤美音子  
出演: ANI、鈴木美奈子、振子びじん  
照明: 高田政義 (RYU)  
舞台美術: 宇治野宗輝、奥田ひろみ  
衣装: 安食真  
映像: 吉田悠  
音響: 葛西敏彦  
舞台監督: 夏目雅也  
制作: プリコグ  
協力: 枇杷系スタジオ  
製作: ASA-CHANG & 巡礼  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Music: ASA-CHANG & Junray (ASA-CHANG, Yoshihiro Goseki, Anzu Suhara)  
Concept, Direction: ASA-CHANG, Nagisa Sugao  
Choreography, Dance: Nagisa Sugao, Masaru Kakio, Mineko Saito  
Dance: ANI, Minako Suzuki, Pijin Neji  
Lighting: Masayoshi Takada (RYU)  
Stage Design: UJINO, Hiromi Okuda  
Costume: Makoto Anjiki  
Video: Yu Yoshida  
Sound: Toshihiko Kasai  
Stage Manager: Masaya Natsume  
Production: precog  
In cooperation with BIWAKEI Studio  
Produced by ASA-CHANG & Junray  
Co-Produced by KYOTO EXPERIMENT  
Presented by KYOTO EXPERIMENT

## ASA-CHANG

ヘア・メイキャップアーティストを目指して、上京。渡辺サブロオ氏のアシスタントを経て、SASHU所属のヘア・メイクへ。1980年代中～後半にかけて、Olive、anan、CUTIE等のファッション誌や、小泉今日子、本木雅弘、山瀬まみ等の当時のCutting・エッジなアイドル、タレントの仕事も多く手掛けるも、1989年に東京スカパラダイスオーケストラのパーカッション兼バンド・マスターとしてデビュー。その自ら創始した東京スカパラダイスオーケストラがブレイクを果たすが、1993年に脱退、フリーランスに。スカパラ在籍時から、その特異なライブ・パフォーマンス、プレイは注目されていたが、独立後の数々のセッション・ワークにより、ドラマー、パーカッショニストとしてその存在を知られるようになる。いわゆるラテン・パーカッション系だけでなくインド・アジア系から玩具類、ガラクタ、シンセ音などを散りばめ、楽曲にアプローチする彼独特のプレイスタイルを確立し、ドラマーとしても躍動感のある唯一無二のそのビートは、パワフルさと繊細さを兼ね備え、数多くのアーティストからの信望を集めている。ポップとアバンギャルドを軽々と行き来する様々な活動は、多くの注目を集めている一方、作曲・アレンジもこなすプロデューサーとしても活躍している。

## ASA-CHANG&巡礼 活動歴

- 2009  
音楽×ダンス公演『JUNRAY DANCE CHANG アオイロ劇場』  
世田谷パブリックシアター(東京)
- 2006  
音楽×ダンス公演『JUNRAY DANCE CHANG』  
Super Deluxe(東京)
- 2003  
イデビアン・クルーのダンス公演『理不尽ベル』の音楽を担当
- 2002  
イギリスのレーベルLeafよりアルバム『JUNRAY SONG CHANG』がリリース、英国WIRE誌の2002年ベストアルバム第4位に選ばれる。
- 2000-2003  
FUJI ROCK FESTIVALに4年連続で出演
- 1998  
『ASA-CHANG&巡礼』を結成

## ASA-CHANG

ASA-CHANG moved to Tokyo to pursue a career as a hair and make-up artist. He became an assistant to Sablo Watanabe and a member of the hair and make-up staff at SASHU. From the mid to late 1980s he worked for *Olive*, *anan* and *Cutie* and various other fashion magazines, as well as with cutting-edge idols and TV stars of the time such as Kyoko Koizumi, Masahiro Motoki and Mami Yamase. In 1989 he debuted as percussionist and bandleader of the Tokyo Ska Paradise Orchestra. Although a founding member of TSPA, in 1993 he decided to leave the band and go freelance. Although his peculiar live performances had already gathered a large amount of attention since his time as a member of the Tokyo Ska Paradise Orchestra, thanks to his many independent work sessions he started to become renowned as a drummer and percussionist. His work ranges from Latin influenced percussion to Indian/Asian drums, music with toys, other odds and ends, and synthesizer sounds, which has become the base for a very peculiar approach to music and an original playing style. As a percussionist, he has the dynamism of a unique beat that is both powerful and subtle, which has earned him great popularity among various artists. In his multiple and well-recognized activities he moves easily between avant-garde and pop, and is simultaneously active as a composer, arranger and producer.

## History of ASA-CHANG & Junray

- 2009  
[Performance] *JUNRAY DANCE CHANG Aoiro Theater*  
Setagaya Public Theatre (Tokyo)
- 2006  
[Performance] *JUNRAY DANCE CHANG Super Deluxe* (Tokyo)
- 2003  
Composed music for idevian crew's dance performance, *Unreasonable Mme Belle*
- 2002  
Album *JUNRAY SONG CHANG* was released by British label The Leaf. Chosen as the 4th best album by WIRE magazine
- 2000-2003  
Be in the line-up for FUJI ROCK FESTIVAL for four consecutive years
- 1998  
Founded ASA-CHANG&Junray

## DISCOGRAPHY

### ASA-CHANG&巡礼 ASA-CHANG & Junray

#### Album

5th



『影の無いヒト』(commons)  
Kage no nai hito

4th



『みんなのジュンレイ』(ki/oon)  
Minna no Junray

3th



『つぎねぶ』(HOT-CHA RECORDS)  
TSU GI NE BU

2th



『花』(HOT-CHA RECORDS)  
Hana

1st



『ダブルマグラマボンゴ』(POLYSTAR)  
Tabla Magma Bongo

#### Single



『かな feat. ハナレグミ』(ki/oon)  
Kana



『背中 feat. 小泉今日子』(HOT-CHA RECORD)  
Senaka



『JUNRAY DANCE CHANG アオイロ劇場』  
/ JUNRAY DANCE CHANG Aoiro Theater 2009  
photo: Kikuko Usuyama

# ビリー・カウイー

biffaffi ch fife

● BRIGHTON

## Tango de Soledad / The Revery Alone / In the Flesh

京都芸術センター  
ギャラリー北・南  
Kyoto Art Center  
North and South Gallery

1 9/22(Sat) - 10/28(Sun) 10:00-20:00

※10/5のみ京都芸術センターにてニュー・ブランシュのため22:00まで (p.65)

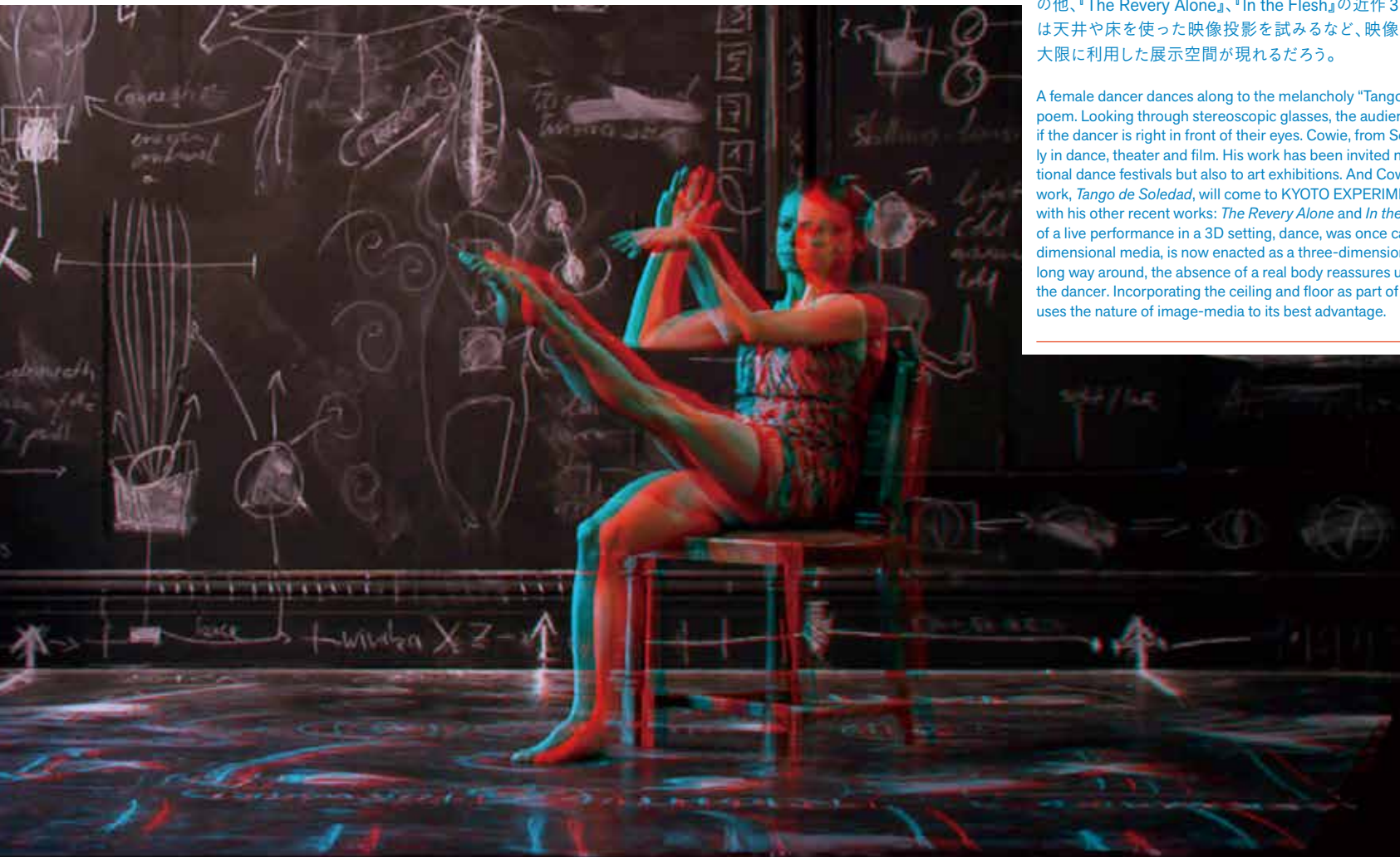


photo: Billy Cowie

ダンスを映像で撮影、あえてそれを3Dにて空間投影。  
パフォーマンスにおけるライブの意義を改めて問いかける。

**3D projection of a film of dance.**  
The work asks us "what is the meaning of live performance?"

哀愁漂うタンゴの名曲「タンゴNo.3」と詩の朗読に合わせて踊り続ける、1人の女性ダンサー。ビリー・カウイーによる映像インスタレーション作品は、そんなダンス風景が3Dメガネをかけた観客の目の前に飛びだしてくる…。

ダンス、演劇、そして映像プロジェクトにも関わるなど、幅広い分野で活躍するスコットランドのアーティスト、ビリー・カウイー。

生身のダンスを2次元の映像で捉え、それを再び擬似的な3次元の映像インスタレーションにて公開するこの作品。迂遠なやり方に見えて、リアルな身体が現前しないことによる不在感が、より一層ダンサーの身体を強く感じさせるものとなる。今回は、先述の作品『Tango de Soledad』の他、『The Revery Alone』、『In the Flesh』の近作3作品を紹介。会場では天井や床を使った映像投影を試みるなど、映像メディアの特性を最大限に利用した展示空間が現れるだろう。

A female dancer dances along to the melancholy "Tango No.3" and a recited poem. Looking through stereoscopic glasses, the audience sees the image as if the dancer is right in front of their eyes. Cowie, from Scotland, works broadly in dance, theater and film. His work has been invited not only to international dance festivals but also to art exhibitions. And Cowie's latest installation work, *Tango de Soledad*, will come to KYOTO EXPERIMENT 2012 together with his other recent works: *The Revery Alone* and *In the Flesh*. Projecting film of a live performance in a 3D setting, dance, was once captured only in two dimensional media, is now enacted as a three-dimensional body. Seemingly a long way around, the absence of a real body reassures us of the physicality of the dancer. Incorporating the ceiling and floor as part of the projection, Cowie uses the nature of image-media to its best advantage.

『Tango de Soledad』  
演出・振付: ビリー・カウイー  
出演: エミー・ホリングスワース  
チェロ: リン・ウェイツェン  
声(スペイン語)・翻訳: クララ・ガルシア・フライル  
声(日本語)・翻訳: 門田美和  
ドローイング: シルケ・マンショルト  
衣装: ホリー・ムレー  
照明: アダム・フーパー  
制作: ヴィクトリア・メロディ  
委嘱: サウス・イースト・ダンス  
助成: Jerwood Charitable Foundation, Esmée Fairbairn Foundation  
※2010年ナイチンゲール・シアター(ブライトン)にて撮影

『The Revery Alone』  
演出・振付・音楽: ビリー・カウイー  
出演: エレノア・アンサーリ

『In the Flesh』  
演出・振付・音楽・脚本: ビリー・カウイー  
アートディレクション: シルケ・マンショルト  
出演: サラ・ポポワ  
声(英語): シルケ・マンショルト  
声(日本語)・翻訳: 門田美和  
助成: アーツカウンシル・イングランド, the University of Brighton Faculty of Arts and Communication Research Fund

主催: KYOTO EXPERIMENT

**Tango de Soledad**  
Direction, Choreography: Billy Cowie  
Dancer: Amy Hollingsworth  
Cello: Wei-Tsen Lin  
Spanish Voice, Translation: Clara Garcia Fraile  
Japanese Voice, Translation: Miwa Monden  
Drawings: Silke Mansholt  
Costume: Holly Murray  
Lighting: Adam Hooper  
Production manager: Victoria Melody  
Filmed at the Nightingale, Brighton 2010  
Commissioned by South East Dance  
Supported by Jerwood Charitable Foundation, Esmée Fairbairn Foundation

**The Revery Alone**  
Direction, Choreography, Composition: Billy Cowie  
Performer: Eleonore Ansari

**In the Flesh**  
Direction, Choreography, Music, Text: Billy Cowie  
Art direction: Silke Mansholt  
Performer: Sara Popowa  
English Voice: Silke Mansholt  
Japanese Voice, Translation: Miwa Monden  
Supported by Arts Council England and the University of Brighton Faculty of Arts and Communication Research Fund

Presented by KYOTO EXPERIMENT



## ビリー・カウィー

主にインスタレーションおよびダンスの映像を投影する作品を制作。今までに、BBCのDance for the Cameraによるコミッションワーク2作、アーツ・カウンシル・イングランドとの共同制作プロジェクト2作、同様にイギリスのテレビ局Channel 4によるコミッションワークの計5作の映像作品を発表している。ビリーの作品について書かれた『Anarchic Dance』（ラウトレッジ出版）は、2006年1月に出版されている。現在は、ブライトン大学の主席特別研究員でもある。

## REVIEW

### Tango de Soledad

「ビリー・カウィーによる映像インスタレーションでは、ダンサーを間近に感じられる。会場で配られる3Dメガネを身につければ、ダンサーが目の前に現れ、自分のためだけに踊ってくれているかの様だ。カウィーのイリュージョンは巧妙で、みる者を魅了するが、エミー・ホリングスワースのソロダンスを見ていると、タンゴのパートナー、ひいては、恋人がいなくなった後の哀愁を感じずにはいられない。そんな感情を覚えるのは、手を伸ばせば触れられる近距離でエレガントに舞う彼女の姿を、まるで覗き見ているかの様に、じっとみつめているからかもしれない。」

メアリー・ブレナン  
『Glasgow Herald』2011年8月27日

“You can get to very close quarters with the solo dancers in the film installations by Billy Cowie – and if you wear the little stereoscopic glasses that he provides, the performers will look as if they’re there, performing just for you. There’s wonderful craft in Cowie’s illusions, but in the solitary dancing of Amy Hollingsworth in *Tango de Soledad* there is a profound reflection on the rituals we revisit when love, or a tango partner, has gone. And maybe we feel like that absent partner, voyeuristically observing the lonely beauty, the elegant resolve of a dancer who is, in every sense, out of our reach.”

Mary Brennan, *Glasgow Herald* 27 Aug 2011



photo: Billy Cowie

### The Revery Alone



©Matthew Andrews

「アンサーリのゆっくりと優雅な動きは、見る者の心を捉えて離さない。彼女は両手両足でハンドルを握っている。そのことが自由を制限しつつも、独特の動きを生み出し、ゆるやかなスピードが、シンプルゆえに魅惑的な動きの魅力を増幅させている。秀逸に振付られたダンサーの動きは彫刻的だ。しかし、時々目が会う、何かを訴えかける様な彼女のまなざしは、人間的な感情を呼び起こし、映像を観ているというよりは生の舞台を観ている感覚を覚える。」

ラルフ・ミラー  
『LATEST 7 Magazine』2008年12月

## Billy COWIE

He works principally in the area of installation and screen dance. He has completed five major screen projects (two BBC Dance for Camera commissions and two ACE Capture projects and a Channel 4 commission). A book about his work entitled *Anarchic Dance* was published by Routledge in January 2006. He is currently Principal Research Fellow at the University of Brighton.

### In the Flesh

「3D体験は、みる者の動きによって3D映像の見え方がどう変わるかを理解させてくれる。その謎を探ろうとすることで、みる者の行為はダンス作品の一部となる。同作品は、テクノロジー／エンターテインメント／芸術作品の境界を巧みに行き来し、その融合を謳歌している。」

デダルス・ワインライト  
(Boston Cyberartsアシスタント・ディレクター)

“The 3D experience, makes you search for an understanding of how the 3D image shifts as you move and sway around the projection, and this search turns your actions into a dance with the character. The work justifies and celebrates its existence with its seamless mixture of formal qualities, entertainment and creativity.”

Dedalus Wainwright  
Assistant Director Boston Cyberarts



photo: Billy Cowie

“Ansari’s naked body moves in a slow, graceful but haunting manner, her hands and feet gripping four handles, which both restrict and define her movement. The simple movements are captivating, and seem to be amplified by their dilatoriness. The unclothed figure’s movements are choreographed and have sculptural feel, but on occasion her eyes catch yours and her accusatory expression bring home the human emotion and makes you feel as if you are experiencing the performance live rather than watching a film. It is a fascinating piece, utilising a challenging medium.”

Ralph Miller *LATEST 7 Magazine* Dec 2008



©Matthew Andrews



# KYOTO EXPERIMENT フリンジ・パフォーマンス “PLAYdom ↗ (プレイダム)”

KYOTO EXPERIMENT FRINGE PERFORMANCE “PLAYdom ↗”

📅 9/28(Fri) - 10/21(Sun)

🏠 元・立誠小学校 / Former Rissei Elementary School



KYOTO EXPERIMENT 2012では、今年もフリンジ・パフォーマンス企画として、元・立誠小学校を会場に3週間にわたって新進気鋭の若手アーティストたちの作品を連続上演します。演出家・杉原邦生のコンセプトのもと、今回は「そら」をテーマに2つの劇場空間が出現。音楽室は床面が「空」の絵で覆われ、講堂はKUNIO10『更地』の舞台空間がそのまま引き継がれます。それぞれの空間にアーティストたちが「FREEDOM=自由」な発想で挑む多彩な「PLAY」をお見逃しなく!

As a fringe project, KYOTO EXPERIMENT 2012 introduces the work of young emerging artists at the Former Rissei Elementary School for three weeks. Under the direction of Kunio Sugihara, two theater spaces are created, based on this year's theme "sky". The floor of the music room is covered by a painting of the sky and the auditorium takes on the same setting as *Sarachi (Vacant Lot)* by KUNIO. How do the artists creatively approach such specific spaces!?

## 「もっと ↗ もっと ↗ 遊ぶ。」

“PLAYdom ↗”コンセプト 杉原邦生

僕は〈自由〉という言葉がよく分かんないなと思うことがあります。〈自由〉は常に〈不自由〉という言葉の上にしか存在できないんじゃないかと思うからです。例えば、とある部屋で「自由に過ごしてください」と言われても、部屋という限られた空間の中でそこにあるものでしか時間を過ごすことができない。つまり、〈自由〉ってものは、サイコーに〈不自由〉な状態のことを言うんじゃないかと、ふと思うんです。

僕は、劇場という場所はサイコーの〈遊び場〉だと言い続けてきました。そして、その遊び場でマジにガチで〈遊ぶこと〉=PLAYすることが《演劇》だと言い続けてきましたし、その考えはいまも変わりません。でも不意に、もっと〈自由〉に遊びたい!と思うことがあります。もっともっと自由に〈PLAY=演劇〉したい!!だから、今回は今までよりもっと〈不自由〉な遊び場をつくりたいと思いました。元・立誠小学校に出現する「そら」をテーマにした2つの空間は、どちらもアーティストにとって非常に扱いづらい空間になるのではないかと思います(笑)でも、そこから、新たな〈自由〉が生まれるはず、そう僕は確信しています。

さあ、みなさん、準備は良いですか?

あとはこの〈遊び場〉に来てくださるお客様と一緒に、HAPPY♥でFREEDOMな時間を過ごせれば、それこそが僕の思う《演劇》の真髄、僕が願う〈劇場〉の姿です。テンション上げまくって ↗ 遊びに来てください!!!!

コンセプト:杉原邦生/舞台監督:石田昌也/共催:立誠・文化のまち運営委員会

## “more ↗ more ↗ play”

“PLAYdom ↗”Concept: Kunio Sugihara

I sometime get confused about the idea of “free-dom”. Because I think it can only exist in the realm of “captivity”. For example, when someone tells you to “spend your time freely” in a room, you can only do it to the extent that the things in the restricted space allow. That makes me wonder if “free” is a condition that is indeed highly captive.

I keep saying that theater is the best playground you could imagine. And to play hard and seriously in the playground is what theatrical performance is all about. I still think so. But sometime I am struck by this impulse that I want to PLAY more freely. That's how I decided to create a much more restricted playground for this year's FRINGE programs. The two spaces constructed under the theme of “sky” at the former Rissei Elementary School must be pretty inconvenient for the artists to deal with. Yet, because of it, I believe a new sense of freedom will be brought to life.

Are you ready? To share a HAPPY♥ and FREE time with an audience that comes to step in the same playground is the essence of theater performance and how I wish theater to be. Please come and play!! And make sure you give it everything you've got when you come!!!!

Concept: Kunio Sugihara / Stage Manager: Masaya Ishida / Co-Presented by Rissei Cultural City Steering Committee

## 劇団競泳水着

/ Theater Co. Kyoei-Mizugi

『リライ』  
Lilly



photo: Chieko Ishizawa

いつの間にか、懐かしい気分になっていた。近くに遠く、甘くて苦い思い出。願いは一つ、彼女と再び逢うこと。初秋の京都で描かれる、劇団競泳水着の「記憶」の物語。 Somehow I was feeling nostalgic. A close but distant and sweet but bitter memory. My only wish is to see her again. It is the story of "memory" by Theater Co. Kyoei-Mizugi, portrayed in Kyoto's early autumn.

脚本・演出: 上野友之 / Text, Direction: Tomoyuki Ueno

劇団競泳水着

繊細で温かみのある人物描写と、想いと思いが交錯する瞬間の描写で、東京の小劇場界で高く評価を得、近年は、積み上げられた何気ない日常の記憶から、現代における家族・恋人・友人などの人間関係を丁寧に描いた作品を上演。

Theater Co. Kyoei-Mizugi

With their portrayal of vulnerable and humanistic characters and how their emotions interact instantaneously, the among Tokyo's small theaters. Recent work depicts contemporary relationships such as family, lovers and friends, with great deliberation, out of the randomly accumulated memories of everyday life.

## ナカゴー

/ Nakago

ナカゴー特別劇場vol.8『鳥山ふさ子とベネディクトたち』

Special Theater vol.8 *Fusako Toriyama and the people around the incredible Benedict*



photo: Tutoji

鳥山ふさ子という、ごく普通の女の話と、超人ベネディクトと周囲の人々の話(こちらは再演)の二本立てです。上演時間は合わせて90分ほどを予定しています。ぜひ。 Taking a total of 90 minutes, this double bill performance includes the story of a quite ordinary woman, Fusako Toriyama and the story of the people around the incredible Benedict. Come and see.

作・演出: 鎌田順也 / Text, Direction: Toshiya Kamata

ナカゴー

「なにやってるんだ」的アイデアと「どうしてくれるんだ」的構成で魅せる演劇集団です。ぜひ。

Nakago

The company's aim is to make the audience wonder "what are you doing?" The direction takes up the form of the question "how are you going to make this up to me?" Come and see.

## 口口

/ Iolo

『LOVE02』



photo: Kaoru Okuyama

誰かの想いがほんのちょっとだけ別の誰かに届いて、その別の誰かの想いが、そのまた別の誰かにほんのちょっとだけ届いて、そうやって想いが波及してゆっくり広がっていく景色を夢みながつくりました。

LOVE02 is about how one's thoughts are conveyed, to the extent that they can be, to someone else and that person's thoughts are conveyed to yet another person.

脚本・演出: 三浦直之 / Text, Direction: Naoyuki Miura

口口

東京で活動する演劇カンパニー。主宰・三浦のバックグラウンドにあるサブカルチャーへの純粋な想いを基に、同時多発的で情報過多なストーリーを、さらに猥雑でハイスピードな演出で展開する。素晴らしいのはバラエティ!!

Iolo

Based in Tokyo, their creative drive is born from a true respect for sub-culture that Miura has been in touch with. This feeling is sublimed into a fast and boisterous performance of information stories which are repeatedly and simultaneously crisscrossing. Viva variety!

## ニッポンの河川

/ Nippon no Kasen

『大地をつかむ両足と物語』

Daichi wo Tsukamu Ryouashi to Monogatari



photo: Aki Tanaka

ある家族の半生を45分ほどで駆け抜ける物語。途中、駆けずり歩いたり、スキップしたり、変な顔してカニ歩きしたりもする物語! 日本三大物語の内の一つ風物語

The work rushes through half a life story of one family in 45 minutes while walking instead of rushing, skipping and crabwalking with a funny face in the middle. Surely, it will be remembered as one of the three great Japanese stories (maybe).

作・演出: 福原充則 / Text, Direction: Mitsunori Fukuhara

ニッポンの河川

役者が10数役をシームレスに演じ分けながら、役者の手作り照明を役者の手作りのスイッチで操り、役者が改造したウォークマンから役者が音楽を流して進行する総予算8万円程度のDIY演劇! いろいろよく壊れます。

Nippon no Kasen

Actors seamlessly perform several roles in the work while they themselves also manipulate the hand-made lighting system. Music is played by walkman converted into a sound system by one of the actors. It is a roughly 80,000 yen budget do-it-yourself theater in which things often break.

## 男肉du Soleil

/ Oniku du Soleil

大長編 男肉 du Soleil

『団長のビバリーヒルズ Copp』

Beverly Hills  
Cop starting the  
Leader of Oniku  
du soleil



photo: Maki Arimoto  
art direction: Tsutomu  
Horiguchi(underston)

団員達は知らない団長の過去がある。

それは、アメリカのビバリーヒルズ時代のお話。

The members don't necessarily know everything about their leader. One of the stories is from when he was living in Beverly Hills, America.

団長:池浦さだ夢 / Leader:Sadayume Ikeura

男肉du Soleil

2005年、近畿大学にて碓井節子に師事し、ダンスを学んでいた学生が集まり結成。J-POP、ヒップホップ、レゲエ、漫画、アニメ、ゲームなど、さまざまなサブカルチャーの知識を確信的に悪用するという方法論のもと、唯一無二のダンスパフォーマンスを繰り広げている。

Oniku du Soleil

Students who studied under Setsuko Usui at Kinki University formed the company in 2005. Appropriating pop-culture such as J-pop, hip-hop, reggae, comics, Manga and games as their strategies, Oniku du Soleil creates distinctive dance pieces, dance pieces.

## アマヤドリ(ひょっとこ乱舞改め)

/ Amayadori (Former Hyottoko Ranbu)

幸せはいつも小さくて

東京はそれよりも大きい

Happiness is always small and Tokyo is larger than it.



photo: Kumi Akasaka

2009年に初演され、戦慄と賞賛を巻き起こした『モンキー・チョップ・ブルックナー!!』を新生上演! 崩壊していく共同生活と「監禁の連鎖」を巡る濃厚な密室劇。

Reproduction (New edition) of *MONKEY CHOP BRUCKNER!!*, which premiered in 2009. An intense performance about dysfunctional communal life and a cycle of captivity, acted out in a sealed room.

作・演出: 広田淳一 / Text, Direction: Junichi Hirota

アマヤドリ

2001年「ひょっとこ乱舞」として結成し2012年より「アマヤドリ」として再始動。広田淳一による戯曲を中心に「しゃべる身体」に着目して公演を重ねる。さりげない日常会話ときらびやかな詩的言語を駆使して身体性を絡めた表現を追求している。

Amayadori

Resumed in 2012 as Amayadori after being founded as Hyottoko Ranbu in 2001. Mainly performing the work created by Junichi Hirota, the company's artistic theme is "the speaking body". Drawing fully upon both the strength of everyday conversation and poetic rhetoric, the company tries to achieve a marvelous marriage of word and body.

## ぐうたららばい

/ goota-lullaby

観光裸(かんこうら)

Canned Coke



京都に不倫旅行中のアダルトカップル。ちょっと酔っぱらって、夜の散歩をして、フラフラと廃校になった小学校に忍び込む。どうしようもないやさしさ、どうにもならないこれからしかない二人は、教室の中、遊びのような心をする...

A middle aged couple, who are having an affair, travels to Kyoto. Probably drinking too much wine, they stagger and sneak into an abolished school on a stroll in the night. Affection for each other, a lack of a destination, and a bleak future are all that they have. They carry out a childish suicide pact in one of the classrooms...

作・演出・音楽: 糸井幸之介 / Text, Direction, Music: Yukinosuke Itoi

ぐうたららばい

FUKAIPRODUCE羽衣にて「妙〜ジカル」の作・演出・音楽を手掛ける糸井幸之介によるユニット。ぐうたらな大人へのららばいをお届けする静かなミュージカル。

goota-lullaby

Led by Yukinosuke Itoi, director of FUKAIPRODUCE Hageromo, the performance unit aims to bring a lullaby to lazy adults in the form of a quiet musical.

## Baobab

二都市フェスティバルツアー

『〜飛来・着陸・オードブル〜』

〜come flying・landing・hors d'oeuvre〜



Every body! カム カム どうしてか集う男女8人 そこに足跡はなし 怠慢な精神に拍車をかけ 取り囲むはオードブル ひたすら続く、食と欲。誰が誰だか五里霧中これが、[2012年 Baobab式 未来型 花〜匂ダンス] 欲しいのはあの子じゃない、虚無 キョム。

Come on every body! 8 men and women randomly get together. They leave no footprints. Feeding off their lazy spirit, they gather around the hors d'oeuvres. Endless appetite and lust. Nobody cares who is who.

振付・構成・演出: 北尾亘 / Choreography, Concept, Direction: Wataru Kitao

Baobab

主宰、北尾亘が全作品の振付・構成・演出を行う。トヨタコレオグラフィアワード2012 オーディエンス賞受賞。作品毎にダンサーや役者の垣根を越えた人材を募り、みな踊らせてしまう大胆なダンスの扱いが特徴。

Baobab

With Wataru Kitao choreographing and directing all the work, the company was awarded the Audience Award at the Toyota Choreography Award 2012. Auditioning different dancers and actors with various backgrounds for each project, Kitao gets everyone to dance with his bold approach toward Dance.

## FRINGE・パフォーマンス公演スケジュール / チケット料金

Fringe Performance Schedule / Tickets

参加アーティスト Artist	演目 Title	日時・会場 Date, Venue	チケット料金 Ticket Price	上演時間 Duration
劇団競泳水着 Theater Co. Kyoei-Mizugi	リリイ Lilly TOKYO   THEATER	9/28 (Fri) 17:30-★ 9/29 (Sat) 14:00- / 18:00- 9/30 (Sun) 14:00- / 18:00- 音楽室 / Music Room	一般   前売・当日 ¥2,500 高校生以下 <sup>※</sup>   無料 <sup>※</sup> 枚数限定・要予約・劇団のみ扱い	70min.
ナカゴ Nakago	ナカゴー特別劇場vol.8 鳥山ふさ子とベネディクトたち Special Theater vol.8 Fusako Toriyama and the people around the incredible Benedict TOKYO   THEATER	10/2 (Tue) 19:30- 10/3 (Wed) 19:30- 10/4 (Thu) 19:00-★ 10/5 (Fri) 14:00- 音楽室 / Music Room	前売・当日 ¥2,500	90min.
口口 lolo	LOVE02 TOKYO   THEATER	10/5 (Fri) 19:00- 10/6 (Sat) 14:00- 10/8 (Mon) 19:00- 10/9 (Tue) 16:30★ 講堂 / Auditorium	一般   前売 ¥2,500 当日 ¥2,800 学生   前売 ¥2,300 当日 ¥2,600 高校生以下   ¥1,000 (前売・当日共)	100min.
ニッポンの河川 Nippon no Kasen	大地をつかむ両足と物語 Daichi wo Tsukamu Ryouashi to Monogatari TOKYO   THEATER	10/6 (Sat) 20:00- 10/8 (Mon) 17:30- 10/9 (Tue) 15:00-★ / 19:30- 10/10 (Wed) 19:00- 音楽室 / Music Room	(前売・当日共) 一般   ¥2,500 学生   ¥2,000	60min.
男肉 du Soleil Oniku du Soleil	大長編 男肉 du Soleil 『団長のビバリーヒルズ Copp』 Beverly Hills Cop starting the Leader of Oniku du soleil OSAKA   DANCE	10/11 (Thu) 19:00- 10/12 (Fri) 19:00- 10/13 (Sat) 13:00-★ / 17:00- 講堂 / Auditorium	一般   前売 ¥2,500 当日 ¥2,900 学生   前売 ¥2,000 当日 ¥2,500 *全席指定、他席種あり	120min.
アマヤドリ(ひょっとこ 乱舞改め) Amayadori (Former Hyottoko Ranbu)	幸せはいつも小さくて東京は それよりも大きい Happiness is always small and Tokyo is larger than it. TOKYO   THEATER	10/13 (Sat) 19:15- 10/14 (Sun) 17:00-★ 10/15 (Mon) 19:00- 10/16 (Tue) 15:00- 音楽室 / Music Room	一般   前売 ¥2,000 当日 ¥2,300 学生   前売 ¥1,000 当日 ¥1,200 初日割   前売 ¥1,500 当日 ¥1,800	105min.
ぐうたららばい goota-lullaby	観光裸(かんこうら) Canned Coke TOKYO   THEATER	10/18 (Thu) 19:30-★ 10/19 (Fri) 18:00- 10/20 (Sat) 19:30- 10/21 (Sun) 18:00- 音楽室 / Music Room	前売・当日 ¥2,000	65min.
Baobab	Baobab 二都市フェスティバルツアー 〜飛来・着陸・オードブル〜 〜come flying・landing・hors d'oeuvre〜 TOKYO   DANCE	10/18 (Thu) 《プレビュー》 18:00- 10/19 (Fri) 19:30- 10/20 (Sat) 13:00- / 17:30- 10/21 (Sun) 15:00-★ 講堂 / Auditorium	一般   前売 ¥2,200 当日 ¥2,500 学生   前売 ¥1,800 当日 ¥2,100 プレビュー <sup>※</sup> ¥1,500 (前売・当日共) <sup>※</sup> カンパニーのみ取扱い。	80min.

★の回終演後、杉原邦生とのポスト・パフォーマンス・トークを開催

※学生、高校生以下チケットをお求めの方は当日証明書のご提示が必要です。

※公演の詳細、最新情報は各カンパニー・ウェブサイトをご覧ください。

### 各公演チケット

取扱=KYOTO EXPERIMENT チケットセンター(窓口のみ)、各カンパニーウェブサイト

### FRINGEセット券【枚数限定】

・選べる! 3演目券 | ¥5,400

・ユース(25歳以下)・学生限定! 全演目券 | ¥9,600

取扱=KYOTO EXPERIMENT チケットセンター(窓口のみ)

### Advance Tickets

Tickets only available at KYOTO EXPERIMENT Ticket Center Box Office and each company's website.

### FRINGE Coupon Tickets [Limited Number]

Pick Your Favorites! 3 Performances Coupon Tickets | ¥5,400  
Youth (Under 25) and Students Only ★All Performances Tickets | ¥9,600

\*Tickets only available at KYOTO EXPERIMENT Ticket Center Box Office.



## 関連イベント

**9/22 (Sat) - 10/7 (Sun)** 松見拓也 / 写真展  
**11:00-19:00** (最終日は18:00まで)  
月曜休  
KYOTO EXPERIMENT 2012公式ブックレット用に撮りおろした写真を中心に展示します。  
会場: Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・バルク]  
京都市中京区三条通御幸町弁慶石町48三条ありもとビル [ル・グランマーブル カフェ クラッセ] 2F  
料金: 無料  
協力: Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・バルク]

**9/23 (Sun)** フォーラム「身体 / 障がい / ローカリティ  
16:30- 一劇団ティクバ+循環プロジェクトをめぐって」  
会場: 元・立誠小学校 職員室  
料金: 無料 [申込不要]

**10/8 (Mon)** レクチャー「ダンスと社会ーリア・ロドリゲスの実践」  
17:30-  
会場: 京都府立府民ホール アルティ  
料金: 無料 [申込不要]

**10/8 (Mon) - 14 (Sun)** チョイ・カファイ『Soft Machine』映像バージョン展示  
10:00-20:00  
会場: 京都芸術センター 和室「明倫」  
料金: 無料

**10/14 (Sun)** 演出家フォーラム「舞台芸術と社会」  
14:00-16:00 @フリンジ“PLAYdom”  
フリンジ・パフォーマンス企画3年間の総決算として、若手演出家によるフォーラムを開催します。彼らがいまだのように舞台芸術と向き合い、どのような未来を描いているのか、「舞台芸術と社会」というテーマを軸に、熱いディスカッションを展開します。“表現する”ということはどのようなことなのか? 誰に向かって、どこに向かって、何を“表現して”いくのか? 社会はいま“表現”を求めているのか? “表現”の未来に可能性はあるのか?  
司会: 山崎彬 (悪い芝居)  
パネリスト: 北尾亘 (Baobab)、木ノ下裕一 (木ノ下歌舞伎)、京極朋彦 (京極朋彦ダンス企画)、ピンク地底人3号 (ピンク地底人)、三浦直之 (ロコ)、向坂達矢 (京都ロマンポップ)  
会場: 元・立誠小学校 職員室  
料金: ¥500 [要申込\*]

**10/21 (Sun)** アーティスト・トーク「datamaticsをめぐって」  
14:00- 池田亮司 (モデレーター 浅田彰)  
会場: 京都芸術劇場 春秋座  
料金: 無料 [申込不要]  
主催: 京都造形芸術大学 大学院  
共催: KYOTO EXPERIMENT、京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター

**10/21 (Sun)** 公開プレゼンテーション@フリンジ“PLAYdom”  
19:30-  
次代を担う演出家・振付家・制作者・プロデューサーによる、京都及び関西の舞台芸術シーンを活性化させるフリンジ・プログラムの新プランを公募し、それを公開の場でプレゼンテーションしてもらいます。ゲスト・コメンテーターからの評価を元に、次年度以降の「フリンジ・パフォーマンス企画」プランを共に考える企画者を1名(組)発掘します。  
ゲスト・コメンテーター: 伊藤達哉 (ゴーチブラザーズ)、中村茜 (プリコグ)、杉原邦生  
会場: 元・立誠小学校 職員室  
料金: 無料 [要申込\*]

**10/22 (Mon)** 舞台芸術制作者ネットワーク・ミーティング (仮称)  
13:00-17:00 <キックオフ・ミーティング>  
舞台芸術の制作実務を推進する人が主体となり、各々の仕事を通じて日々更新される情報やアイデアを交換し共有することで、活動を展開したりつなげるための国際的なオープン・ネットワーク形成を目指す「舞台芸術制作者ネットワーク・ミーティング (仮称)」。そのキックオフ・ミーティングを開催します。  
会場: HOTEL ANTEROOM KYOTO 京都市南区東九条明田町7  
料金: 無料  
申込: お名前、ご所属、お電話番号、E-mailアドレスを明記のうえ、network@parc-jc.orgまでお申込ください。[締切: 10/19]  
主催・お問合せ: 舞台芸術制作者ネットワーク・ミーティング (仮称) 準備会事務局 国際舞台芸術交流センター (PARC) 内  
Tel: 03-5724-4660 Fax: 03-5724-4661 E-mail: network@parc-jc.org  
共催: KYOTO EXPERIMENT  
助成: THE SAISON FOUNDATION

\*各イベントの申込方法  
KYOTO EXPERIMENT事務局まで、お電話 (075-213-5839) もしくは  
公式ウェブサイト (<http://kyoto-ex.jp>) 内申込フォームにてお申込みください。

## アーティスト・イン・レジデンス・プログラム / ARTIST IN RESIDENCE PROGRAM

マルセロ・エヴェリン / デモリション Inc.  
新作『Suddenly everywhere is black with people』のための滞在制作

KYOTO EXPERIMENT 2011にて『マタドウロ (屠場)』を発表し、大きな反響を呼んだマルセロ・エヴェリンが、新作クリエーションのため、再び京都にやってきます。彼のワークショップで出会った日本人若手ダンサーをはじめ、ブラジル・日本・オランダのクリエイターたちが京都に集い、約1ヶ月間の滞在制作を行います。新作『Suddenly everywhere is black with people』は、エリアス・カネッティ『群衆と権力』(1960年)に着想を得て、“集団”や“群衆”を問う作品を目指しています。



マルセロ・エヴェリン / デモリション Inc. + ニューレオ・ド・ディルソル / Marcelo Evelin / Demolition Inc. + Nucleo Do Dircou  
『マタドウロ (屠場)』 / Matadouro (Slaughterhouse) 2011  
photo: Ayako Abe

## フェスティバル・ミーティングポイント

参加アーティストと観客とのコミュニケーションのためのスポットが、  
カフェデザイン flowing KARASUMA にオープン!

観劇前後にドリンクやフードを楽しむだけでなく、ポスト・パフォーマンス・  
トークの会場としてお立ち寄り下さい。

参加アーティストの関連書籍・グッズも販売します。

会場: flowing KARASUMA [Tel: 075-257-1451]

営業時間: 11:30-23:00 [L.O.22:30]

※貸切のため、ご利用いただけない日程がございます。営業時間の変更やイベント情報は  
flowing KARASUMAウェブサイトをご覧ください。



## KYOTO EXPERIMENT Related Events

**9/22(Sat)-10/7(Sun) 11:00-19:00** (last day until 18:00)

Closed on Mondays

### Takuya Matsumi / Photo Exhibition

Introducing photos taken for KYOTO EXPERIMENT 2012

Official booklet

Venue: Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.]

48, 2F Benkeiishi-cho, Nakagyo-ku, Kyoto

Admission: Free

Co-Organized by Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.]

**9/23 (Sun) 16:30-**

### Forum "Body / Disability / Locality - About Thikwa + Junkan Project"

Venue: Former Rissei Elementary School Teachers Room

Admission: Free [No reservation required]

**10/8(Mon) 17:30-**

### Lecture "Dance and Society - Lia Rodrigues's case"

Venue: Kyoto Prefectural Citizen's Hall ALTI

Admission: Free [No reservation required]

**10.8 (Mon)-14 (Sun) 10:00-20:00**

### Ka Fai Choy Soft Machine Video Screening

Venue: Kyoto Art Center Japanese-style room "Meirin"

Admission: Free

**10/14(Sun) 14:00-16:00**

### Emerging Directors' Forum "Performing Arts and Society" @FRINGE "PLAYdom"

Moderator: Akira Yamazaki (Waruishibai)

Panelist: Wataru Kitao (Baobab), Yuichi Kinoshita (Kinoshita-Kabuki), Tomohiko Kyogoku (Kyogoku Tomohiko Dance Project), Pink Chiteijin no.3 (Pink Chiteijin), Naoyuki Miura (Iolo), Tatsuya Mukozaka (Kyoto Roman Pop)

Venue: Former Rissei Elementary School Teachers Room

Admission: ¥500 [Reservation Required]

**10/21(Sun) 14:00-**

### Artist Talk "About datamatics"

Artist: Ryoji Ikeda

Moderator: Akira Asada

Venue: Kyoto Art Theater Shunjuza

Admission: Free [No reservation required]

Presented by Graduate School of Kyoto University of Art and Design

Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT, Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of Art and Design

**10/21(Sun) 19:30-**

### Open Presentation @FRINGE "PLAYdom"

Commentator: Tatsuya Ito (Gorch Brothers), Akane Nakamura (precog), Kunio Sugihara

Venue: Former Rissei Elementary School Teachers Room

Admission: Free [Reservation Required]

**10/22(Mon) 13:00-17:00**

### "Performing Arts Presenters' Network Meeting" (tentative name) Kickoff Meeting

Venue: HOTEL ANTEROOM KYOTO

7, Aketacho Higashi-kujo Minami-ku, Kyoto

Admission: Free

Apply: Email your Name, Occupation, Tel, E-mail address to network@parc-jc.org by 10/19.

Presented by "Performing Arts Presenters' Network Meeting" (tentative name) Executive Office [Japan Center, Pacific Basin Arts Communication (PARC)]

Tel: 03-5724-4660 E-mail: network@parc-jc.org

Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT

Supported by The Saison Foundation

#### \*Reservation

Call KYOTO EXPERIMENT Office (075-213-5839)

or send application form at the official website

(<http://kyoto-ex.jp>)

### ARTIST IN RESIDENCE PROGRAM

Marcelo Evelin / Demolition Inc.

Residency for the creation of new work: *Suddenly everywhere is black with people*

Marcelo Evelin who introduced *Matadouro* and drew an enthusiastic response at KYOTO EXPERIMENT 2011 returns to Kyoto in order to create a new production. Artists from Brazil, Japan and Holland, including young Japanese dancers who Evelin met through his workshop, gather and create the work in Kyoto during their one month residency. *Suddenly everywhere is black with people* is inspired by Elias Canetti's *Crowds and Power* (1960), studying issues of "mass" and "crowds".

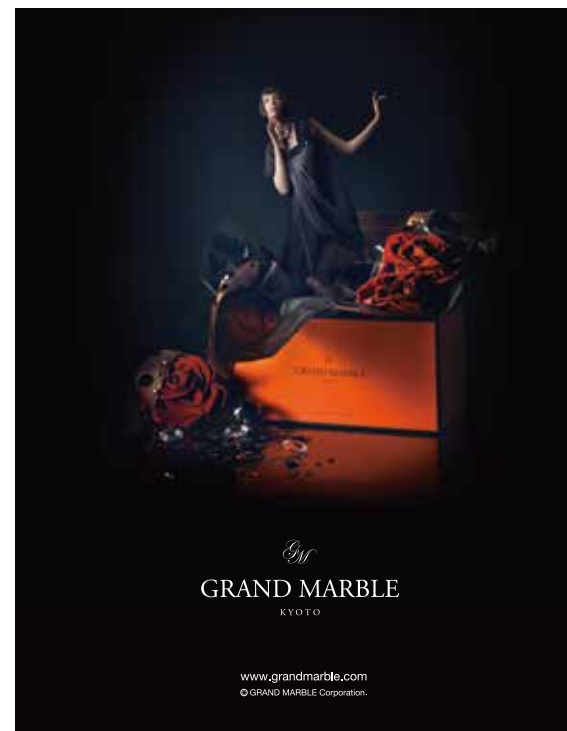
### Festival Meeting Point

Café dining: flowing KARASUMA will be the festival's meeting point. This is a spot to enhance communication between artists and spectators of KYOTO EXPERIMENT. Enjoy food and drinks before and after performances. The café is also the venue for post-performance talks. You can purchase related books and artists goods as well.

Venue: flowing KARASUMA [Tel: 075-257-1451]

Open Hours: 11:30-23:00 [L.O.22:30]

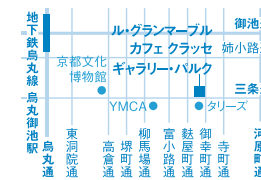
※Due to previous reservations, the cafe may not be used at certain times. Please confirm availability beforehand on the flowing KARASUMA's website.



ル・グランマーブル カフェ クラッセ  
Tel: 075-257-6877



ギャラリー・バルク Gallery PARC  
Tel: 075-231-0706



京都市中京区三条通御幸町北西角三条ありもとビル  
1F・2F  
阪急河原町駅より徒歩10分 / 三条京阪駅より徒歩10分 / 地下鉄東西線京都市役所前駅より徒歩3分

## ニュー・ブランシュ KYOTO 2012 ~パリ白夜祭への架け橋~ -現代アートと過ごす夜-

[www.nuitblanche.jp](http://www.nuitblanche.jp)

**2012.10.5 (Fri) 入場無料**

会場: 京都国際マンガミュージアム、アンスティチュ・フランセ関西、京都芸術センター、  
関西日仏交流会館 ヴィラ九条山ほか

主催: 京都市、アンスティチュ・フランセ関西 (旧関西日仏学館)

### @ 京都国際マンガミュージアム

マチデコ・インターナショナル(ミュージアム壁面を活用した映像作品の上映会)、ライブ・ダンス

18:00-22:00

### @ 関西日仏交流会館 ヴィラ九条山

ヴィラ九条山 オープンデー

20:00-25:00

ヴィラ九条山に滞在する招聘アーティストと気軽に交流できるオープン・デーを開催。

### @ 京都芸術センター

国谷隆志によるインスタレーション

17:00-22:00

現代美術家・国谷隆志によるネオン管を使ったインスタレーション作品の展示。

### @ アンスティチュ・フランセ関西

(旧 関西日仏学館)

ダヴィデ・ヴォンパクと和太鼓ドンによるパフォーマンス

21:40-22:00

振付家/ダンサーのダヴィデ・ヴォンパク(2011年ヴィラ九条山招聘アーティスト)が和太鼓ドンを行うパフォーマンス。  
和太鼓ドン: 森島啓/高橋葉/小平一誠

モノクロームサーカスによるダンス・パフォーマンス  
「Dance in Building 2012」

22:00-22:30

京都を拠点に活躍するコンテンポラリーダンス・カンパニー、モノクロームサーカスが3ヶ月のワークショップによって創作する、サイトスペシフィックなダンス作品。

## 提携プログラム

Affiliated Program

### 五感で感じる和の文化事業 京都創生座

#### 第8回公演『四神記 - 神降る都の物語 -』

Feel Traditional Japanese Culture Project Kyoto Soseiza  
*A Tale of a City and its Four Guardian Gods*

🕒 120 min (再創作 | 世界初演 / Re-Creation | World Premiere)

📅 10/26(Fri) 18:30-🗨️

\*開場は開演の60分前

\*The theater opens 60 min. prior to the performance.

🗨️ プレトーク / Pre-Performance Talk 18:00-

📍 京都芸術劇場 春秋座  
Kyoto Art Theater Shunjuza



未就学児入場不可。  
Children under school age are not accepted into the theater.



photo: Koichi Uchida

『四神記 - 神降る都の物語-』は、歌舞伎、能、狂言、邦楽、日本舞踊などの伝統芸能を一つの舞台上で構成する京都創生座を代表する作品である。3年前の京都での初演ではチケットが完売し、再演を望む声が多く寄せられた。今回、新たな演出を加え改編し、より魅力的な作品へと生まれ変わる。

物語は、はるか昔から四神が守る架空の都市が舞台。自然との調和を象徴する青龍、朱雀、白虎、玄武という四神と、恐れを知らない人の欲望との戦いの結末には、何が待つのか……。それぞれの芸能で表現される四神の美しさ、何層にも重なるエピソードと音楽で、日本の伝統芸能の底力を体感してもらいたい。

A Tale of a City and its Four Guardian Gods is a hallmark of Kyoto Soseiza in which several Japanese theater traditions such as Kabuki, Noh, Kyogen, Japanese music and Japanese dance are assembled in one performance. 2009's Kyoto premier tickets sold out quickly and people have been waiting for it to be restaged. With a new arrangement, the work has evolved in an even more alluring direction. The story takes place in a fictional city guarded by four deities: the blue dragon, red phoenix, white tiger and black tortoise, since ancient times. What is left after the battle between the four deities, the symbol of harmony with nature, and the desires of fearless people? Witness the great potential of Japanese traditional theater through the beauty of the deities represented by each different art form, its music and multilayered episodes.

#### チケット料金 / Tickets

	前売 / In advance	当日 / At the door
一般 / Adult	¥3,000	¥3,500
ユース・学生 / Youth (Up to 25), Student	¥1,500	¥2,000
小・中・高生 / High School Student & Younger	¥1,000	¥1,000

※指定席 / Reserved Seating

\*チケット取扱 KYOTO EXPERIMENTチケットセンター(お電話もしくはオンラインのみ)、他  
Tickets: Kyoto Art Center Box Office (10:00-20:00)

#### 関連レクチャー「伝統芸能の〈舞台裏〉」 / Lecture "Behind-the-scene of traditional theater"

京都の伝統芸能を滞在中の海外ゲストにより深く理解してもらうため、英語通訳を用いたレクチャーを開催します。このレクチャーでは特に「舞台裏」をテーマとして、演者や演目に留まらず、それを支える技術や美意識について解説します。

As a related event for A Tale of a City and its Four Guardian Gods by Kyoto Soseiza on 10/26, a bilingual lecture for international guests to deepen their understanding of Japanese traditional theater will take place. With the theme of "behind-the-scenes", the lecture will not only cover the actors and repertoires, but also introduce the techniques and aesthetic that serve as a backbone of traditional theater. The lecture will be in Japanese and interpreted into English.

日時: 10/26 (Fri) [レクチャー] 16:00-17:00 [舞台裏見学] 17:00-17:30

会場: 京都芸術劇場 春秋座

講師: 橋市郎 (春秋座プロデューサー)

申込: KYOTO EXPERIMENT事務局まで、お電話 (075-213-5839)

もしくは公式ウェブサイト (<http://kyoto-ex.jp>) 内申込フォームにてお申込みください。

Date: 10/26 (Fri) [Lecture] 16:00-17:00 [Back Stage Tour] 17:00-17:30

Venue: Kyoto Art Theater Shunjuza

Lecturer: Ichiro Tachibana (Producer of Kyoto Art Theater Shunjuza)

Apply: Call KYOTO EXPERIMENT Office (075-213-5839)

or send application form at the official website (<http://kyoto-ex.jp>)

出演: 男一片山伸吾 (観世流能楽師シテ方)、武者一豊嶋晃嗣 (金剛流能楽師シテ方)、青龍一市川右近 (歌舞伎俳優)、朱雀一尾上菊之丞 (日本舞踊尾上流)、白虎一河村和重 (観世流能楽師シテ方)、玄武一片山峻佑 (子方)、イノシシー茂山正邦 (大蔵流狂言師)、シカー茂山茂 (大蔵流狂言師)、笛一左鴻泰弘、小鼓一曾和尚靖、大鼓一谷口正壽、太鼓一前川光範、唄一今藤政之祐、今藤小希郎、三味線一柁屋浩基、今藤敏之、邦楽囃子一中村寿慶、藤倉清鷹、望月清三郎、望月善行、笛一藤倉華生、箏一野田友紀、三絃一井口はる菜、尺八一岡田道明、地謡・後見 (観世流) 一味方玄、吉浪壽兎、分林道治、田茂井廣道、深野貴彦、宮本茂樹、河村和晃、地謡・後見 (金剛流) 一豊嶋幸洋

演出: 前原和比古 / 脚本: 平山聡子 / 補綴: 京都創生座プロジェクトチーム / 舞台監督: 大谷みどり (株式会社京都舞台製作所) / 照明デザイン: 宮島靖和 (株式会社流) / 宣伝美術: 鈴木大輔 (DAISUKE SUZUKI DESIGN) / 助成: 平成24年度文化庁優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業 / 制作: 京都芸術センター / 制作協力: KYOTO EXPERIMENT / 主催: 京都市、京都芸術センター

Cast: Shingo Katayama, Koji Teshima, Ukon Ichikawa, Kikunojo Onoe, Kazushige Kawamura, Shunsuke Katayama, Masakuni Shigeyama, Shigeru Shigeyama, Yasuhiro Sakou, Naoyasu Sowa, Masatoshi Taniguchi, Mitsunori Maekawa, Masanosuke Imafuji, Sakirou Imafuji, Hiroki Kineya, Toshiyuki Imafuji, Jukei Nakamura, Kiyotaka Tousha, Seizaburo Mochizuki, Yoshiyuki Mochizuki, Kashou Tousha, Yuki Noda, Haruna Iguchi, Michiaki Okada, Shizuka Mikata, Toshiaki Yoshinami, Michiharu Wakebayashi, Hiromichi Tamoi, Takahiko Fukano, Shigeki Miyamoto, Kazuaki Kawamura, Yukihiro Teshima

Direction: Kazuhiko Maehara / Text: Satoko Hirayama / Dramatization: Kyoto Soseiza Project Team / Stage Manager: Midori Otani / Lighting: Yasukazu Miyajima / Advertising Art: Daisuke Suzuki Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, in Fiscal Year 2012 / Production Managed by Kyoto Art Center / Produced in Co-operation with KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto City, Kyoto Art Center

## Gaze on Japanese Traditional Theater: After staying in Kyoto

伝統芸能へのまなざし ～京都滞在を経て

As part of our affiliated program "Kyoto Soseiza", we asked international art personnel, who had stayed in Kyoto, to write about their experience with Japanese traditional theater. Their perspective on our tradition may bring us new discoveries on the culture we take for granted.

提携プログラム「京都創生座」に関連して、京都に滞在した(している)海外アート関係者に、自身が体験した日本の伝統芸能についてエッセイを寄稿してもらいました。彼/彼女らからの伝統芸能へ向けられたまなざしは、私たちが当たり前としている文化に新しい発見をもたらしてくれるでしょう。

### Short Essay

David Wampach

When I was in Japan for 6 months, in 2011, I had the chance to be part of Bon-Odori. I was invited by a dancer from Kyoto, Arisa Shiraiishi, in Gifu, to different festivals : Shirotori Odori, Gujohachiman and Itoshiro. I had a very strong experience, physically and emotionally. I was dancing all night, in the streets of these 3 villages, wearing Yukata and using Geta, knocking on the floor and following the rhythm of the musicians and singers.

During my journey in Gifu, I have experienced Ryukou Gakusya at the house of Toshiyuki Tsuchitori. I didn't know that I would spend 3 days in his place, waking at 7am, cleaning the wooden floor and then going to work in the field before breakfast. Toshiyuki is also very famous in France because he was working with a theater director, Peter Brook, based in Paris. Toshiyuki was the musical director of the *Mahabharata*. That was an amazing experience too. And also listening the beautiful voice of his dead wife Harue Momoyama. I still listen her traditional music !!!



David Wampach

French choreographer, based in Paris. He had created the following dance pieces: *circonscriit*, *BASCULE*, *QUATORZE*, *AUTO*, *BATTERIE*, *BATTEMENT*, *CASSETTE* and *SACRE*. In 2011, he was in residency in Villa Kujoyama, in Japan, for six months. Actually, he prepares a movie called *RITE* and a solo, *TOUR*. website : [www.davidwampach.eu](http://www.davidwampach.eu)

### Short Essay

ダヴィデ・ヴォンパク

2011年、日本に6ヶ月の間滞在した際、盆踊りに参加する機会があった。京都出身のダンサーである白石ありさに誘われて、岐阜の白鳥おどり、郡上八幡、石徹白の盆踊りに参加した。浴衣と下駄に身をつつみ、歌やお囃子にあわせて3つの村の地で夜通し踊り明かしたのは、身体的にも感情的にも強烈な経験だった。岐阜への旅の途中で、土取利行が設立した立光学会に立ち寄った。そこで朝7時に起床し、朝飯の前に床掃除をする生活を3日間も過ごすことになろうとは、まったく予想していなかった。土取利行は、パリ在住の演出家ピーター・ブルックとコラボレーションしたことでフランスでも有名だ。彼は「マハーバーラタ」の音楽を担当している。学舎での体験も、土取の今は亡き妻である桃山晴衣の美声を聞いたことも忘れられない思い出だ。今でも時々彼女の三味線の音色に耳を傾ける。

ダヴィデ・ヴォンパク

パリを拠点に活動するフランス人振付家。2011年に6ヶ月間ヴィラ九条山に滞在。KYOTO EXPERIMENT 2011ではダンス・ワークショップを実施した。映画『RITE』およびソロ公演『TOUR』を制作中。

### More than Meets the Eye

Sandee Chew

There is something unassumingly mesmerizing about watching Japanese traditional theatre live. Perhaps it's the novelty. Perhaps there's more than meets the eye. Kabuki is said to be the most extravagant of Japanese traditional theatre—lavish costumes, elaborate make-up, special effects and skilled narrative singing and dancing. However, as a theatre practitioner coming from a generation bombarded with CGI and fast-action movies, what I notice first is the stylized stillness and subtlety in a large, open space with general lighting. Set, costume and sound designs are stereotypical and structured. Performances are presentational, and the stage-hands, musicians and stage devices are often visible, although discreet. Look closer. Everything is actually distilled. The stillness makes subtlety apparent. Subtly crafted sounds, movements and rhythms draw the subconscious. And the aesthetic is richly embedded with deep symbolism. Realism matters less than transcendence. A restless modern audience is compelled to calmness and being present in order to enjoy the intricacies on stage.



Sandee Chew

Malaysian lighting designer and actor with interest in audience development. In 2009, she received a KLUE Blue Chili nomination, and BOH Cameronian Arts Award for her lighting work. She is also a design consultant at Stage Centre Line Associates, and a founding member of Shakespeare Demystified.

### Kabuki— my personal invitation to Japanese culture

Marcus Hernig

For me, the grand old Kabuki theatre on Shijo is outstanding and invisible at the same time. It lies a little bit off "Shijo street" just behind a busy bus stop so it always has the touch of a shy but kimono dressed Japanese woman hiding behind a screen. But as a beautiful East Asian lady it is nevertheless outstanding because it bears so much the vivid life of traditional Japanese theatre, colourful and moving. It moves the audience like me because it reflects all feelings of mankind showing sad and often morbid contents of Japanese history or joyful and humorous "rakugo" contents refreshing the minds after hour long performances. But the most striking thing in traditional Japanese "kabuki" theatre is the audience. Real "kabuki aficionados" do not watch but live the performance. That reminds us of the glorious past of theatre, also in Europe, when people were not condemned to silence in theatre but shouted, commented and really "lived" the day with the troupe on stage.



Marcus Hernig

Director of German Artists' residence, Goethe-Institut Villa Kamogawa, Kyoto

### 様式の向こうにあるもの

サンディー・チュー

日本の伝統芸能を生で鑑賞するのは、何ともいえない魅力がある。その目新しさが理由だろうか。もしかしたら、もっと他の隠された理由があるのかもしれない。歌舞伎は、派手な衣装に手のこんだ化粧、特殊効果と経験に培われた発声および舞いを伴い、日本の伝統芸能の中でも最も華美な演目とされている。しかし、CGや最新の特殊効果をふんだんに用いたアクション映画を見ていく世代の劇場関係者の目からすると、その華美さよりも、様式化された静寂さとオープンな空間の使い方に対してシンプルな照明がほどこされていることが印象的だ。セット、衣装、および音響には一定の型があり、それらは体系化されている。役者は表現豊かで、黒子や伴奏者は控えめながら観客から見えている。それはどういふことか。すべてが純化されているのだ。静寂は精妙な動きを感知することを可能にし、繊細な音、動き、リズムは見る者の潜在意識を呼び起こす。そこには豊かな象徴性に裏付けられた美学がある。歌舞伎においてより重要なのは、リアリズムではなく超越なのである。せわしない現代の観客が舞台上の巧みな芸術を堪能するためには、暫し立ちどまって「今を生きる」ことが求められる。

サンディー・チュー

マレーシア人照明デザイナー／俳優。観客の育成に関心を持つ。2009年、照明デザイナーとしての活動がBOH Cameronian Arts アワードを受賞。同年、KLUE Blue Chili アワードにノミネートされる。Stage Centre Line Associatesのデザインコンサルタントおよび Shakespeare Demystifiedの創立メンバーでもある。

### 歌舞伎—私の日本文化紹介

マルクス・ヘルニヒ

私にとって南座は、際立った存在であると同時に目に見えない存在でもある。四条通りの慌ただしいバス停から少し入った所にある劇場は、着物を着た控えめな女性が屏風の後ろに隠れている様な趣きがある。東アジアの女性の美しさを携えながらも、その内には色鮮やかで感動的な日本の伝統芸能のダイナミックさを抱えている。歌舞伎は、鳥肌がたつほどの悲しみを始めとする、日本の歴史の中で人々が経験してきた様々な感情や落語の様なユーモアに満ちた歓喜を描き出すことで観客を魅了する。そうした歌舞伎の特徴の中でも、最も印象的なのは観客である。本物の歌舞伎愛好家は、生の舞台しか見ないという。それはヨーロッパの劇場がそうであった様に、観客が静かに鑑賞することが常識ではなく、劇中も持て囁いたり感想を述べ合うことで、舞台を見ているその時を「生」きるといふ演劇の古き良き歴史を思い起こさせてくれる。

マルクス・ヘルニヒ

ゲーテ・インスティテュート・ヴィラ鴨川 アーティストレジデンス プログラムディレクター



**主催**

京都国際舞台芸術祭実行委員会  
(京都市、京都芸術センター、公益財団法人京都市芸術文化協会、京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)

**共催**

立誠・文化のまち運営委員会、京都府立府民ホールアルティ

**協力**

Gallery PARC[グランマーブル ギャラリー・パルク]

**協賛**

株式会社資生堂

**助成**

平成24年度文化庁国際芸術交流支援事業  
公益財団法人セゾン文化財団  
公益財団法人アサヒビル芸術文化財団  
EU・ジャパンフェスト日本委員会

**認定**

社団法人企業メセナ協議会

**京都国際舞台芸術祭実行委員会**

**委員長**

太田耕人(京都芸術センター アドバイザリーボードメンバー / 京都教育大学教授)

**副委員長**

森山直人(演劇批評家 / 京都造形芸術大学教授 / 同舞台芸術研究センター主任研究員)

**委員**

櫻井明弘(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課担当課長)  
富永茂樹(公益財団法人京都市芸術文化協会業務執行理事 / 京都大学人文科学研究所教授)  
渡邊守章(演出家 / 京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター所長・教授)

**監事**

城本聡美(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課長)  
長谷川昌史(公益財団法人京都市芸術文化協会事務局長)

**顧問**

茂山あきら(狂言師 / NPO法人京都アーツミーティング理事長)  
千宗室(裏千家家元)  
平田オリザ(劇作家・演出家 / 劇団「青年団」主宰)  
村井康彦(公益財団法人京都市芸術文化協会理事長)

**京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局**

**プログラム・ディレクター兼事務局長**  
橋本裕介

**事務局**

垣脇純子  
門脇俊輔  
下田真耶  
丸井重樹

**広報**

多胡真佐子

**制作**

小倉由佳子  
川崎陽子(京都芸術センター)  
川原美保(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)  
藤田瑞穂(京都芸術センター)  
本郷麻衣  
和田ながら

**制作協力**

西山葉子

**テクニカル・コーディネーター**

大鹿展明  
尾崎聡  
夏目雅也

**インターン**

芦高郁子  
西垣聡美

**翻訳**

板井由紀  
マリア・ルシア・コレア  
ジャスティス・ウォーレン  
エリック・ルオン

**ドキュメント・コーディネーター**

竹内厚

**アートディレクション**

原田祐馬 (UMA / design farm)

**デザイン**

山副佳祐 (UMA / design farm)

**ウェブデザイン**

FIELD

**京都国際舞台芸術祭アドバイザリーボード**

小崎哲哉(編集者 / REALTOKYO)  
古後奈緒子(舞踊研究・批評 / dance+)  
萩原麗子(京都芸術センター)

Organized by Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee  
(Kyoto City, Kyoto Art Center, Kyoto Arts and Culture Foundation, Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of Art and Design)

Co-Organized by Rissei Cultural City Steering Committee, Kyoto Prefectural Citizen's Hall ALTI, Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.]

Sponsored by Shiseido Co.,Ltd.

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2012, The Saison Foundation, Asahi Beer Arts Foundation, EU-Japan Fest Japan Committee

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

**Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee**

Chairman:  
Kojin Ota (Kyoto Art Center Advisory Board Member / Professor at Kyoto University of Education)

Vice Chairman:  
Naoto Moriyama (Theater Critic / Professor of Kyoto University of Art and Design)

Committee Members:  
Akihiro Sakurai (Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City, Culture and Art Planning Section Unit Head)  
Shigeki Tominaga (Executive Board Member of Kyoto Arts and Culture Foundation / Professor at Institute for Research in Humanities, Kyoto University)  
Moriaki Watanabe (Theater Director / Director and Professor of Kyoto Performing Arts Center)

Supervisors:  
Satomi Shimomoto (Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City, Culture and Art Planning Section Head)  
Masashi Hasegawa (Secretary-General of Kyoto Arts and Culture Foundation)

Advisors:  
Akira Shigeyama (Kyogen Artist / President of NPO Kyoto Arts Meeting)  
Soshitsu Sen (Urasenke Grand Tea Master)  
Oriza Hirata (Playwright, Theater Director / Director of Seinendan)  
Yasuhiko Murai (President of Kyoto Arts and Culture Foundation)

**Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Office**

Program Director / Executive Director:  
Yusuke Hashimoto

Office:  
Junko Kakiwaki  
Shunsuke Kadowaki  
Maya Shimoda  
Shigeki Marui

Public Relations:  
Masako Tago

Production Coordinators:  
Yukako Ogura  
Yoko Kawasaki (Kyoto Art Center)  
Miho Kawahara (Kyoto Performing Arts Center)  
Mizuho Fujita (Kyoto Art Center)  
Mai Hongo  
Nagara Wada

Production Support:  
Yoko Nishiyama

Technical Coordinators:  
Nobuaki Oshika  
So Ozaki  
Masaya Natsume

Interns:  
Ikuko Ashitaka  
Satomi Nishigaki

Translation:  
Yuki Itai  
Maria Lucia Correa  
Justus Wallen  
Eric Luong

Document Coordinator:  
Atsushi Takeuchi

Art Direction:  
Yuma Harada (UMA / design farm)

Design:  
Keisuke Yamazoe (UMA / design farm)

Web Design:  
FIELD

Kyoto International Performing Arts Festival Advisory Board  
Tetsuya Ozaki (Editor / REALTOKYO)  
Naoko Kogo (Performing Arts Reseacher / Critic / dance+)  
Reiko Hagihara (Kyoto Art Center)

## 公式プログラムチケット料金 / Tickets

	アーティスト・演目 Artist, Title	一般 Adult	ユース (25歳以下) ・学生 Youth (Up to 25), Student	シニア (65歳以上) Senior (65 & Up)	小・中・ 高校生 High School Student & Younger	席種 Seat	チケットぴあ Pコード Ticket Pia P-Code
1	地点 Chiten はだかの王様 The Emperor's New Clothes	¥3,000	¥2,500	¥2,500	¥1,000	自由 Free Seating	421-910
2	砂連尾理 / 劇団テイクパ+循環プロジェクト Osamu Jareo / Thikwa + Junkan Project 劇団テイクパ+循環プロジェクト Thikwa + Junkan Project	¥2,500	¥2,000	¥2,000	¥1,000	自由 Free Seating	421-911
3	レイジーブラッド featuring Reykjavik!® Lazyblood featuring Reykjavik! The Tickling Death Machine	¥3,000 (+1drink ¥500)	¥2,500 (+1drink ¥500)	¥2,500 (+1drink ¥500)	—	オール スタンディング Standing Room only	421-912
4	杉原邦生 / KUNIO Kunio Sugihara / KUNIO KUNIO10 更地 Sarachi (Vacant Lot)	¥2,500	¥2,000	¥2,000	¥1,000	自由 Free Seating	421-913
5	リア・ロドリゲス Lia Rodrigues POROROCA	¥3,500	¥3,000	¥3,000	¥1,000	自由 Free Seating	421-914
6	チョイ・カファイ Ka Fai Choy "Notion: Dance Fiction" and "Soft Machine"	¥2,500	¥2,000	¥2,000	¥1,000	自由 Free Seating	421-915
7	高嶺格 Tadasu Takamine ジャパン・シンドローム ~step2. "球の内側" Japan Syndrome ~ step2. "Inside of the ball"	¥3,000	¥2,500	¥2,500	¥1,000 (高校生のみ)	自由 Free Seating	421-916
8	池田亮司 Ryoji Ikeda datamatics [ver.2.0]	¥3,000	¥2,500	¥2,500	¥1,000	指定 Reserved Seating	421-917
9	ポツドール Potudo-ru 夢の城 -Castle of Dreams Castle of Dreams	¥3,500	¥3,000	¥3,000	—	自由 Free Seating	421-918
10	ASA-CHANG& 巡礼 ASA-CHANG&Junray 新・アオイロ劇場 NEW Aoiro Theater	¥3,500	¥3,000	¥3,000	¥1,000	自由 Free Seating	421-920
11	ビリー・カウィー Billy Cowie Tango de Soledad / The Revery Alone / In the Flesh			無料 Free			—

当日券は前売券+¥500(小・中・高校生は同額)

Plus ¥500 for adult and youth / student same day purchases. (High School Student & Younger are ¥1,000.)

\*レイジーブラッド featuring Reykjavik! は、1drink(¥500)が当日別途必要です。Attendants are required purchase 1 drink ticket.

### Notes:

- \*各公演の受付開始は開演の1時間前です。
- \*ユース・学生、シニア、高校生以下チケットをご購入の方は当日、証明書のご提示が必要です。
- \*車椅子でお越しのお客様は、各料金の¥500引き(介助者1名無料)となります。(お席をこちらで指定する場合がございます。お問合せはKYOTO EXPERIMENT チケットセンターまで)
- \*10名様以上でご来場の際には団体割引を設けております。詳細はKYOTO EXPERIMENT チケットセンターまでお問い合わせください。

- \*年齢により入場を制限させていただく場合がございます。詳細は各公演ページをご覧ください。
- \*主催者の都合により公演中止となる場合をのぞき、ご購入後のキャンセル、日時の変更はできません。
- \*演出の都合上、開演後、入場を制限させていただく場合がございます。その際も払い戻しはいたしません。

## チケット取扱 / Ticket Information

### KYOTO EXPERIMENTチケットセンター

(11:00-20:00, 9/16までは日曜日)

窓口 | 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2  
京都芸術センター2F  
Tel | 075-213-0820  
オンライン(要事前登録) | <http://kyoto-ex.jp> (PC)  
<http://kyoto-ex.jp/m> (MOBILE)

### 京都芸術センター(10:00-20:00)

窓口販売のみ

### チケットぴあ

Tel | 0570-02-9999  
オンライン | <http://pia.jp/t>

### KYOTO EXPERIMENTセット券

複数観劇される方へお得なセット券です。公式プログラムからご希望の演目を組み合わせてご観劇ください。  
\*当日購入不可 \*1演目につき1回のみ \*本人のみ有効  
\*各3演目券は日時指定のうえ、お申し込み下さい。

#### フリーパス(公式プログラム有料10演目) | ¥20,000

公式プログラムのすべてをご堪能いただけます。  
【枚数限定】

#### 学生フリーパス(公式プログラム有料10演目) | ¥12,000

公式プログラムのすべてをご堪能いただけます。(要学生証提示)  
【枚数限定】

#### 3演目券 | ¥7,500

好きな3演目を選んでご覧いただけます。

#### 学生3演目券 | ¥6,000

学生にお得なセット券。(要学生証提示)

#### 海外カンパニー3演目券 | ¥6,900

下記、海外カンパニー4演目の中から3演目を選べるお得なセット券。  
2. 砂連尾理 / 劇団テイクパ+循環プロジェクト、  
3. レイジー・ブラッド featuring Reykjavik!、5. リア・ロドリゲス、6. チョイ・カファイ

取扱=KYOTO EXPERIMENT チケットセンター

### Notes

- \* Theater reception opens 1h prior to the performance.
- \* ID required for youth / student, senior and high school student & younger tickets.
- \* Accessible Tickets are a ¥500 discount from the regular price and include one complimentary ticket for the helper. We may guide you to specific seats. Please contact the KYOTO EXPERIMENT ticket center.
- \* The group rate is applied to groups of more than 10 people. Please contact the KYOTO EXPERIMENT ticket center for details.

### KYOTO EXPERIMENT Ticket Center

(11:00-20:00, Closed Sundays until 9/16)

Box Office | Kyoto Art Center 2F  
Tel | 075-213-0820  
Online | <http://kyoto-ex.jp>

### Kyoto Art Center (10:00-20:00)

Box Office only

### Ticket Pia (Japanese only)

Tel | 0570-02-9999  
Online | <http://pia.jp/t>

### KYOTO EXPERIMENT Coupon Tickets

3 performances coupon tickets are a great deal for those who would like to attend more than one performance. You can combine 3 shows of your choice from our official program.

\*Advance only \*Limited one showing of each performance  
\*Verified holder only  
\*Please specify the date and time of each performance.

#### Free Pass (for all the 10 official programs) | ¥20,000

You can enjoy all the performances from our official program.  
[Limited number]

#### Free Pass (for all the 10 official programs) [for student] | ¥12,000

You can enjoy all the performances from our official program. (ID requires)  
[Limited number]

#### 3 performances | ¥7,500

You can choose 3 performances of your preference.

#### 3 performances [for student] | ¥6,000

Discount coupon tickets for students.  
(ID requires)

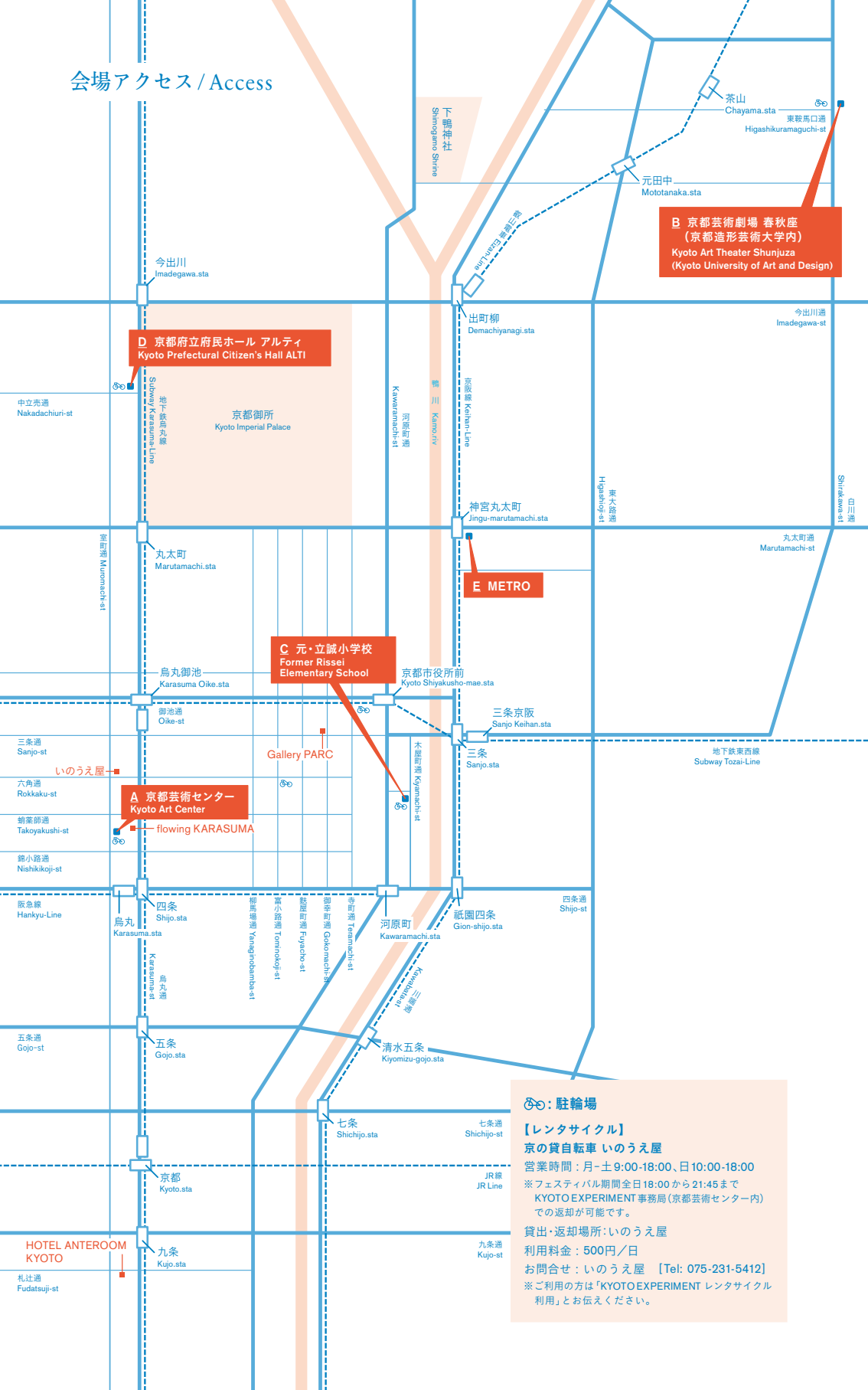
#### 3 international performances | ¥6,900

You can choose 3 performance from below 4 titles.  
2. Osamu Jareo / Thikwa + Junkan Project  
3. Lazyblood featuring Reykjavik!  
5. Lia Rodrigues  
6. Ka Fai Choy

Available at KYOTO EXPERIMENT Ticket Center

- \* Some performances have age restrictions. Please refer to the specific performance information for details.
- \* No refund or date change will be accepted after a ticket has been purchased, except in the case of cancellation of a performance for unforeseen reasons.
- \* Entrance to some performances may be refused after curtain time. Please note that no refund will be made in case you are late for the performance.

# 会場アクセス / Access



**🚲: 駐輪場**  
**【レンタサイクル】**  
 京の貸自転車 いのうえ屋  
 営業時間：月～土 9:00-18:00、日 10:00-18:00  
 ※フェスティバル期間全日 18:00 から 21:45 まで  
 KYOTO EXPERIMENT 事務局（京都芸術センター内）  
 での返却が可能です。  
 貸出・返却場所：いのうえ屋  
 利用料金：500円/日  
 お問い合わせ：いのうえ屋 【Tel: 075-231-5412】  
 ※ご利用の方は「KYOTO EXPERIMENT レンタサイクル  
 利用」とお伝えください。

## A 京都芸術センター / Kyoto Art Center

〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2  
 546-2, Yamafushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto  
 Tel: 075-213-1000 E-mail: info@kac.or.jp  
 Website: <http://www.kac.or.jp/>

・地下鉄烏丸線「四条駅」、阪急京都線「烏丸駅」下車、22・24番出口より徒歩5分  
 ※駐車場なし・駐輪場あり



## B 京都芸術劇場 春秋座 (京都造形芸術大学) / Kyoto Art Theater Shunjuza (Kyoto University of Art and Design)

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都造形芸術大学内  
 2-116, Uryuyama Kitashirakawa, Sakyo-ku, Kyoto  
 Tel: 075-791-8240 E-mail: k-pac@kuad.kyoto-art.ac.jp  
 Website: <http://www.k-pac.org/>

・地下鉄烏丸線「北大路駅」(北大路バスターミナル)より、市バス204系統「高野・銀閣寺」ゆき「上終町京都造形芸大前」下車すぐ  
 ・京阪本線「三条駅」より、市バス5系統「岩倉」ゆき「上終町京都造形芸大前」下車すぐ  
 ・阪急京都線「河原町駅」(四条河原町)より、市バス5系統「岩倉」ゆきまたは、市バス3系統「百万遍・上終町京都造形芸大」ゆき「上終町京都造形芸大前」下車すぐ  
 ・京阪電車「出町柳駅」から叡山電車に乗り換え、「茶山駅」下車 徒歩約10分  
 ※駐車場なし・駐輪場あり(原付・バイクはご遠慮下さい)



photo: Toshihiro Shimizu

## C 元・立誠小学校 / Former Rissei Elementary School

〒604-8023 京都市中京区蛸薬師通河原町東入備前島町310-2  
 310-2, Bizenjima-cho, Nakagyo-ku, Kyoto

・阪急京都線「河原町駅」下車、1a 出口より北へ徒歩3分  
 ・京阪本線「祇園四条駅」下車、4・5号出口より北西方向へ徒歩5分  
 ※駐車場・駐輪場なし(駐輪は市営先斗町駐輪場[有料]をご利用ください。)



photo: Shunsuke Yamashita

## D 京都府立府民ホール アルティ / Kyoto Prefectural Citizen's Hall ALTI

〒602-0912 京都市上京区烏丸通一条下龍前町590-1  
 590-1, Tatsumae-cho, Kamigyo-ku, Kyoto  
 Tel: 075-441-1414 E-mail: hall@alti.org  
 Website: <http://www.alti.org>

・地下鉄烏丸線「今出川駅」下車、6番出口より南へ徒歩5分  
 ・京阪「出町柳駅」2番出口より、市バス201系統「千本今出川・みぶ」ゆき、または、203系統「北野天満宮・西大路四條」ゆき、「烏丸今出川」下車、烏丸通を南へ徒歩5分。  
 ※駐車場なし・駐輪場あり



## E METRO

〒606-8396 京都市左京区川端通丸太町下下堀町82 恵美須ビルBF  
 BF, Ebisu Bldg. 82, Shimotsutsumi-cho, Sakyo-ku, Kyoto  
 Tel: 075-752-4765 E-mail: info@metro.ne.jp  
 Website: <http://www.metro.ne.jp/>

・京阪「神宮丸太町駅」2番出口階段を上りきるまでにあります。  
 ・地上からお越しの方は、川端丸太町交差点東南の京阪「神宮丸太町駅」入口からお入り下さい。  
 ※駐車場・駐輪場なし





# カレンダー / Calendar

		9 / September								10 / October																上演時間													
アクセス		22 sat	23 sun	24 mon	25 tue	26 wed	27 thu	28 fri	29 sat	30 sun	1 mon	2 tue	3 wed	4 thu	5 fri	6 sat	7 sun	8 mon	9 tue	10 wed	11 thu	12 fri	13 sat	14 sun	15 mon	16 tue	17 wed	18 thu	19 fri	20 sat	21 sun	22 mon	23 tue	24 wed	25 thu	26 fri	27 sat	28 sun	Duration
1	地点 Chiten はだかの王様 <i>The Emperor's New Clothes</i>	A	14:00 19:00	13:00 18:00	15:00 19:00	17:00 19:30																																	60 min
2	砂連尾理 / 劇団テイクバ+ 循環プロジェクト Osamu Jareo/Thikwa + Junkan Project 劇団テイクバ+循環プロジェクト Thikwa + Junkan Project	C	16:00 19:00	15:00 18:00																																			60 min
3	レイジーブラッド featuring Reykjavik! Lazyblood featuring Reykjavik! The Tickling Death Machine	E				21:30	21:30																																75 min
4	杉原邦生 / KUNIO Kunio Sugihara / KUNIO KUNIO10 更地 Sarachi (Vacant Lot)	C					19:30	19:30		16:00 19:00	16:00 19:00																											90 min	
5	リア・ロドリゲス Lia Rodrigues POROROCA	D															20:00	16:00																				60 min	
6	チョイ・カファイ Ka Fai Choy "Notion: Dance Fiction" and "Soft Machine"	A																					20:00	17:00														80 min	
7	高嶺格 Tadasu Takamine ジャパン・シンドローム ~step2. "球の内側" Japan Syndrome ~step2. "Inside of the ball"	A																											20:00	14:00 19:30	17:00							未定	
8	池田亮司 Ryoji Ikeda datamatics [ver.2.0]	B																																17:00			55 min		
9	ポツドール Potudo-ru 夢の城 - Castle of Dreams Castle of Dreams	C																																		15:00 20:00	15:00 20:00	70 min	
10	ASA-CHANG & 巡礼 ASA-CHANG & Junray 新・アオイロ劇場 NEW Aoiro Theater	A																																		17:00 20:00	18:00	60 min	
11	ビリー・カウィー Billy Cowie Tango de Soledad / The Revery Alone / In the Flesh	A																																				-	
	フリンジ "PLAYdom"	C																																					
	五感で感じる和の文化事業 京都創生座 Feel Traditional Japanese Culture Project Kyoto Soseiza	B																																				120 min	
	関連イベント Related Events		フォーラム																																				

※ 各演目「□」がついた回は終演後ポスト・パフォーマンス・トークを予定しております。 □ Post-Performance Talk  
 ※ 各演目「◎」がついた回は託児サービスをご利用いただけます(有料:1,500円、要事前予約)。予約お申込みの締切は各公演の5日前となります。  
 予約・問合せ: KYOTO EXPERIMENT事務局 075-213-5839 (平日11:00-19:00)

ロゴについて

KYOTO EXPERIMENTのキーワードである「出会い / 衝突 / 対話」がぶつかり合い、外へ広がろうとする様子をビジュアル化したロゴ。600種類を越えるパターンがあり、進化する創造の場を表現している。

KYOTO EXPERIMENT's logo is a visual representation of the confrontation and expansion of its three keywords: encounter, collision, and dialogue. It is a design with more than 600 forms, which stand for the evolution of the creative spaces.

logo design: UMA/design farm



KYOTO EXPERIMENT | 京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局  
Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Office

京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2 京都芸術センター内  
Kyoto Art Center, 546-2, Yamafushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto

Tel | +81(0)75-213-5839

E-mail | [info@kyoto-ex.jp](mailto:info@kyoto-ex.jp)

<http://kyoto-ex.jp>

発行日 | 2012年8月29日

Published Aug. 29, 2012

アートディレクション: 原田祐馬 (UMA/design farm)

デザイン: 山副佳祐 (UMA/design farm)

編集: 多胡真佐子、和田ながら

写真 (p1, p10-11, p56-57, p70-71): 松見拓也

印刷・製本: 柏村印刷株式会社

Art Direction: Yuma Harada (UMA/design farm)

Design: Keisuke Yamazoe (UMA/design farm)

Edit: Masako Tago, Nagara Wada

Images (p1, p10-11, p56-57, p70-71): Takuya Matsumi

Print: KASHIMURA CO.,LTD.

©KYOTO EXPERIMENT

**KYOTO EXPERIMENT 2012**

京都国際舞台芸術祭